秋田城跡

昭和61年度秋田城跡発掘調査概報

秋田市教育委員会
秋田城跡調査事務所

昭和61年度秋田城跡発掘調査概報

秋　田　城　跡

秋田市教育委員会
秋田城跡調査事務所

序　　文

秋田城跡の発掘調査は，昭和47年から開始して早いもので今年度で第三次５ケ年計画が終了いたします。

この間を振り返ってみますと，昭和48年にはこれまで土塁と考えられていた外郭線が築地塀であることが確認されました。また同53年には，井戸跡から初めての木簡が発見され，中でも「天平六年月」とクギ書きされた木簡の出土によって『続日本紀』記述の天平五年創建が裏付けられたことは，大きな成果でした。さらに，同56年以降継続して行った政庁域の調査では，漆紙文書の発見によって秋田城で実施された古代税制の一部が明らかになり，次いで中心施設である正殿跡が発見され最も意義のある調査となりました。

来年度からは，第四次５ケ年計画が開始されます。発掘調査の問題も山積しておりますが，遺跡保存，文化財保護の啓蒙という意味からも今後の最大の事業であります環境整備事業も近々に予定をされております。

このように多大な成果を上げることができましたのも，各関係機関とりわけ文化庁，秋田県教育委員会，宮城県多賀城調査研究所から常日頃頂いているご指導，ご協力の賜物と喪心より深く感謝申し上げる次第でございます。

昭和62年３月31日

秋田市教育委員会
教育長　高　泉　宏　作

目　　次

Ⅰ　調査の計画……1

Ⅱ　第44次発掘調査……2

1）調査経過……2

2）検出遺構と出土遺物……9

3）各層位出土遺物……59

Ⅲ　第45次発掘調査……59

1）調査経過……59

2）検出遺構と出土遺物……60

Ⅳ　第46次発掘調査……61

1）調査経過……61

2）検出遺構と出土遺物……62

Ⅴ　まとめ……68

例言

○本概報の執筆，編集は秋田城跡調査事務所の小松，日野があたった。また図面，遺物整理には，調査補佐員佐々木さゆり，横山伸司と補助員の石塚信子，斎藤尚子の協力を得た。

○墨書土器の解読は，国立歴史民俗博物館助教授平川南氏のご指導を得た。

○第44次調査の鍛冶遺構切り取り作業は，東北歴史資料館村山斌夫氏のご指導を得た。

○発掘調査では下記の方々及び各関係機関のご指導，ご助言を頂いた。（順不同）

多賀城跡調査研究所，東北歴史資料館，熊谷市教育委員会，岡田茂弘，伊藤玄三，岩見誠夫，狩野久，国生尚，伊藤稔，工楽善通，牛川喜幸，佐藤信，河野本道

凡　例

◦遺物

：黒色処理

：転用硯

※土器断面を黒色に塗りつぶしてあるのが須恵器である。

◦遺構図・土層断面図

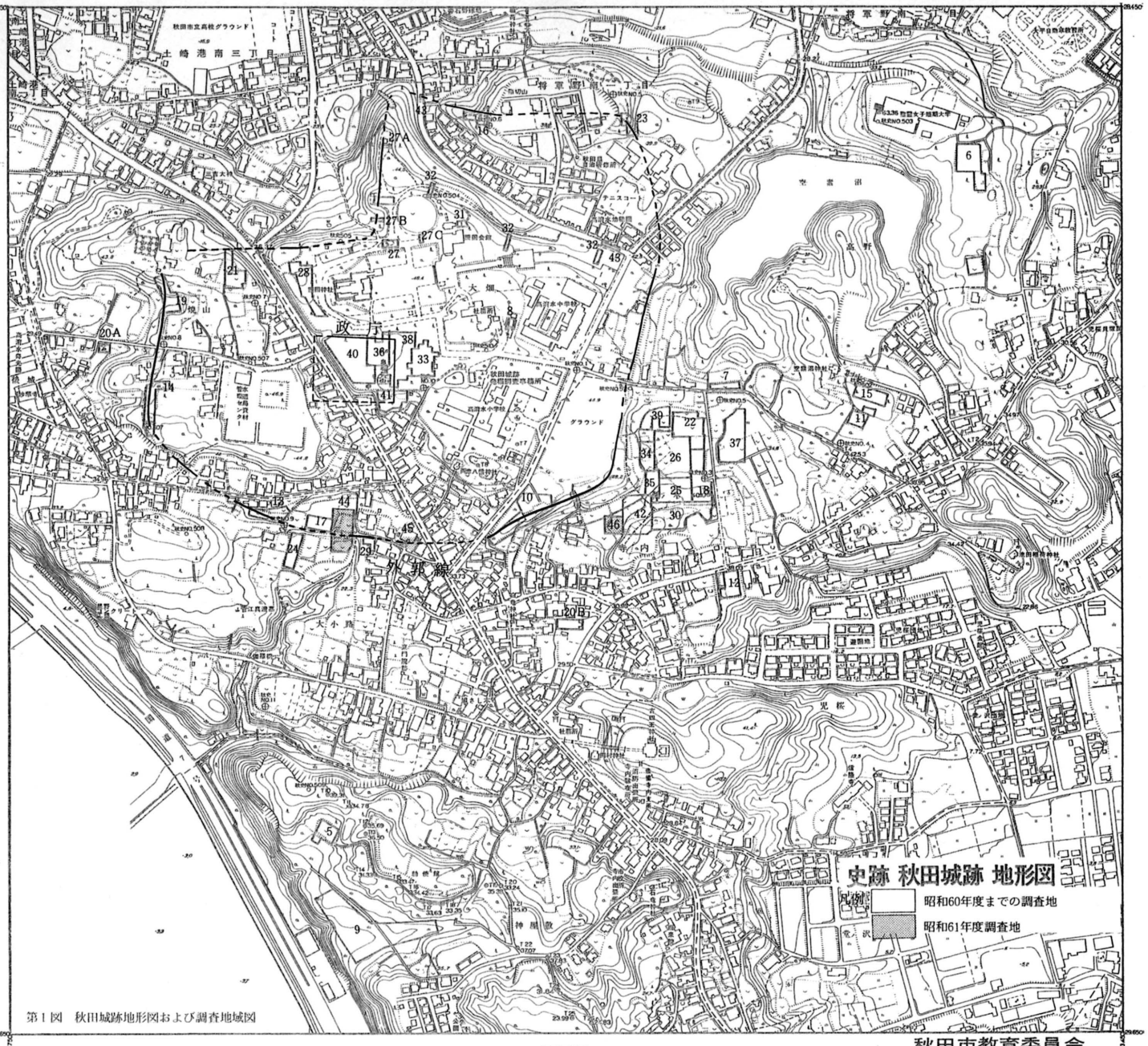
：築地および基盤層

：遺物包含層

：飛砂層

：寺内層

◦遺物写真はすべて1／3である。



第1図　秋田城跡地形図および調査地域図

秋田市教育委員会

Ⅰ　調査の計画

昭和61年度の発掘調査は，南外郭線の中央部と鵜ノ木地区それに，住宅改築に伴う緊急調査を実施した。

発掘調査事業費は，総事業費1,400万円のうち国庫補助額50％（700万円），県費補助額25％（350万円），市費負担額25％（350万円）である。

調査計画は下記表Ⅰのように立案した。

表Ⅰ　発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘面積　㎡（坪）	調査実施期間
第44次	大小路地区	1,000㎡（303坪）	4月10日～8月9日
第45次	鵜ノ木地区西部	800㎡（242坪）	8月10日～10月31日

今年度は，上記計画以外に第44次調査と並行して住宅改築に伴う緊急調査を実施したため，これを第45次調査とし，当初の第45次調査を第46次調査とした。

第44次調査は，南外郭線のほぼ中央部に当ることから，南門の究明と政庁南門に至る大路遺構の検出を目的に実施した。その結果，調査地区の東南部は後世の削平が激しく当初目的とした遺構は検出できなかった。しかし，北東部では南北方向に延びる数条の溝遺構が検出されたことから，道路遺構の西側側溝の可能性が考えられる。政庁の中軸線は，調査区の東3ｍ～5ｍに設定されるが住宅等の制約から調査不可能であった。

第45次調査は，住宅改築に伴う緊急調査であったが，掘り方と築地崩壊土が確認されたことから，外郭線に伴う櫓状掘立柱建物跡と推定された。

第46次調査は，昨年度調査期間の制約のため未精査であったSB021掘立柱建物跡の精査と，その西方を新たに実施した。その結果，竪穴住居跡，掘立柱建物跡，土取り穴等の遺構が検出された。

昭和61年度の発掘調査実施状況は次のとおりである。

表Ⅱ　発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘面積　㎡（坪）	調査実施期間
第44次	大小路地区	1,269㎡（304坪）	4月8日～10月1日
第45次	大小路地区	18㎡　（5坪）	5月6日～5月17日
第46次	鵜ノ木地区西部	504㎡（152坪）	10月6日～11月18日

昭和61年9月20日には，第44次調査の現地説明会を開催し，約110名の一般市民及び県外からの参加者が得られた。

Ⅱ　第44次発掘調査

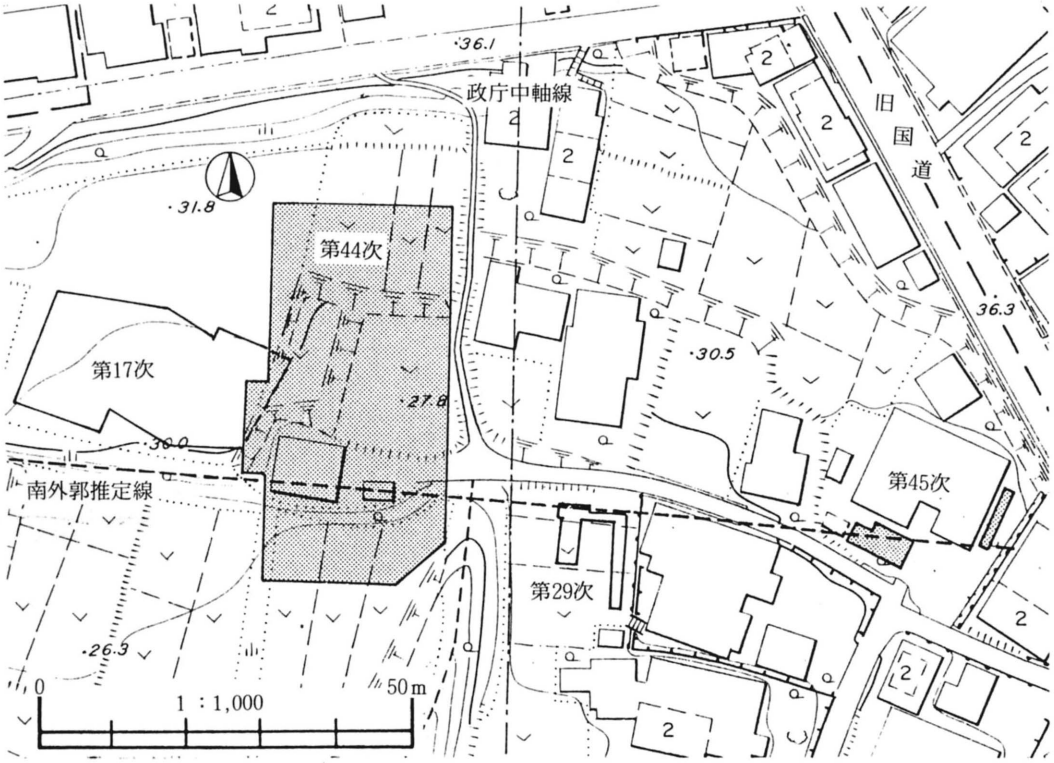
1）調査経過

第44次調査は，寺内字大小路の外郭線中央部を対象に４月８日から10月１日まで実施した。調査面積は1,269㎡である。

機材運搬，草刈後測量開始。測量原点№９より測角し，調査地基準杭をX＝－56,173ｍ，Y＝－166,755ｍ，H＝31,744ｍとした（４月10日）。約１カ月で全調査地の表土及び旧耕作土除去作業を終了した（５月16日）。この間，第45次として長谷川宅現状変更による調査を実施した。

調査区北西部からKNラインまで第Ⅲ～第Ⅴ層とした褐色，赤褐色砂質土を掘り下げた結果，ほぼ全面に径20㎝～40㎝前後の小ピット群が検出された。しかし数量が多い上，不規則なため建物跡と確認できたのは，比較的掘り方の大きいSB843のみである。なお，同層からは，完形も含めて多量の赤褐色土器が出土している。

KMラインの南側は，２ｍ程低い畑に４グリッドの拡張区を設け表土除去作業を実施した（30日）。LA－12～15からKMラインは，最近まで民家及び豚舎があったため古代の包含層はほとんど認められず，表土を除去すると地山砂上に近世，現代までの撹乱土壙が認められるに過ぎない（６月５日）。ただ，KM－12～15グリッドでは，炭化物，焼土，黄白色粘土が版築状をなす互層



挿図１　第44次，45次調査周辺地形図

堆積が認められたが性格付けはできなかった（６日）。南拡張区西側では，瓦小片を多く含む黄色粘土層が検出されたことから，築地崩壊土の可能性が考えられたため，さらに西に１グリッド拡張した。その結果，粘土を埋土とする東西に延びる溝状遺構SA898が検出された。

調査区を北に移動し，これまで検出されていた第Ⅵ層面のSB843，小ピット群SA912の平板実測を開始し，同時にその掘り下げを実施した。また，土層断面ベルトも実測，除去後最上層遺構面の全景写真を撮り，遺物を取り上げた。

LC～LA－16～18グリッドの第Ⅵ層を掘り下げたところ，南北に長いSI848A．Bが検出された。しかし，床面の一部が堅いものの西壁，南壁のプランが不明確で，正確な規模は把握できなかった。埋土からは多くの赤褐色土器が出土したが，須恵器は小片を含めてもほんの一部である（21日）。同竪穴住居跡の北，東側でも数軒の竪穴住居跡が検出された。

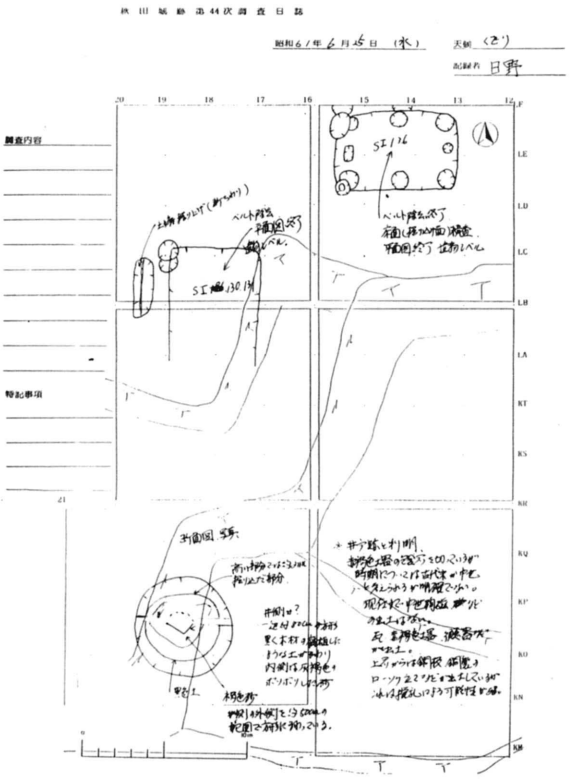
北地区は，第Ⅴ～Ⅶ層面の遺構がほぼ検出されたので，住居跡中心の全景撮影を行った（７日）。

KO－17，18グリッドで検出されていた大きなプランは，その埋土を掘り下げたところ，方形の井側痕跡が認められたことから井戸と判断された。また，前述のKMラインに見られた版築状互層堆積は，築地とは異なることから性格を追及すべく一層づつ除去したが，遺構らしいプランは確認することができなかった。

調査区中央部から北部の西壁に沿って５個の掘り方が検出された。掘り方は，第Ⅵ層に覆われているが，いずれも抜取り穴と思われる掘り込が認められる。北，南，東側には，同様の掘り方が認められないことから西に延びる南北棟建物と考えられた。なお，北地区周辺の竪穴住居跡群は，共通測量ポイントを設定し，図面接合を考慮にいれて平板実測を行った。

北地区は，第Ⅵ，Ⅶ層を除去し焼土が多量に出土する第Ⅷ層面をあらわす。

SE855西側精査の結果，第17次調査で西半分を調査済みのSI206，さらに同住居跡を切るSD251が検出された。調査地全域で焼土面（第Ⅷ層）をあらわしたが，同面の竪穴住居跡は検出できなかった。しかし，遺構に伴わない土器が単独にしかも，完形に近い形で出土することから，何らかの遺構が存在した可能性をうかがわせ



挿図２

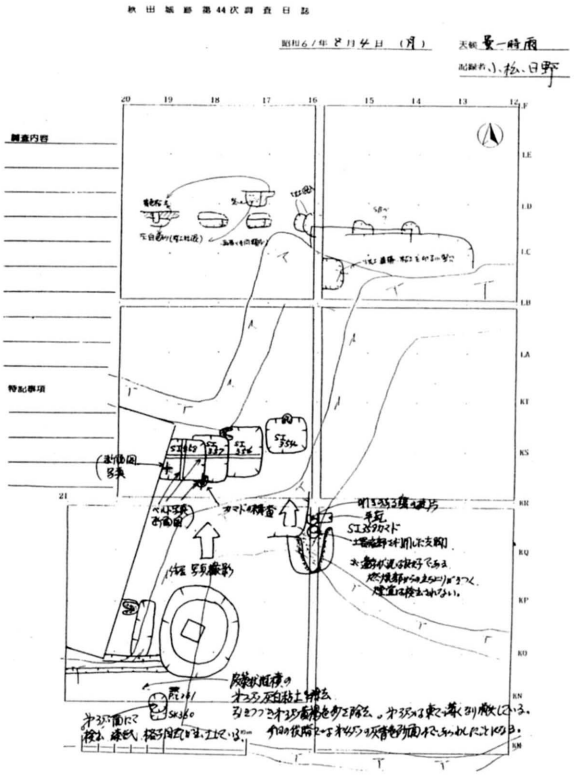
た。南拡張区を除く全景撮影（21日）。

北地区の第Ⅷ層焼土面を除去したところ，中央部で数個所の焼土遺構が検出された。SX322,325がそれである。炉床には黄白色粘土を張り，その上面が焼面と化している。遺構群の周辺からは，土器と共に少量の鉄滓，羽口それにSX322からは，幅２㎜～５㎜，厚さ0.5㎜程の鉄片が出土している。同様の焼土遺構は，西側でも認められたが（SX350），鉄滓，羽口等が出土しないこと，焼土内から白い骨粉が認められることから，全く性格の異なる焼土遺構と考えられる（25日）。

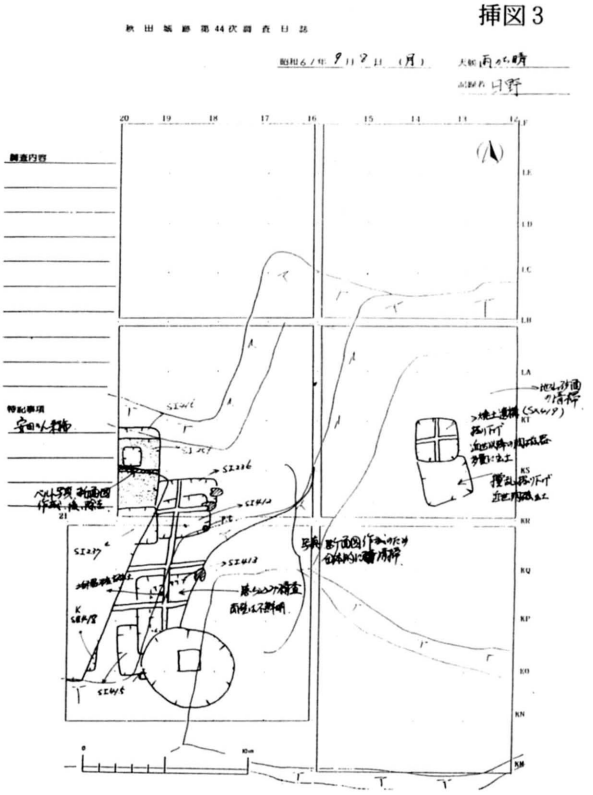
前述の調査区西側で検出されたSB845の北から２個目と３個目の掘り方の中間で鍛冶炉が検出された。検出層位は第Ⅸ層である（30日）。本遺構は調査終了後，東北歴史資料館の村山斌夫氏の指導のもとで「遺構切り取り作業」を実施した。

調査区の中央部は，第Ⅸ層以下で多くの竪穴住居跡が検出された。かなり重複が激しい上，遺存状況が悪く，必ずしも明確な前後関係は把握できなかった（８月４日）。南北に延びる建物SB889も検出されたが，掘り方に重複が認められることから同位置で建て替えられたものと考えられる。旧期のものは第Ⅷ層焼土面下，新期のものは焼土面を切って造営されている。

北西部では，最下層から火災住居が検出された。壁には割り板を横に並べ，数個所を細い杭で止め，床には禾本科植物（カヤ）と思われる炭化植物がビッシリ敷かれ

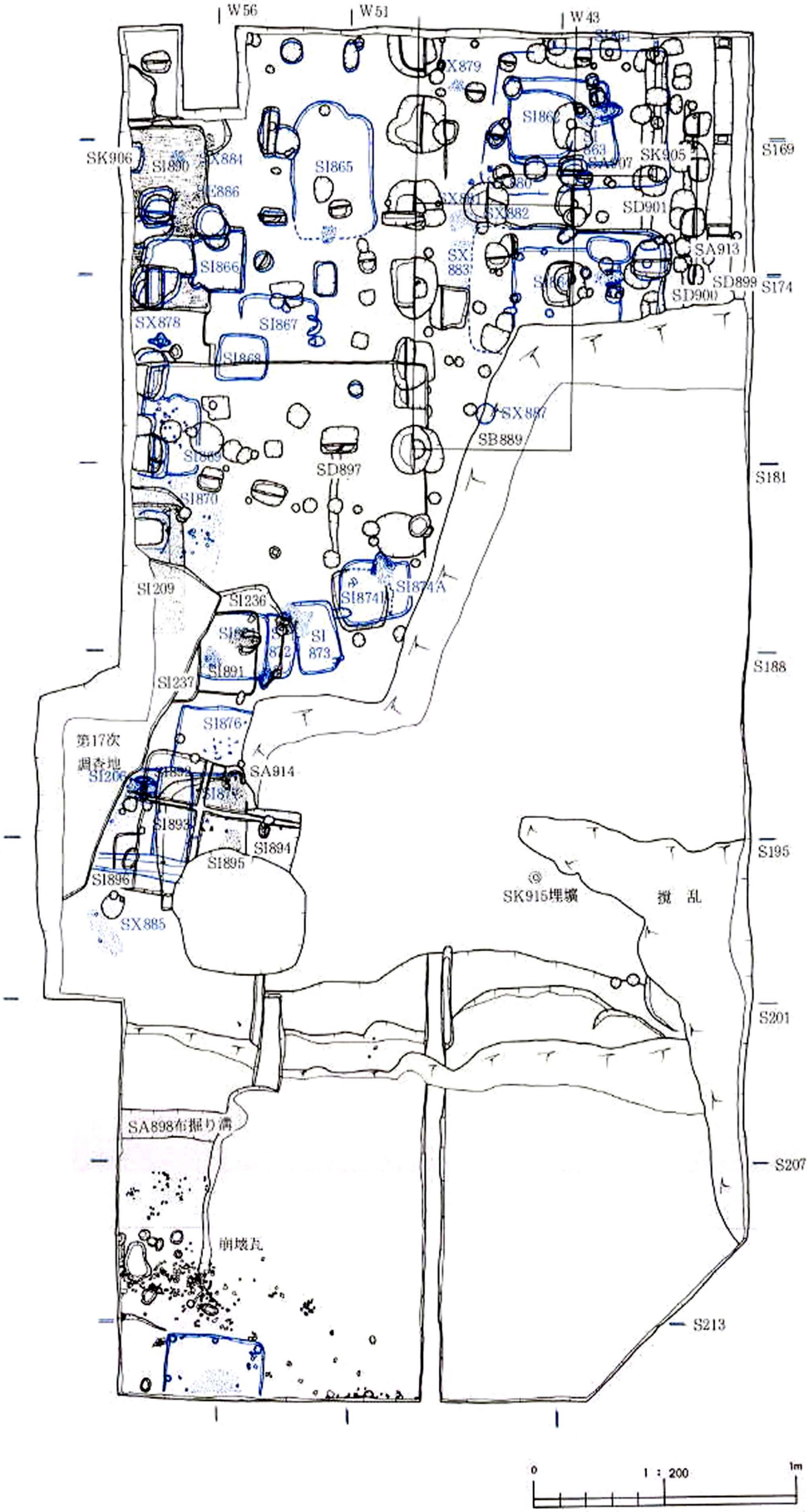


挿図３



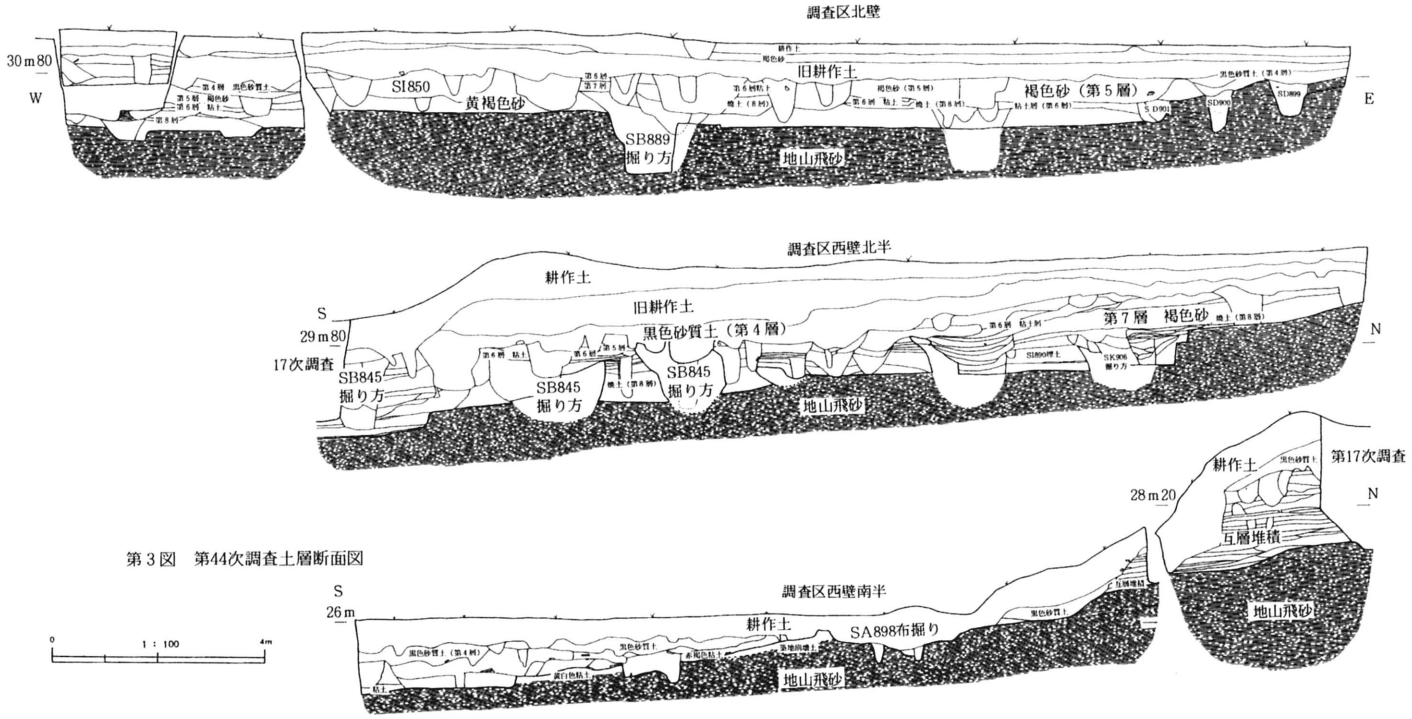
挿図４

SD856
SI851
SK908
SI850
SI852
SI846
SI853
SK902
SB843
SI849
SD857A
SI847
SK910
SK911
SI848
SD860
SD857B
SB844
SA912ピット群
SI854
SD858
SK904
SD859
SE855



第２図　第44次検出遺構図

黒：下層遺構面
青：第９層遺構面

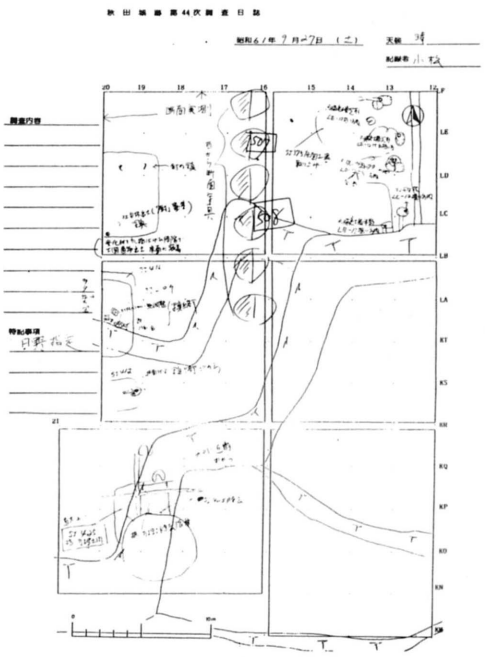


第３図　第44次調査土層断面図

ている。

調査区南では，築地崩壊土の瓦層を掘り下げる（27日）。この段階で崩壊土を切るSI875が検出された（９月17日）。SE855と周辺の住居跡群の精査を行いSI893を検出した（９月５日）。なお，SE855は井側内部を底面まで掘り下げ，長円形の曲物痕を確認した直後，崩落したため深さを記録した後埋めもどした（11日）。

細部の精査と並行して12日から19日まで全域の実測を行う。櫓り方設定については，調査地の高低差が大きいため，水糸レベルを北から各々30.40ｍ，29.40ｍ，27.90ｍ，26ｍの４段階とした。　調査中であったが，９月20日に現地説明会を開催し，110名の参加者を得た。同日午前中は,全景写真，各遺構細部撮影を行った。



挿図５

SE855に北接するSI893東側では，SI894が検出され床面より内黒丸底土師器坏が出土している（26日）。

各掘り方及び調査区東，西，南，北壁の断面図を作成し10月１日すべての調査を終了した。

２）検出遺構と出土遺物

○上層遺構面　（第２図，図版２・４）

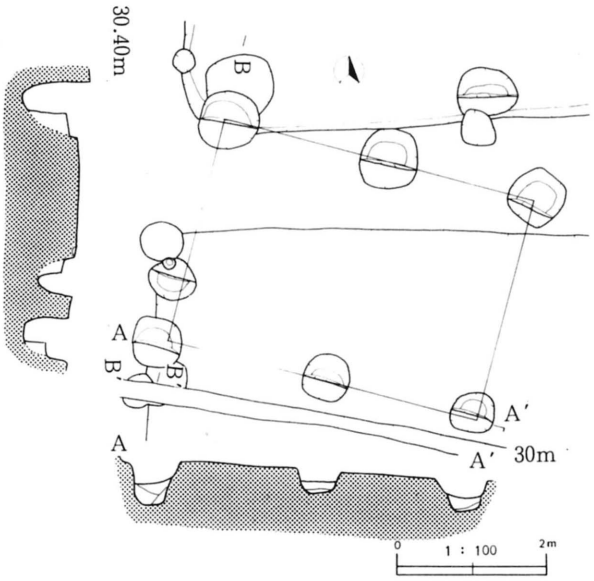
第５層褐色砂層から，第８層焼土面までに確認した遺構面である。

SB843建物跡　（第４図，図版５）

第５層で検出した梁間１間（３ｍ），桁行２間（2.1ｍ＋2.1ｍ）の東西棟掘立柱建物跡である。建物方位は，西梁間が北で東に約13度振れる。柱掘り方は径50cm～70cm，深さは40cm～60cmで，埋土は暗褐色砂質土である。

SB844建物跡　（第５図）

第５層で検出したSB843と同じ規模，掘り方，埋土の掘立柱建物跡である。梁間１間（３ｍ），桁行２間（2.1ｍ＋2.1ｍ）の東西



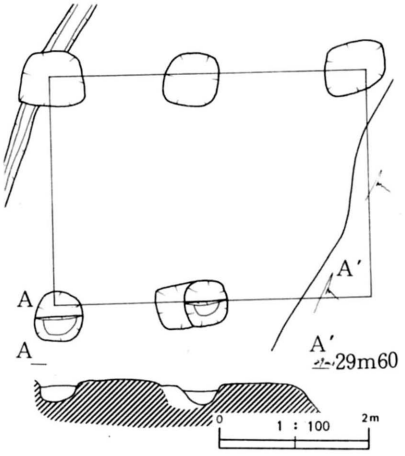
第４図　SB843建物跡

棟で，建物方位は，西梁間が北で西に約４度振れている。

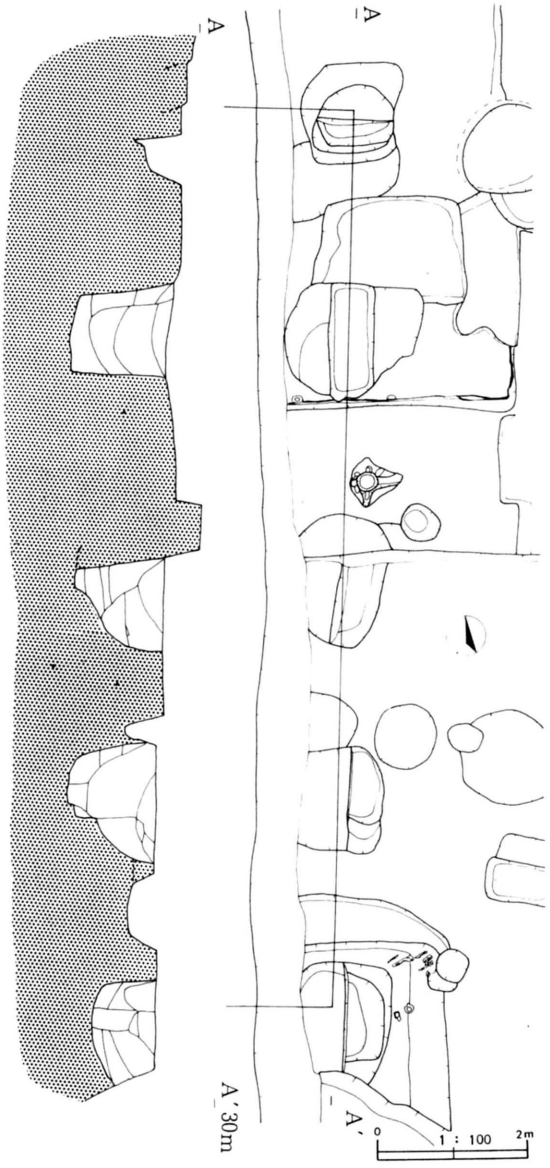
SB845建物跡　（第６図）

第６層粘土層を除去した段階でプランを確認した南北４間（３ｍ＋３ｍ＋３ｍ＋３ｍ）の建物で，西側は調査区外にあり，全体の規模については不明である。抜取り穴には，多量の粘土が入り込んでおり，掘り方にも新旧の重複が観察されている。新掘り方には，焼土，炭化物が混入しており，直径1.5ｍ，深さ1.2ｍと規模の大きいものである。

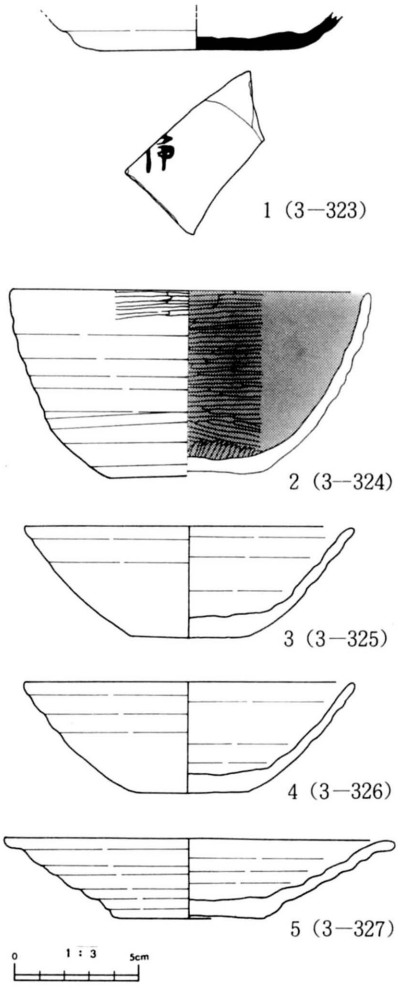
SA912ピット群　（第２図，図版２・４）



第５図　SB844建物跡



第６図　SB845建物跡



第７図　SB845建物跡出土遺物

SB845建物跡出土遺物（第７図，図版29）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	須　恵　器	掘り方埋土	ヘラ切り		墨書「浄」
2	土　師　器	掘り方埋土	糸切り	体下端，底部周縁ケズリ	
3	須　恵　器	掘り方埋土	糸切り		
4	須　恵　器	掘り方埋土	糸切り		
5	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り		

SA912小ピット群出土遺物（第８図，図版29・30）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	須　恵　器	掘り方埋土	ヘラ切り	体下端ケズリ	墨書「金」
2	須　恵　器	掘り方埋土	ヘラ切り		墨書
3	須　恵　器	掘り方埋土	ヘラ切り		墨書「山人」
4	須　恵　器	掘り方埋土	ヘラ切り		墨書「三」
5	須　恵　器	掘り方埋土	ヘラ切り		墨書「二」
6	須　恵　器	掘り方埋土	ヘラ切り		墨書「官」か
7	須　恵　器	掘り方埋土	ヘラ切り		墨書「下」
8	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り	体下端回転ケズリ	
9	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り	体下端底部全面回転ケズリ	
10	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り	体下端回転ケズリ	墨書「上」か
11	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り		
12	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り		
13	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り		
14	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り		
15	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り		墨書「中食」
16	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り		
17	赤褐色土器	掘り方埋土			墨書「器口」
18	赤褐色土器	掘り方埋土			墨書「掾」
19	赤褐色土器	掘り方埋土	ヘラ切り		墨書
20	赤褐色土器	掘り方埋土	糸切り		底部穿孔
21	土　師　器	掘り方埋土		非ロクロ，内外叩き	

SD857A溝出土遺物（第９図，図版31）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	赤褐色土器	埋　　土			墨書
2	土　　錘	埋　　土			

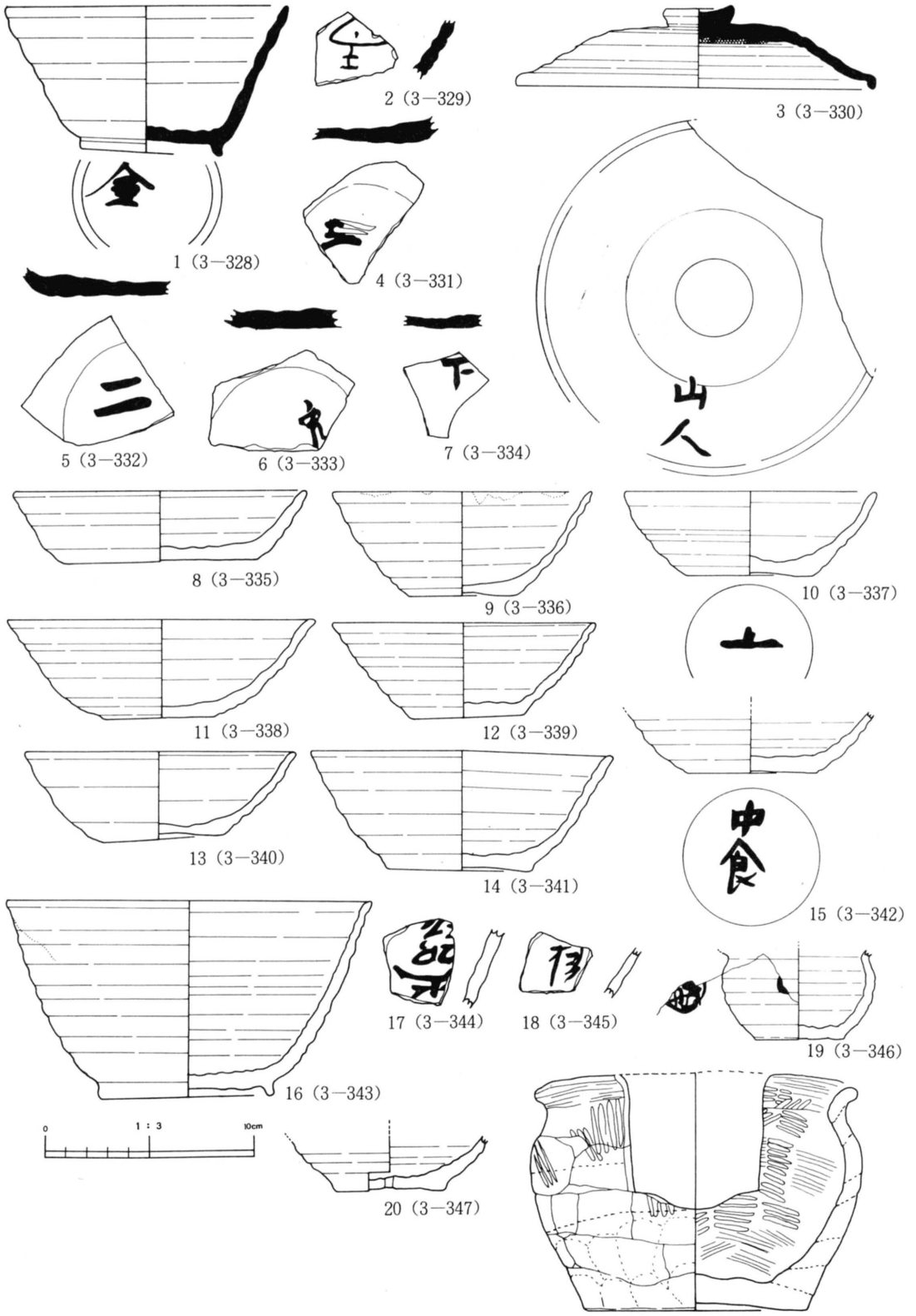
第５層褐色砂，第６層粘土層面を中心に検出された，直径20cm～60cmのピット，柱穴状の小掘り方，小土壙群である。ピット，小掘り方は，配置が不規則で建物としての組合せも不明であり，埋土も黒色，暗褐色砂質土の類似する埋土であることから性格不明のピット，土壙群としてまとめた。

SD856～859溝跡　（第２図，図版２・４）

第５層褐色砂面で検出した暗褐色砂質土を埋土とする溝である。幅40cm～70cm，深さ30cm～40cmで，SD857Aと交わるSD857Bを除き，すべて東西方位で東で南に振れている。方位の近似するSD856，857，859などは，同時期の可能性が考えられる。

SD860溝跡　（第２図，図版10）

発掘基準線とほぼ一致し，東西に延びる幅30cm，深さ30cmの溝である。SI848によって壊されて

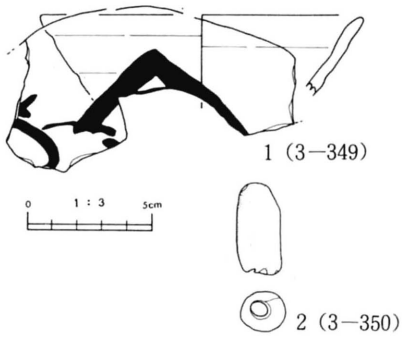


第８図　第６層SA912小ピット群出土遺物

おり，それより古い。

SI846竪穴遺構　（第10図，図版10）

東西７ｍ，南北5.1ｍの長方形のプランで，各辺に３本の直径50cm～80cmの円形，楕円形の掘り方が伴う。柱掘り方は深さが床面から50cm～70cmで柱痕跡は直径20cmの円形である。カマドの付設がないことから，通常の居住を目的とする竪穴住居跡とは性格の異なるもので，第33次調査，第36次調査で検出し，工房と推定した遺構の小規模なものと考えられる。



第９図　SD857A溝出土遺物

SI847竪穴遺構　（第12図，図版11）

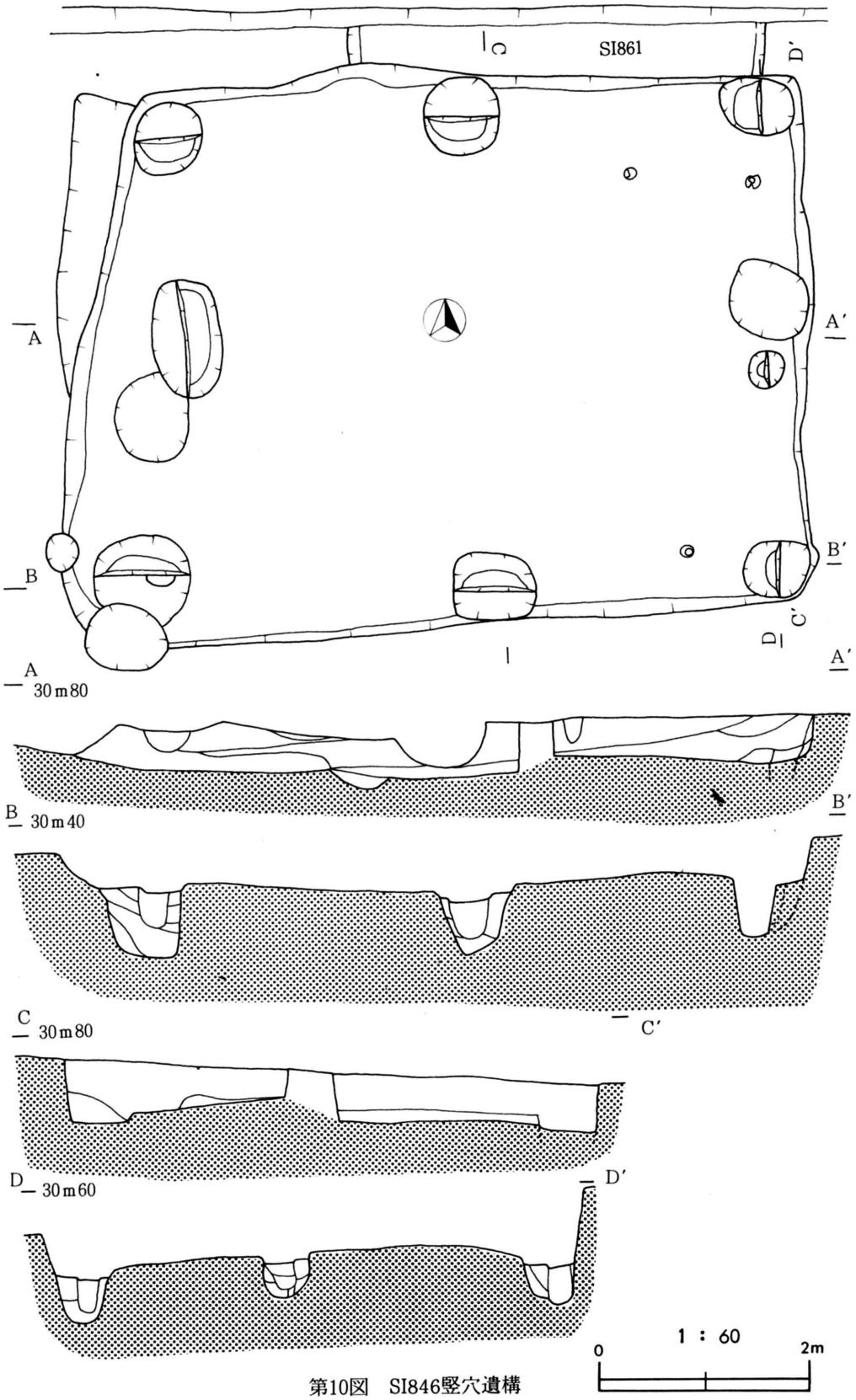
SI846の南で南北に並ぶ状態で検出された同規模の竪穴遺構である。南東部を中心に後世の削平を受けて全体は不明であるが，東西7.2ｍ，南北4.8ｍ，北辺，西辺に各々３本の柱掘り方が伴う。西半部の床面には，一面に炭化物の堆積が認められ，地床炉状の焼面が観察されている。北辺では，壁直下で幅10cmの溝を検出している。

SI848竪穴遺構　（第14図，図版９）

東西５ｍ，南北9.2ｍの長方形プランで，南西コーナー部を中心に削平されている。遺存状態の良い北壁で深さ35cm，北西の床面に焼土，炭化物が認められるがカマド，炉等の付設はない。SI 846，847のような壁沿いの柱掘り方もなく，これらとは性格が異なる可能性がある。埋土の一部に堅い粘土面が形成され，炭化物が散布しており，埋まりきる前に一時的に生活面として使用されていたことが考えられる。

SI846竪穴遺構出土遺物（第11図、図版33・34）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	掘り方	ヘラ切り		墨書「大」
2	土師器	埋土		内黒	
3	赤褐色土器	埋土	糸切り		
4	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「厨」
5	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「厨」
6	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「厨」
7	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「口所」
8	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「厨」
9	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「厨上」
10	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「厨」
11	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「秋田」
12	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「口田」
13	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「驛口」
14	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「厨」
15	赤褐色土器	埋土	糸切り		釘書「丈」
16	須恵器	掘り方	ヘラ切り		転用硯
17	青磁	埋土			線刻

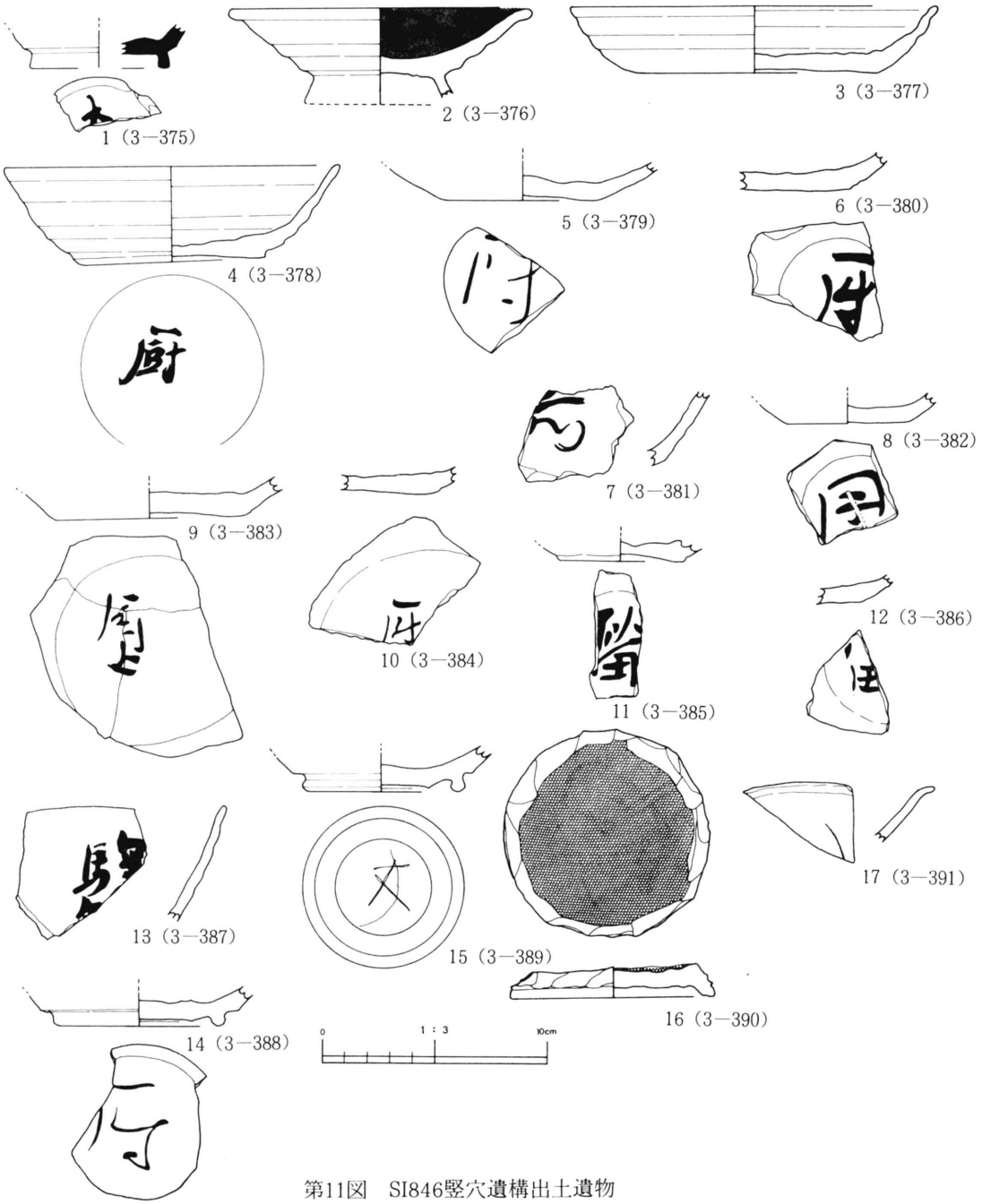


第10図　SI846竪穴遺構

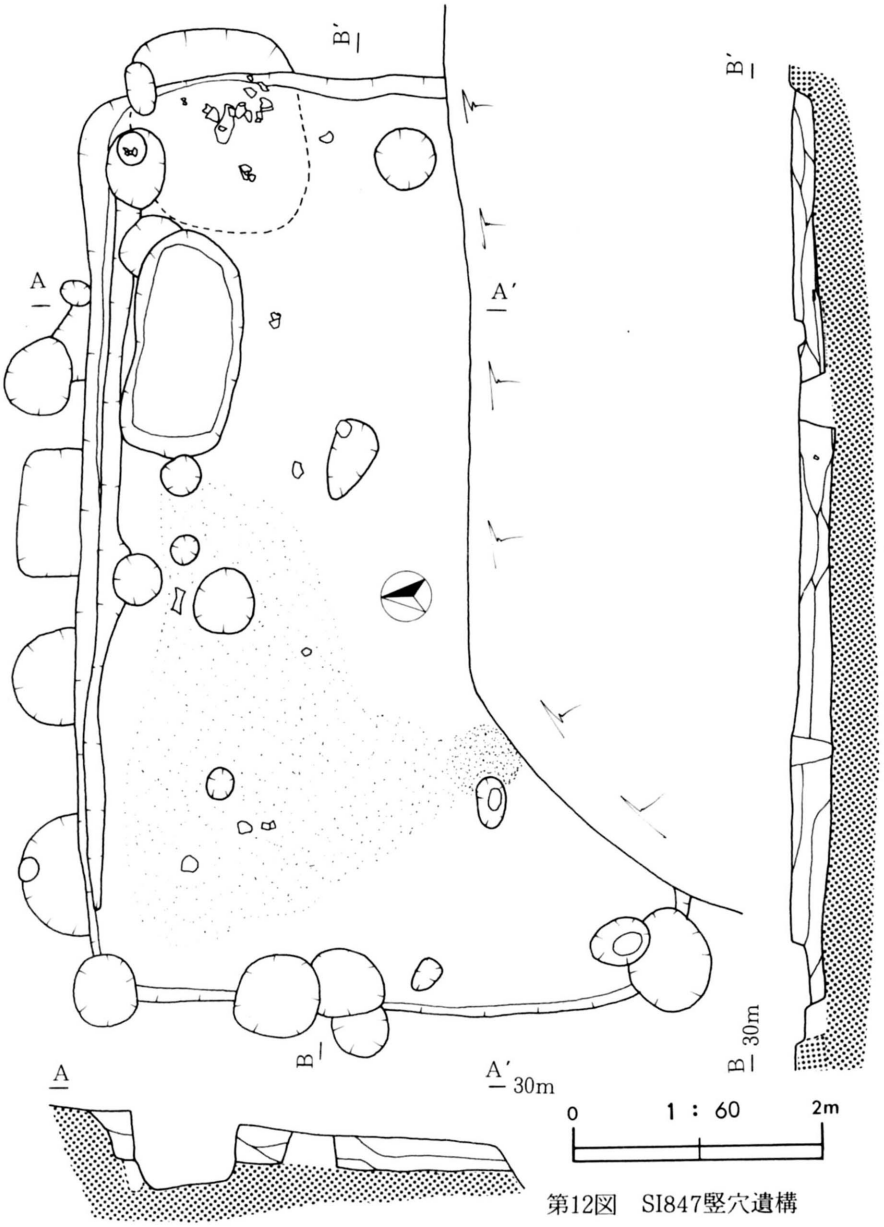
SI849竪穴住居跡　（第16図，図版10）

東西4.4m，南北は削平されており不明である。東壁にカマドが付設されているが，削平のため痕跡のみである。なお，南の焼土は床面の下に位置しており，本遺構に伴うものではない。SI848と重複しており，それより古いものである。

SI850～853竪穴遺構　（第20図，図版４）



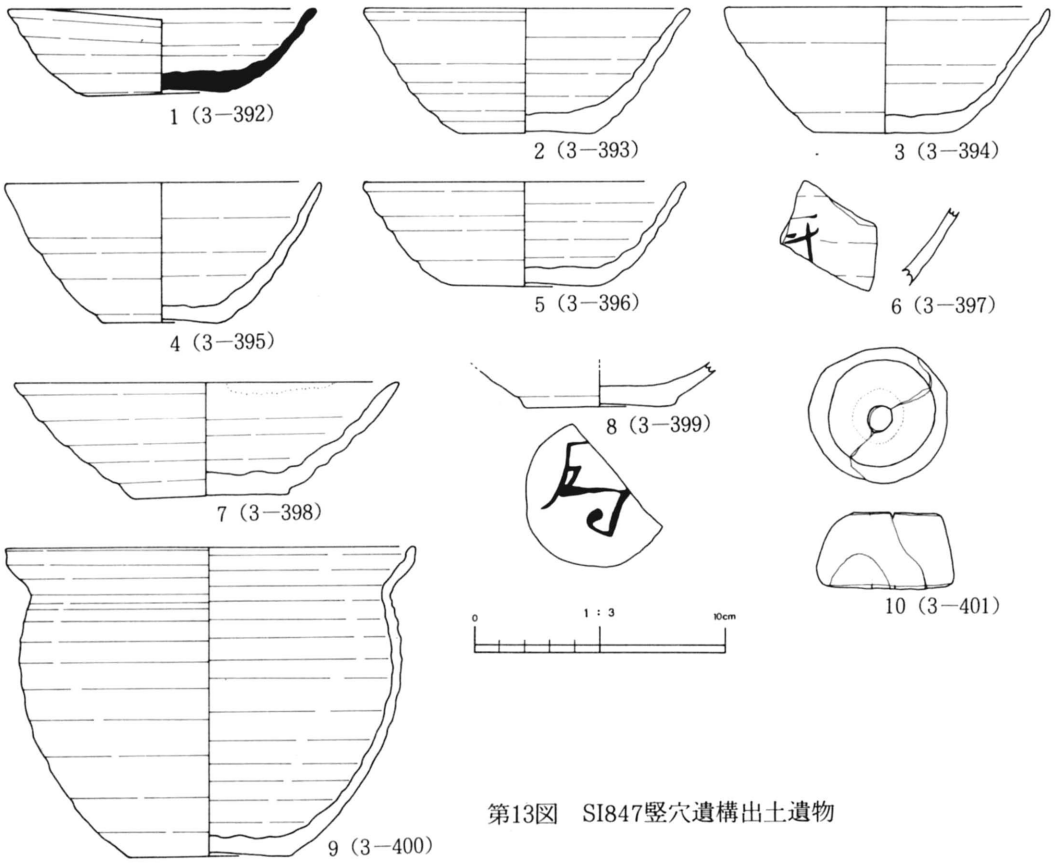
第11図　SI846竪穴遺構出土遺物



第12図　SI847竪穴遺構

SI847竪穴遺構出土遺物（第13図、図版34）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	埋土	糸切り		
2	赤褐色土器	埋土	糸切り	体下端回転ケズリ	
3	赤褐色土器	埋土	糸切り		
4	赤褐色土器	埋土	糸切り		
5	赤褐色土器	埋土	糸切り		
6	赤褐色土器	埋土			墨書「厨」
7	赤褐色土器	埋土	糸切り		油煙
8	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「厨」か
9	赤褐色土器	埋土	糸切り		
10	紡錘車	埋土			



第13図　SI847竪穴遺構出土遺物

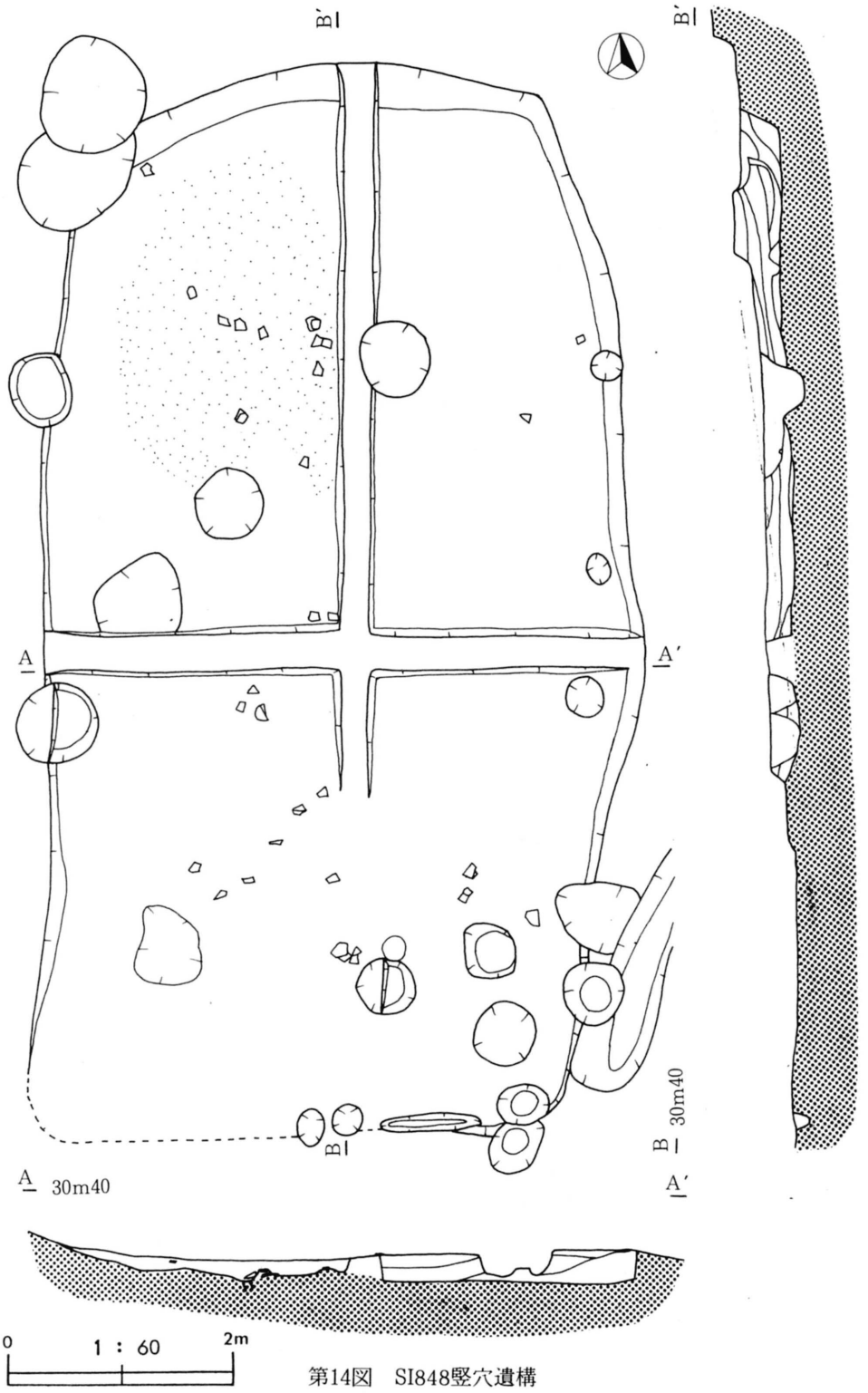
SI848竪穴遺構出土遺物（第15図、図版35）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		
2	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		
3	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		油煙
4	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		
5	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		油煙
6	土　師　器	埋　　土	糸切り		墨書「太・太」
7	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		
8	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		
9	赤褐色土器	埋　　土			墨書
10	瓦	埋　　土			斜格子
11	石　　剣	埋　　土			

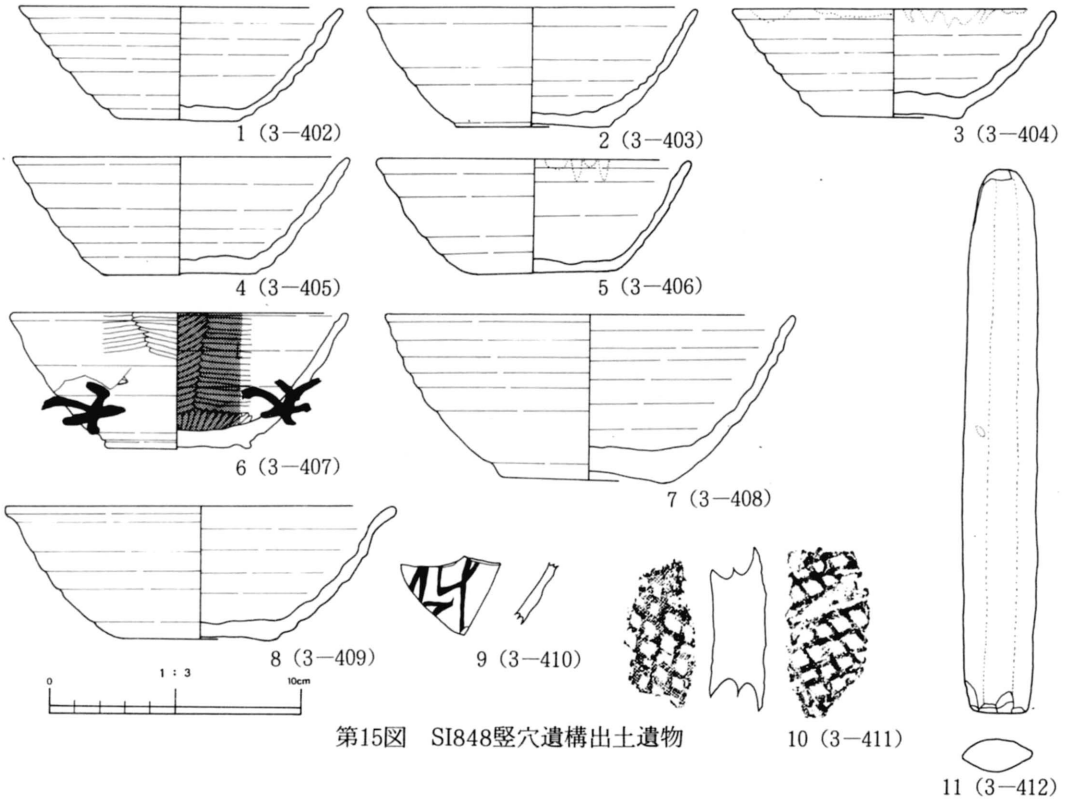
4軒重複する状態で検出された。SI850→852→853と古くなる。SI851はSI850より古いが，他との新旧関係は不明である。いずれも遺存する掘り込みは浅く，カマドの有無，全体のプランについては不明である。

SI854竪穴遺構　（第21図）

北壁の一部を残し，床面のみの検出である。床面は炭化物，焼土が堅く敷き詰められた状態で南北3.7m，東西3.2mの範囲で認められる。SB845建物と重複し，それより古いものである。



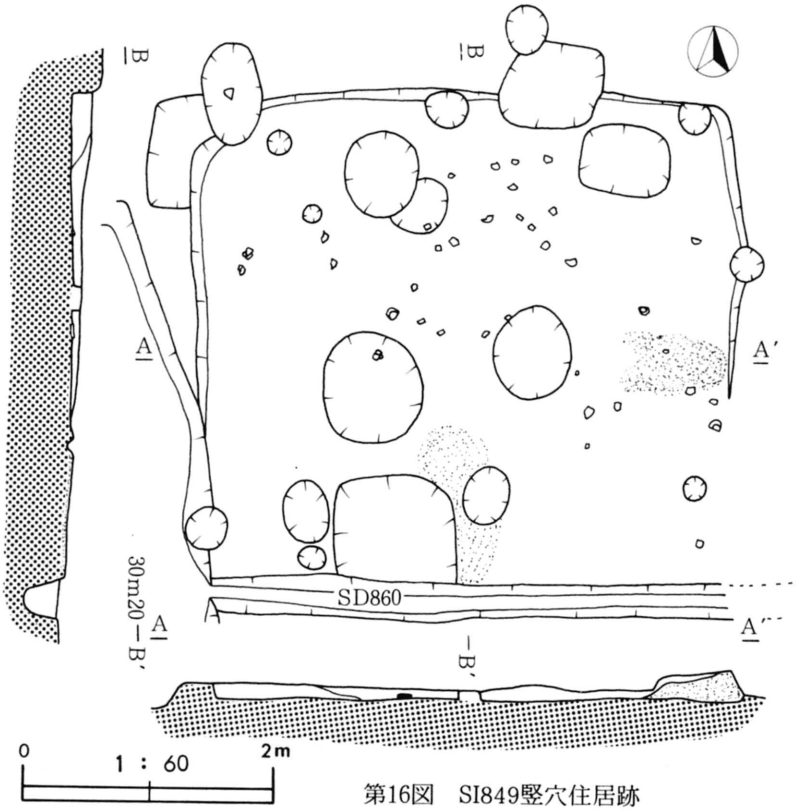
第14図　SI848竪穴遺構



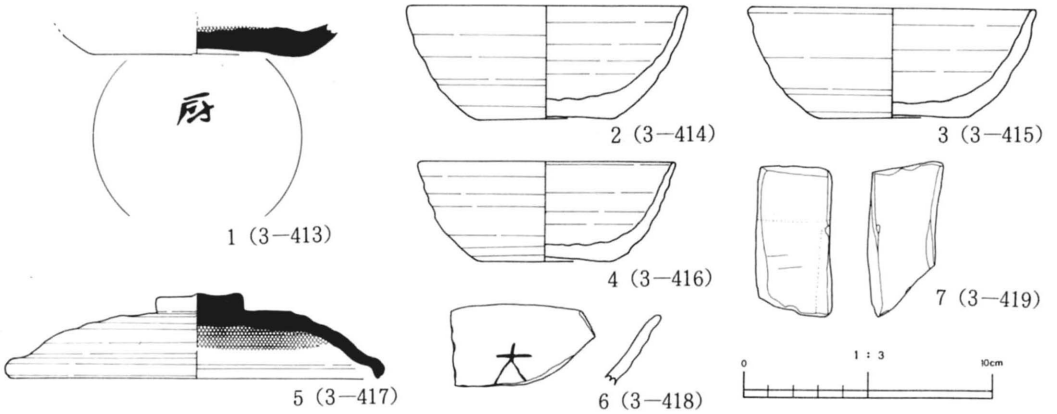
第15図　SI848竪穴遺構出土遺物

SK902，904，908，910，911土壙（第2図，図版2）

第6層褐色砂，第7層粘土面を中心に検出した土壙である。埋土が暗褐色砂質土であることから前述したSA912ピット群と同種の性格不明の土壙である。SK902はSI853と，SK903はSI847と，SK908はSI846とそれぞれ重複し，それより新しく，SK904はSD859と重複し，それより古いものである。



第16図　SI849竪穴住居跡



第17図　SI849竪穴住居跡出土遺物

SI849竪穴住居跡出土遺物（第17図，図版35，36）

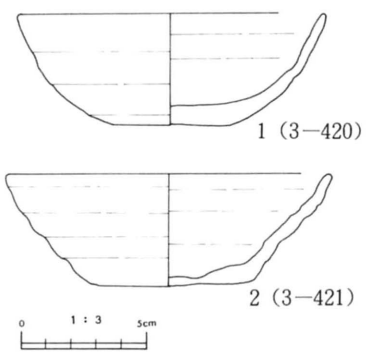
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	埋土	ヘラ切り		墨書「厨」
2	赤褐色土器	床面	糸切り	体下端回転ケズリ	
3	赤褐色土器	カマド内	糸切り	体下端回転ケズリ	支脚に使用
4	赤褐色土器	カマド内	糸切り	体下端回転ケズリ	
5	須恵器	カマド内		肩部回転ケズリ	転用硯
6	赤褐色土器	埋土			墨書「大」
7	砥石	埋土			

SI850竪穴遺構出土遺物（第18図，図版36）

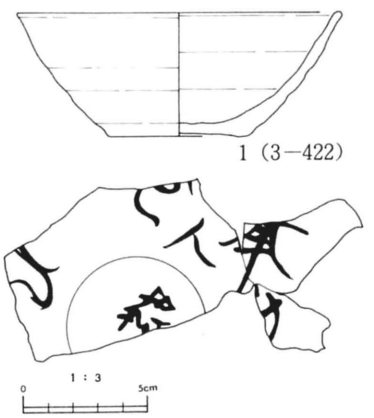
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	赤褐色土器	埋土	糸切り	体下端回転ケズリ	
2	赤褐色土器	埋土	糸切り		

SI853竪穴遺構出土遺物（第19図，図版36）

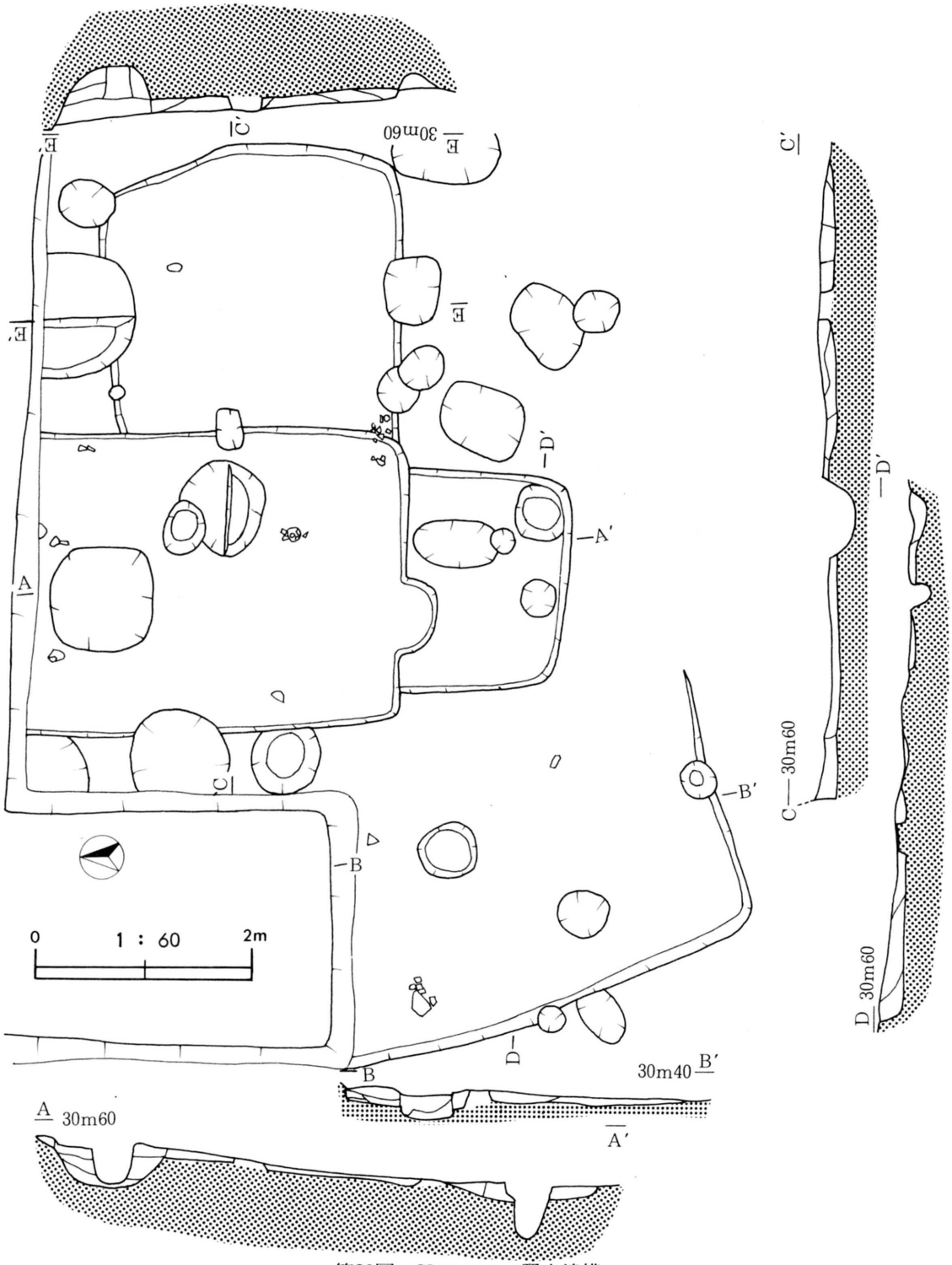
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書「人…」



第18図　SI850竪穴遺構出土遺物



第19図　SI853竪穴遺構出土遺物



第20図　SI850～853竪穴遺構

SE855井戸跡　（第25図，図版７）

東西5.3ｍ，南北4.5ｍの円形プランで，深さ4.6ｍの擂鉢状の掘り込みを行い，一辺90㎝の方形の井側を据えている。井側の底面には直径60㎝，深さ30㎝の円形の曲物痕跡が確認された。井側の木質部は，既に腐朽し痕跡が残るだけであるが，横桟，隅柱の痕跡が確認された。裏込めが砂質で

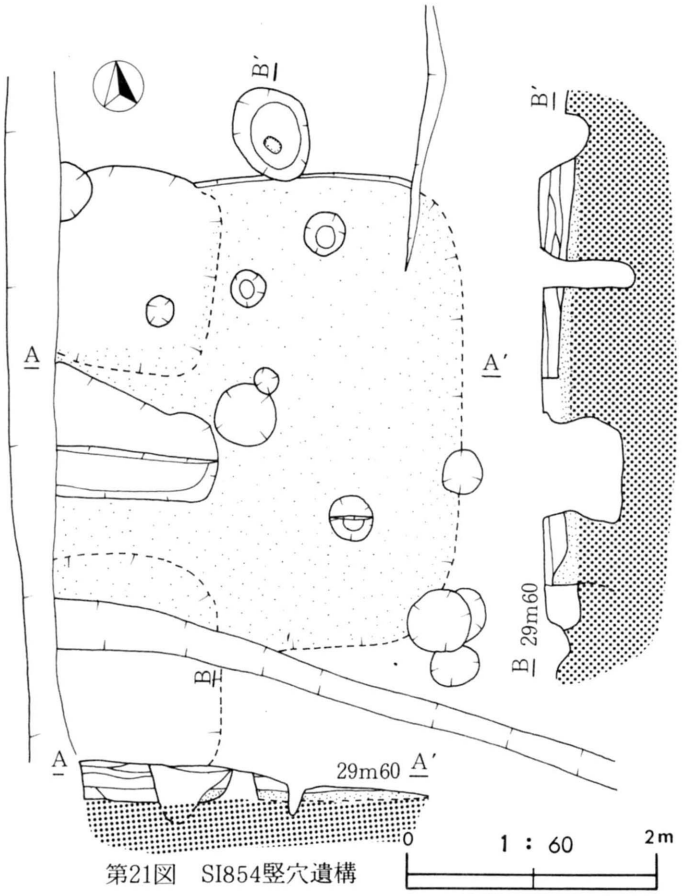
あるため調査途中で崩壊し，裏込め埋土，井側底面付近の状況を図示しえなかった。井側埋土の中層，底面付近から珠洲系中世陶器擂鉢の破片が出土しており，その廃棄の時期は中世に求めることができる。

○第9層遺構面　（第2図，図版3）

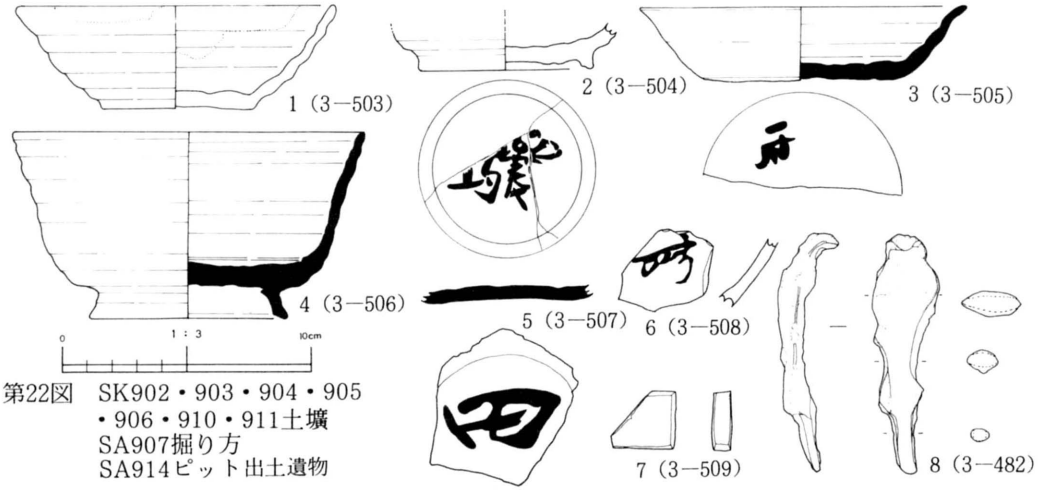
第8層焼土面を除去した段階で確認，検出した遺構である。

SI206竪穴住居跡　（第26，27図，図版13，18）

第17次調査で既に西半部を検出済みであり，本次調査ではカマドを中心とする東半部を検出した。東壁，南壁はそれぞれSK904，SD859によって壊されている。カマドは東壁北寄りの位置に付設され，瓦を補強



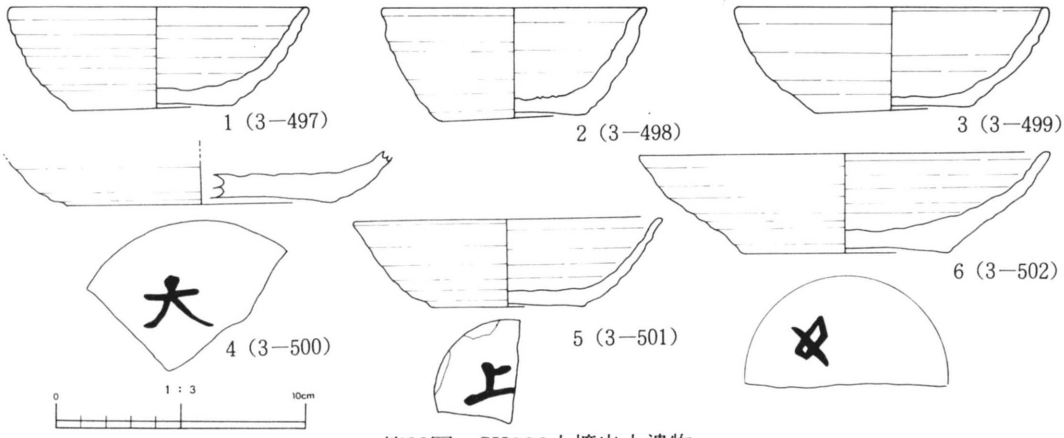
第21図　SI854竪穴遺構



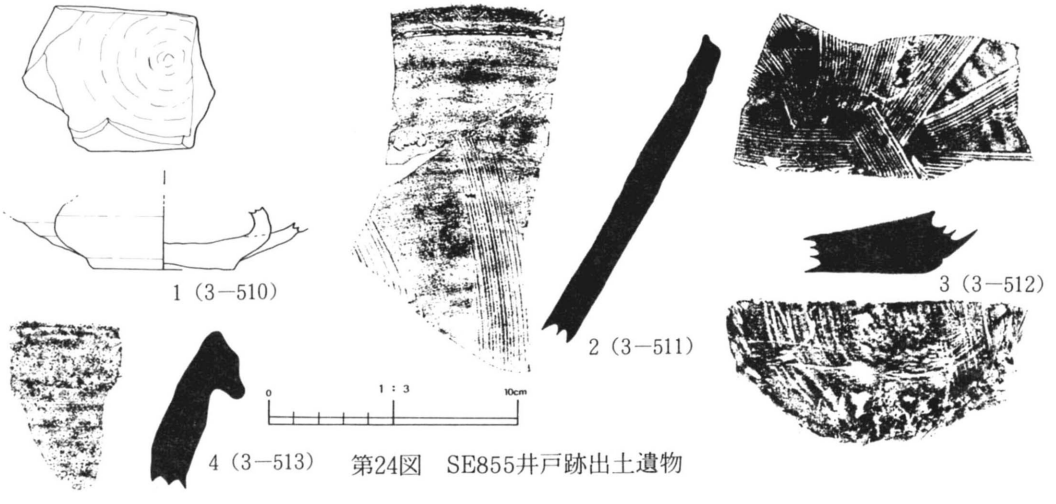
第22図　SK902・903・904・905・906・910・911土壙
SA907掘り方
SA914ピット出土遺物

SK.SA土壙掘り方，ピット出土遺物（第22図，図版41，43）

No.	種類	出土層位	切り離し	調	整	備考
1	赤褐色土器	掘り方	糸切り		SK902	油煙、
2	赤褐色土器	掘り方	糸切り		SK903	墨書、「驛」
3	須恵器	掘り方	ヘラ切り		SK904	墨書「厨」
4	須恵器	旧掘り方	ヘラ切り	体下端回転ケズリ	SK906	
5	須恵器	掘り方	糸切り		SK910	墨書「田」
6	赤褐色土器	掘り方			SK911	墨書「口所」
7	砥石	掘り方			SA907	
8	槍鉋	掘り方			SK914	



第23図　SK908土壙出土遺物



第24図　SE855井戸跡出土遺物

SK908土壙出土遺物（第23図，図版43）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	赤褐色土器	掘り方	糸切り	体下端回転ケズリ	
2	赤褐色土器	掘り方	糸切り	体下端回転ケズリ	
3	赤褐色土器	掘り方	糸切り		
4	赤褐色土器	掘り方	糸切り		墨書「大」
5	赤褐色土器	掘り方	糸切り		墨書「上」
6	赤褐色土器	掘り方	糸切り		墨書「中」

SE855井戸跡出土遺物（第24図，図版44）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		
2	中世陶器	井側内			
3	中世陶器	井側内	糸切り		
4	中世陶器	埋　　土			

材とした粘土組で，燃焼部には赤褐色土器坏を伏せた状態で置き，支脚として使用している。

SI861竪穴住居跡　（第10図）

SI846によって壊されており，北半部は調査区外にあることから，東西壁一部のみの検出である。

東西3.9mで，東壁から西壁方向に炭化物，焼土の堆積面が2枚観察されることから東壁にカマドが想定され，しかも時期の異なる床面が存在するものと考えられた。

SI862竪穴遺構　（第29図）

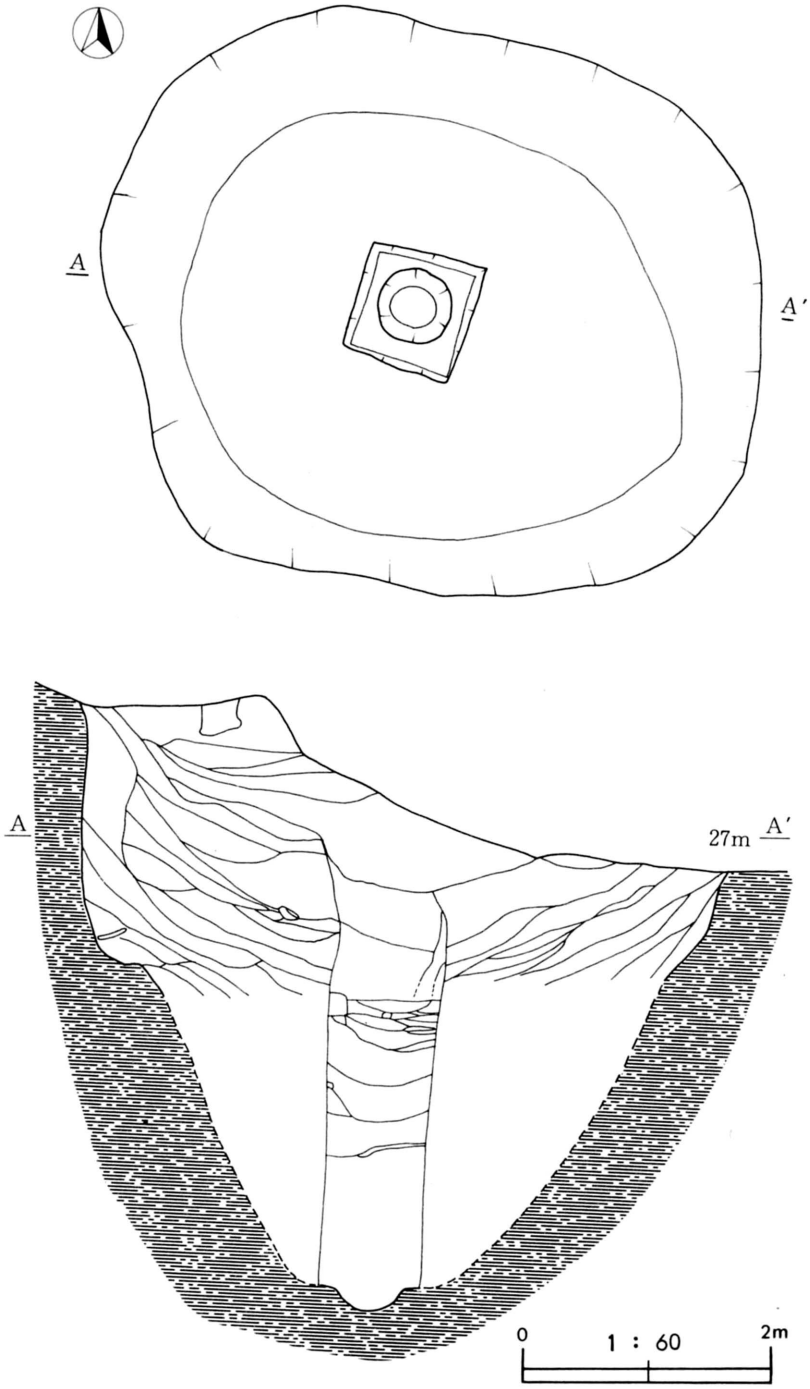
SI846の床面下層で検出した。後述するSI863の埋土上位部で東西，南北2.5mの範囲で中央の凹む鍋底状を呈し，堅い粘土層と炭火物の踏み固められた状態の床面を検出している。カマドの付設はない。

SI863竪穴住居跡　（第29，30図，図版15，18）

SI846，862の床面下層で検出した。プランは東西4m，南北3.2mの方形で東壁中央やや北寄りにカマドが付設されている。カマドは粘土組で，補強材として袖部に瓦が使用されている。

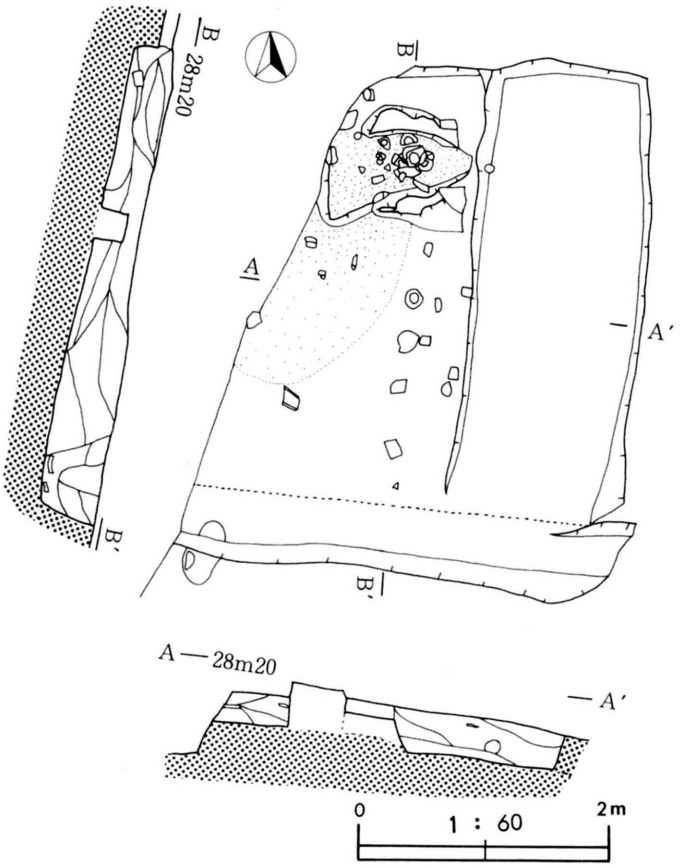
SI864竪穴住居跡

（第31図）



第25図　SE855井戸跡

SI847の床面下層で検出した。プランは東西4m，南北不明の方形で東壁中央北寄りの位置にカマドが付設されている。カマドは削平され痕跡の焼土のみが残っている。壁の遺存状態も悪く，西壁で20cm，東壁は10cmと浅い。SI863とSI846との重複関係と，本住居とSI847の状況が類似している

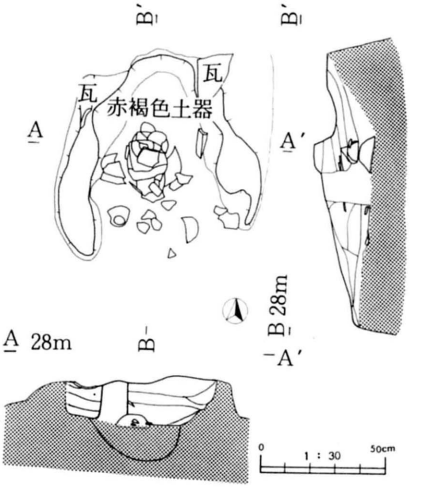


第26図　SI206竪穴住居跡

ことから，SI863と同規模，同時期の竪穴住居跡と考えられる。

SI865竪穴住居跡　（第33図）

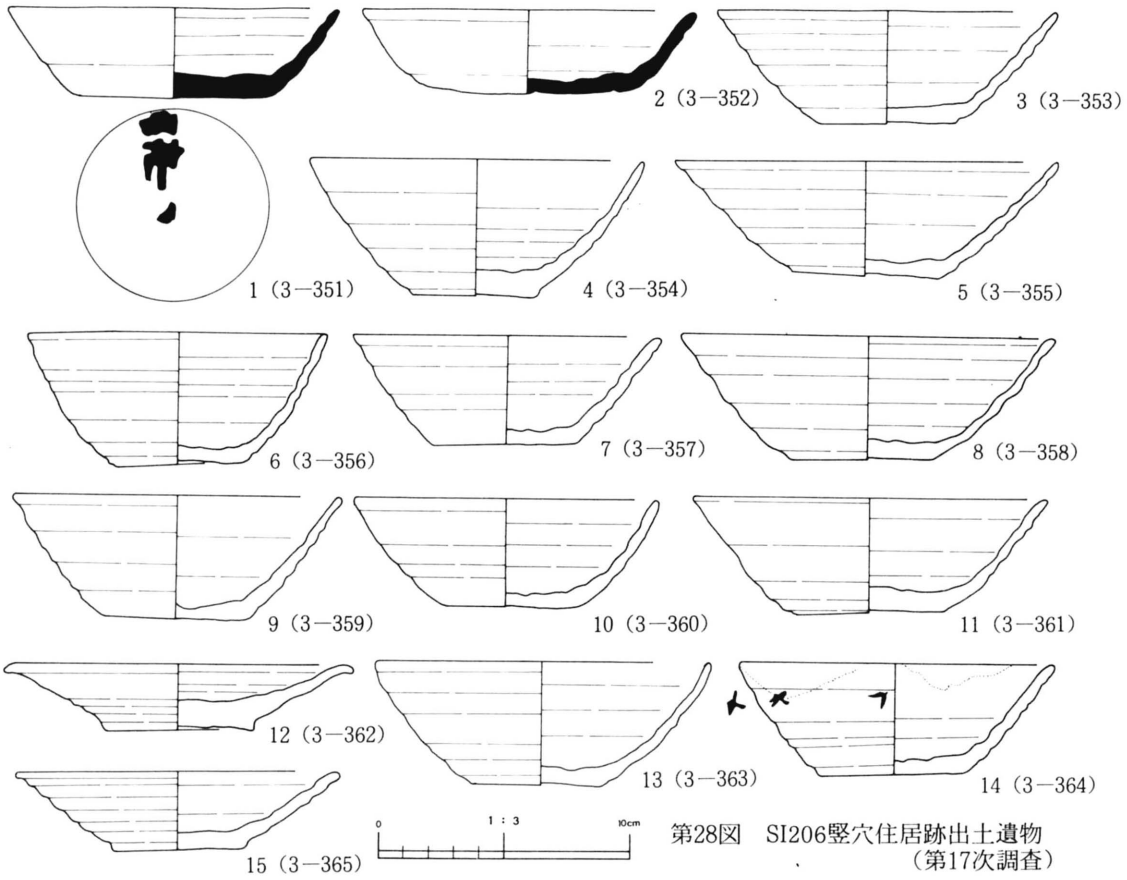
東西3.1m，南北5.2mの長方形プランで，南壁は削平されているものの，ほぼ中央にカマドが付設されている。カマドは，削平のため焼土痕跡が残るだけである。深さは北壁で



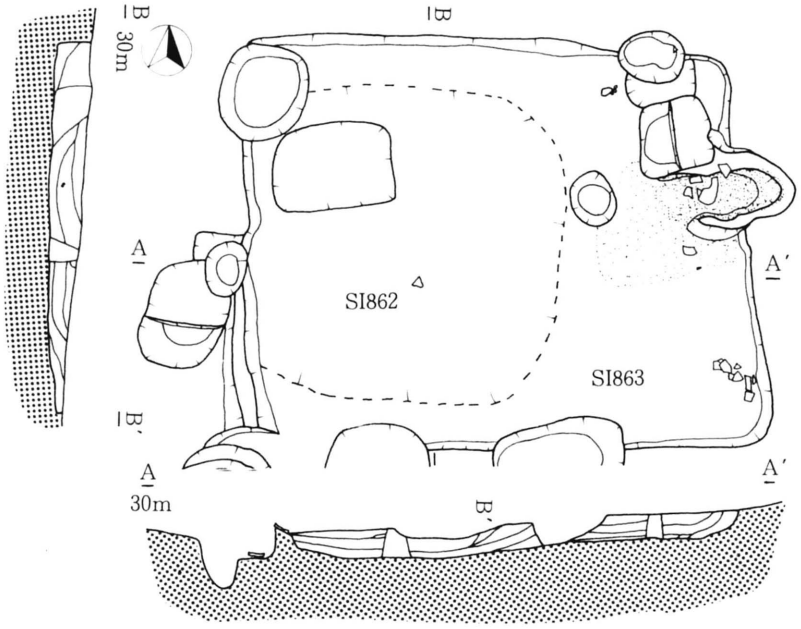
第27図　SI206カマド

SI206竪穴住居跡出土遺物（17次）（第28図，図版31・32）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	埋土	ヘラ切り	底部撫で	墨書
2	須恵器	埋土	ヘラ切り		墨書
3	赤褐色土器	埋土	糸切り		
4	赤褐色土器	埋土	糸切り		
5	赤褐色土器	埋土	糸切り		
6	赤褐色土器	埋土	糸切り		
7	赤褐色土器	埋土	糸切り		
8	赤褐色土器	埋土	糸切り		
9	赤褐色土器	埋土	糸切り		
10	赤褐色土器	埋土	糸切り		
11	赤褐色土器	埋土	糸切り		
12	赤褐色土器	埋土	糸切り		
13	赤褐色土器	埋土	糸切り		
13	赤褐色土器	埋土	糸切り		
14	赤褐色土器	埋土	糸切り		墨書
15	赤褐色土器	埋土	糸切り		



第28図　SI206竪穴住居跡出土遺物
（第17次調査）



第29図　SI862竪穴遺構
SI863竪穴住居跡

0　1：60　2m

32cmである。

SI866竪穴遺構　（第62図，図版16）

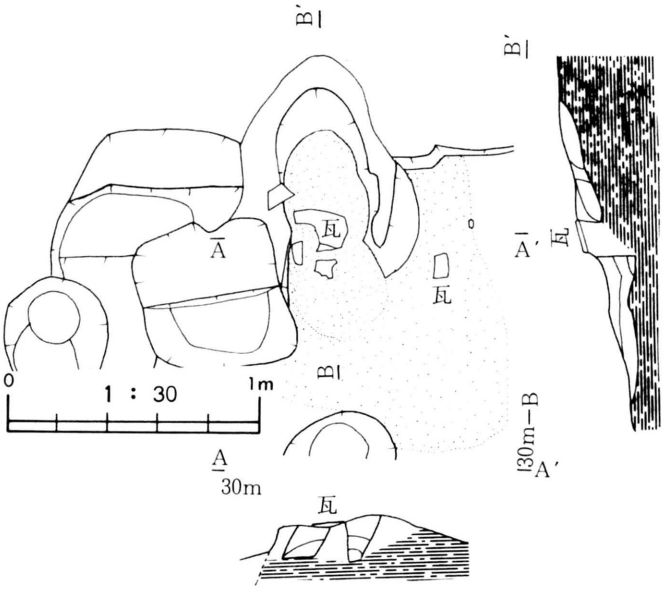
SE886，SK888と重複し，それよりも古いものである。東西1.9m，南北2.3mの方形で，深さ20cm～30cmである。カマド及び炉等の付設は認められない。

SI867竪穴住居跡　（第34図，図版11）

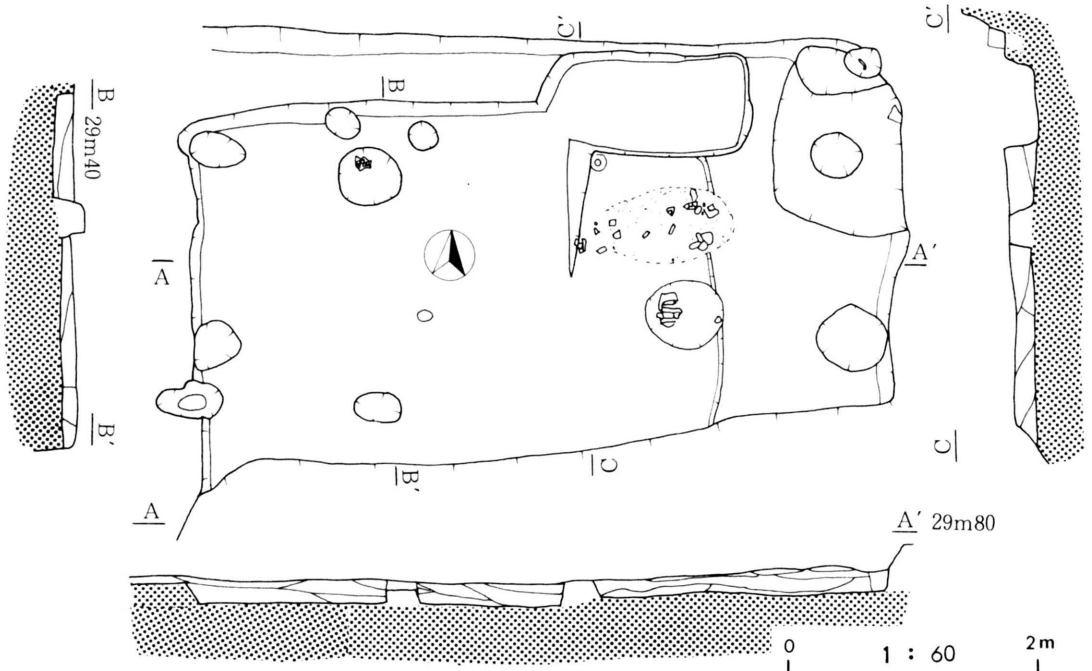
南半部は削平されており，南北規模は不明である。東西3.1m，東壁に粘土組のカマドが付設されている。深さは，壁の遺存状況が悪く10cm～20cmと浅い。

SI868竪穴住居跡　（第34図，図版11）

SI867の南西床面の炭化物面を壊しており，それより新しいものである。東西1.9m，南北1.8mの方形で，深さは20cm～30cm，床面の中央東寄りの位置に地床炉と考えられる焼面が認められる。



第30図　SI863カマド



第31図　SI864竪穴住居跡

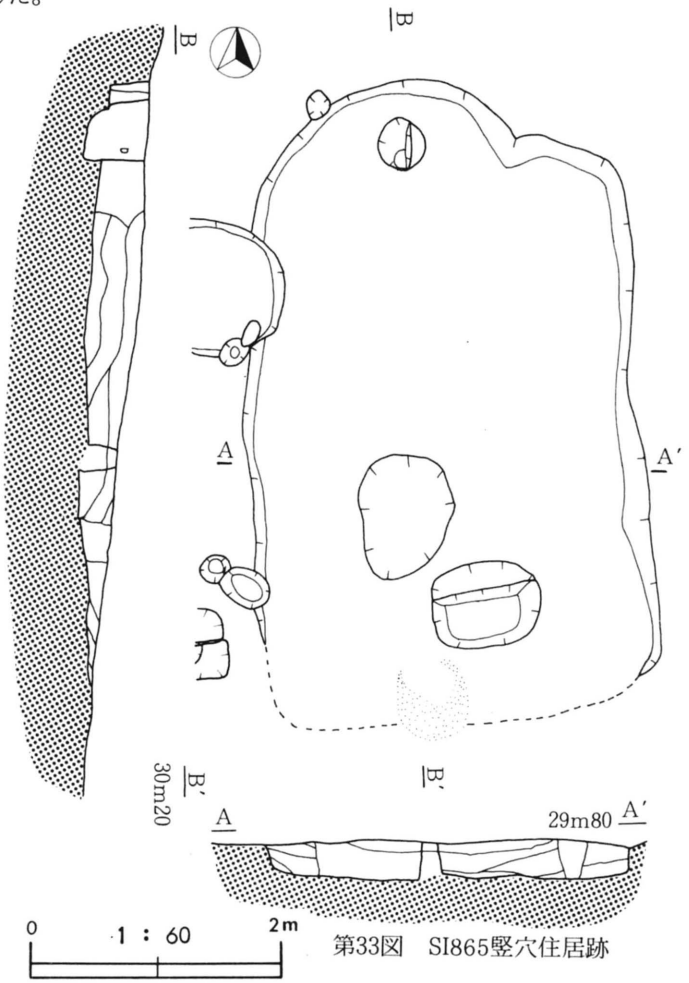
SI869竪穴住居跡　（第36図，図版13）

SB845と重複し，床面がその掘り方によって壊されている。東西2.3m，南北2.8mの方形であるが，カマド付設の位置については不明である。しかし，床面にはカマドからのものと考えられる炭化物，焼土が認められる。深さは20cm～25cmで，埋土及び床面から赤褐色土器坏がまとまって出土した。

SI870竪穴住居跡　（第38図）

東西3.2m，南北3mの範囲で焼土，炭化物の堆積する床面のみを検出した。しかし，西はさらに調査区外に延び，南は第17次調査地となることから，全体の規模については不明である。床面からは赤褐色土器がまとまって出土した。

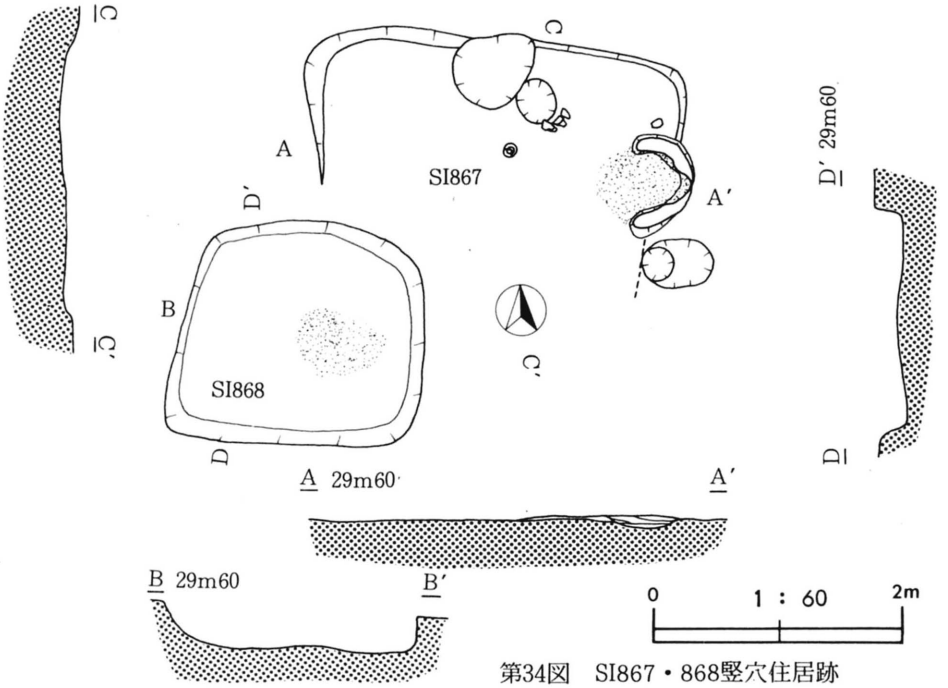
第32図　SI864竪穴住居跡出土遺物



第33図　SI865竪穴住居跡

SI864竪穴住居跡出土遺物（第32図，図版36）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	赤褐色土器	埋　土	糸切り		
2	須恵器	埋　土	糸切り		墨書「道」
3	赤褐色土器	ピット内	糸切り		



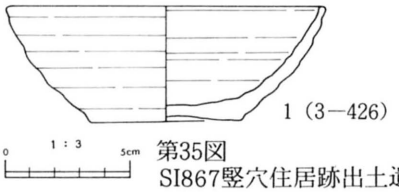
第34図　SI867・868竪穴住居跡

SI871竪穴住居跡　（第40図，図版14）

SI872と重複し，それより新しい。東西は不明であるが南北は2.5mで床面南西部に地床炉状の焼面，焼土があり，中央部には拳大の河原石が置かれていた。

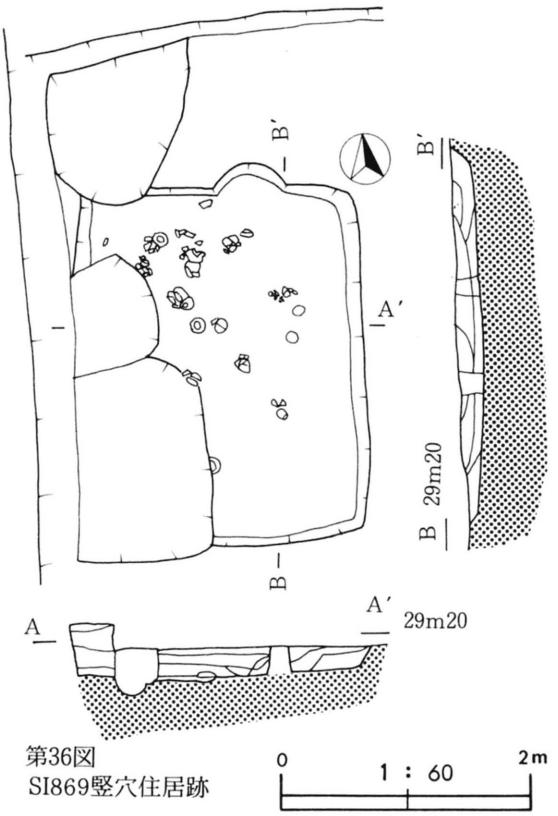
SI872竪穴住居跡　（第40・42図，図版14・18）

SI871，873と重複し，前者より古く，後者より新しいものである。西側がSI871によって壊されており東西は不明であるが，南北は2.5m，カマドは南壁に付設されている。カ



第35図
SI867竪穴住居跡出土遺物

SI867竪穴住居跡出土遺物（第35図，図版36）



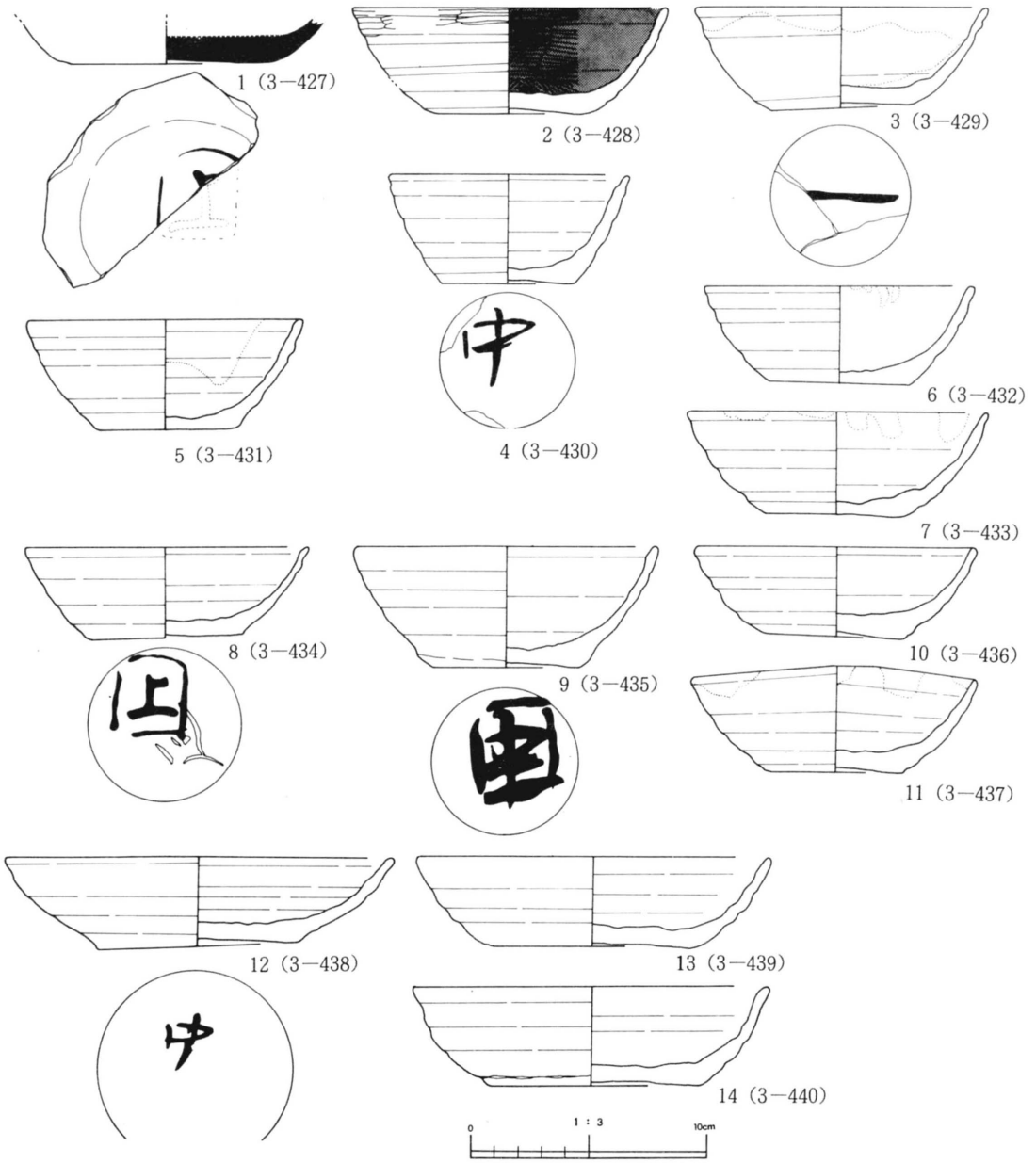
第36図
SI869竪穴住居跡

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	赤褐色土器	床　　面	糸切り		

マドは，粘土組で東袖部には瓦を使用しており，燃焼部には土師器甕の底部を伏せて支脚としている。

SI873竪穴住居跡　（第40図，図版14）

SI872と重複し，それより古いものである。東西1.6m，南北2.7mの長方形で，北西のコーナー部を中心に焼土，粘土を検出している。当初，この全体の焼土塊を本住居跡のカマドと考えていたが，精査の結果，西壁より突出した瓦使用部分については後述するSI236（第17次調査検出）のカマドと判明，東部分の焼土が本住居跡のカマドの痕跡と考えられる。



第37図　SI869竪穴住居跡出土遺物

SI869竪穴住居跡出土遺物（第37図，図版37，38）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	須　恵　器	床　　面	糸切り		墨書「上」か
2	土　師　器	埋　　土	糸切り	体下端回ケズリ・ミガキ	内黒
3	赤褐色土器	床　　面	糸切り	体下端回ケズリ	墨書「一」・油煙
4	赤褐色土器	床　　面	糸切り	体下端回ケズリ	墨書「中」
5	赤褐色土器	埋　　土	糸切り	体下端回ケズリ	油煙
6	赤褐色土器	埋　　土	糸切り	体下端回ケズリ	油煙
7	赤褐色土器	床　　面	糸切り	体下端回ケズリ	油煙
8	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		墨書「上」「匠」ヵ
9	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		墨書「田」
10	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		
11	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		
12	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		墨書「中」
13	赤褐色土器	埋　　土	糸切り		
14	赤褐色土器	床　　面	糸切り		

SI870竪穴住居跡出土遺物（第39図，図版38）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	須　恵　器	埋　　土	糸切り		内面漆膜
2	須　恵　器	床　　面	糸切り		
3	須　恵　器	埋　　土	ヘラ切り		墨書「官」
4	赤褐色土器	床　　面	糸切り	体下端回転ケズリ	
5	赤褐色土器	埋　　土	糸切り	体下端回転ケズリ	油煙
6	赤褐色土器	床　　面	糸切り	体下端回転ケズリ	
7	赤褐色土器	床　　面	糸切り	体下端回転ケズリ	油煙
8	赤褐色土器	床　　面	糸切り	体下端回転ケズリ	
9	赤褐色土器	床　　面	糸切り	体下端手持ちケズリ	
10	赤褐色土器	床　　面	糸切り		
11	赤褐色土器	床　　面	糸切り		
12	赤褐色土器	床　　面		体下端手持ちケズリ	

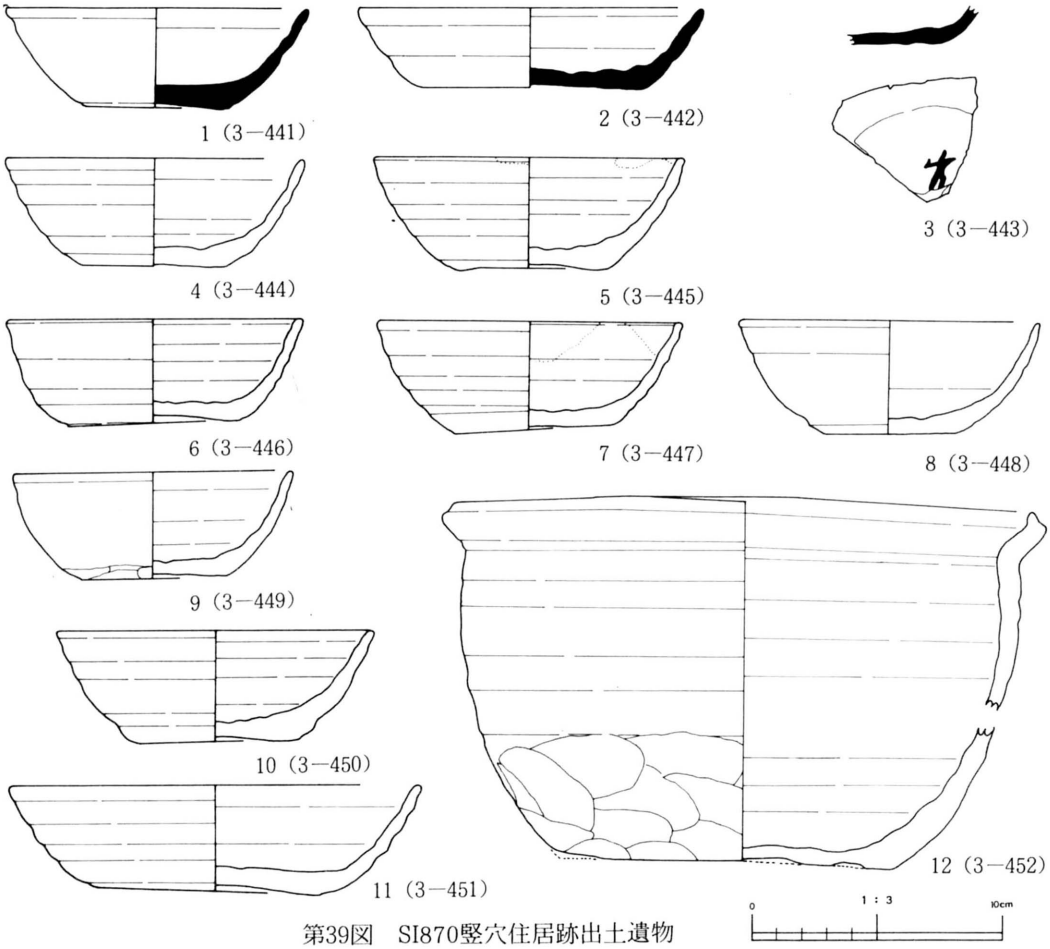
SI874A竪穴住居跡　（第40図）

SI873の北東で検出したが，重複関係がなく，層的にも焼土層（第８層）の堆積範囲外にあり，どの遺構面に伴うか不明であった。ここでは同一レベルのSI873と共に述べることとした。プランは東西2.7ｍ，南北2.4ｍの方形で，北壁中央から東寄りの位置にカマドが付設されている。カマドは瓦を補強材として使用した粘土組で，床面からも平瓦の比較的大きな破片が出土している。

SI874B竪穴遺構　（第40図）

SI874Aの床面下層で検出。東西２ｍ，南

第38図　SI870竪穴住居跡



第39図　SI870竪穴住居跡出土遺物

SI871竪穴住居跡出土遺物（第41図，図版39）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	床面	ヘラ切り		
2	砥石	埋土			

SI872竪穴住居跡出土遺物（第43図，図版39）

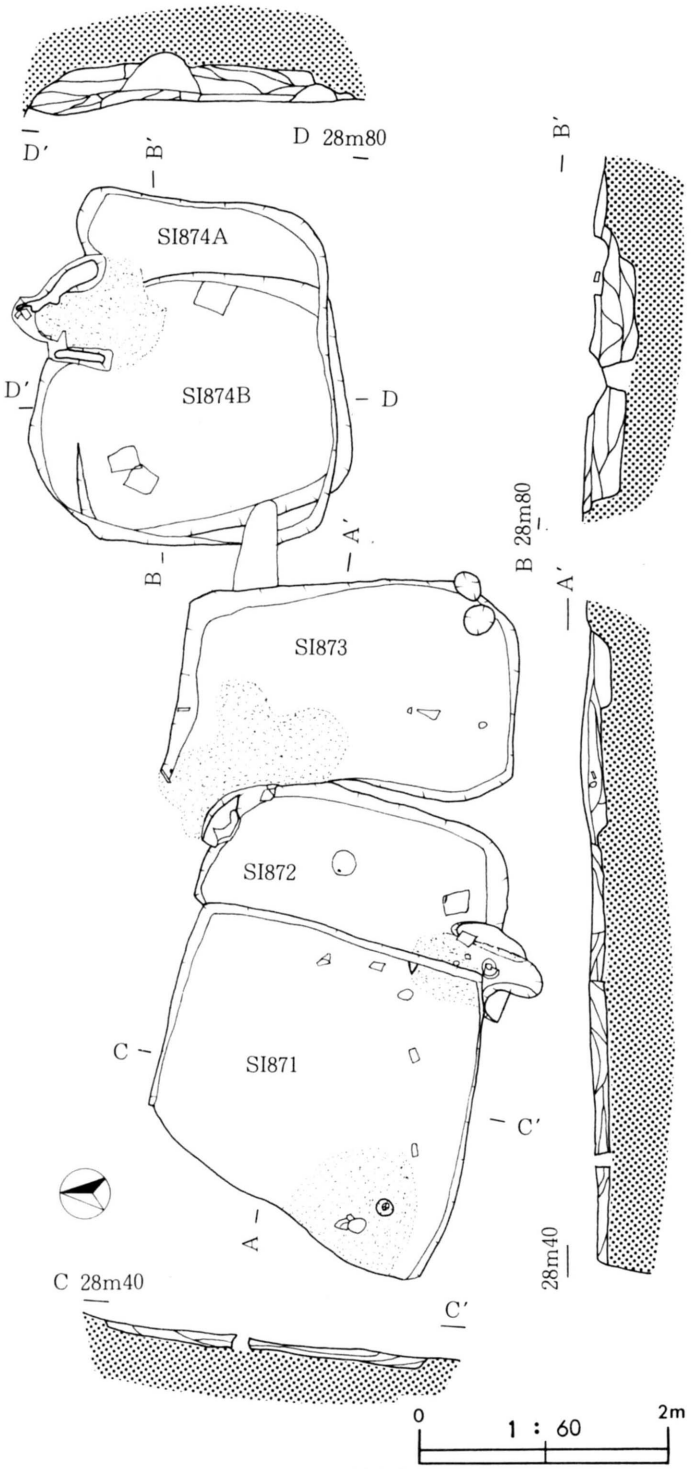
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	床面	ヘラ切り		転用硯
2	須恵器	床面	ヘラ切り		転用硯
3	土師器	カマド	木葉痕	外面カキ目・内面カキ目	
4	砥石	床面			

SI873竪穴住居跡出土遺物（第44図，図版39）

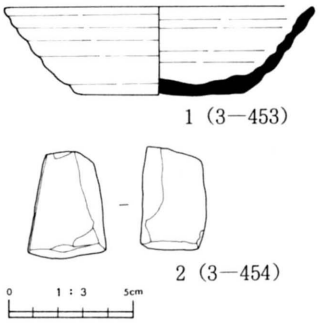
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	瓦	カマド		凸面縄叩き、凹面布目	

SI874A竪穴住居跡出土遺物（第45図，図版40）

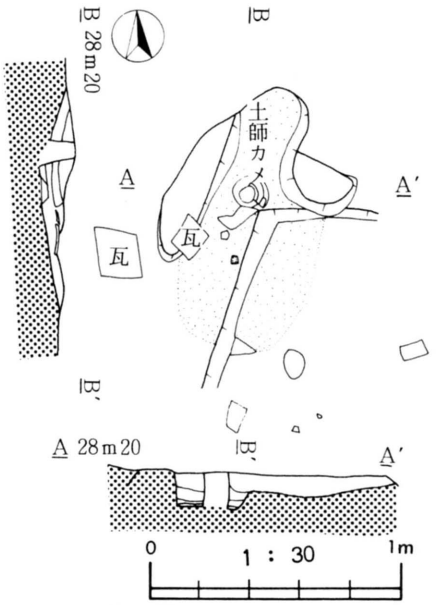
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	床面	ヘラ切り		
2	須恵器	カマド	ヘラ切り		墨書「本」か



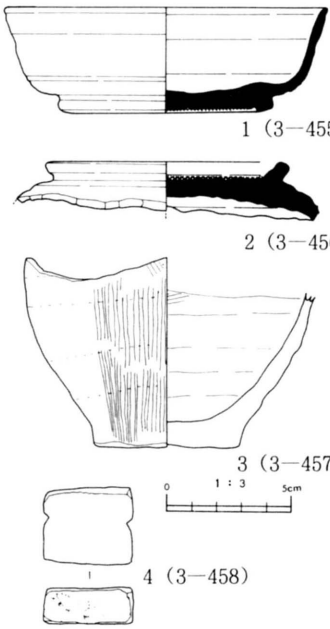
第40図　SI871～874A竪穴住居跡
SI874B竪穴住居跡



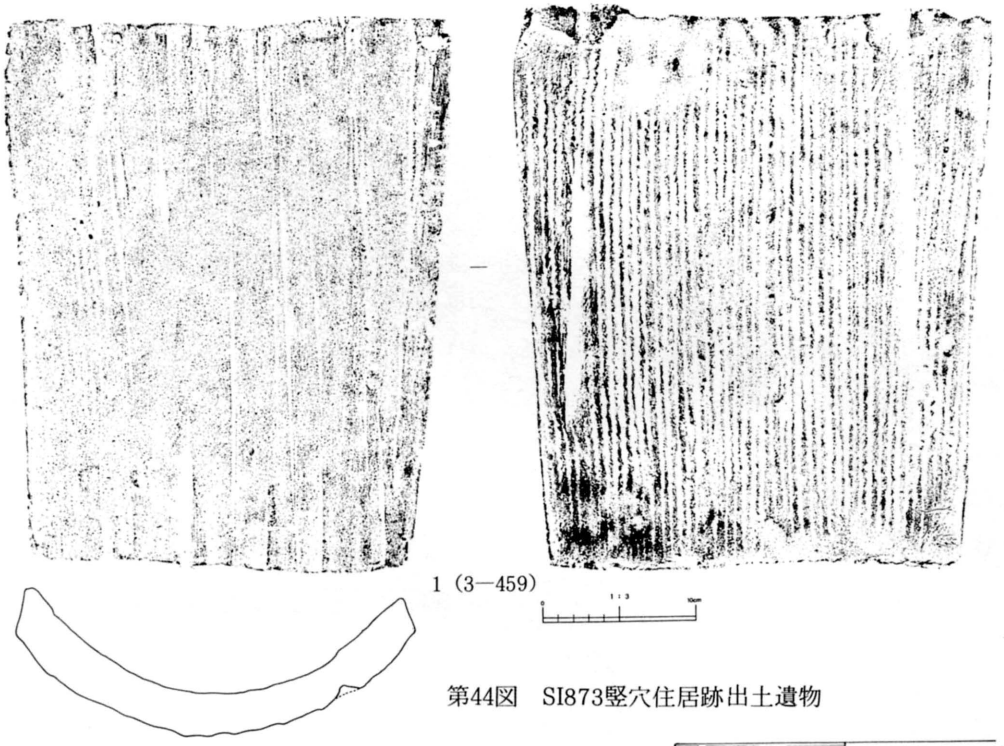
第41図　SI871竪穴住居跡出土遺物



第42図　SI872カマド



第43図　SI872竪穴住居跡出土遺物

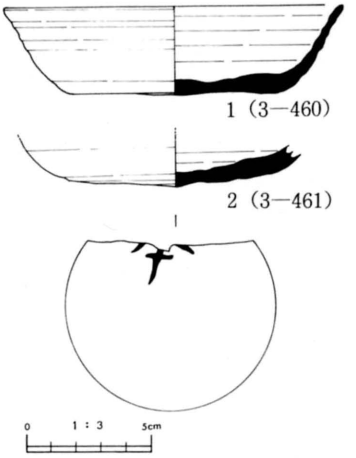


第44図　SI873竪穴住居跡出土遺物

北2.2mの方形で深さ20cm～30cm，床面は凹凸が著しい。カマド，炉などの付設は認められない。

SI875竪穴住居跡　（第46図，図版12）

調査区南端で検出。築地崩壊土と考えられる粘土層を掘り込んでいるが，第8層焼土層の堆積範囲外にあり，遺構面としては上層の可能性も考えられる。プランは，東西3.7m，南北は不明の方形で北壁沿いに3本，西壁沿いに2本の柱穴を検出している。カマドは，南壁に付設されたものと考えられ，炭化物，焼土が南から北方向に広がっている。



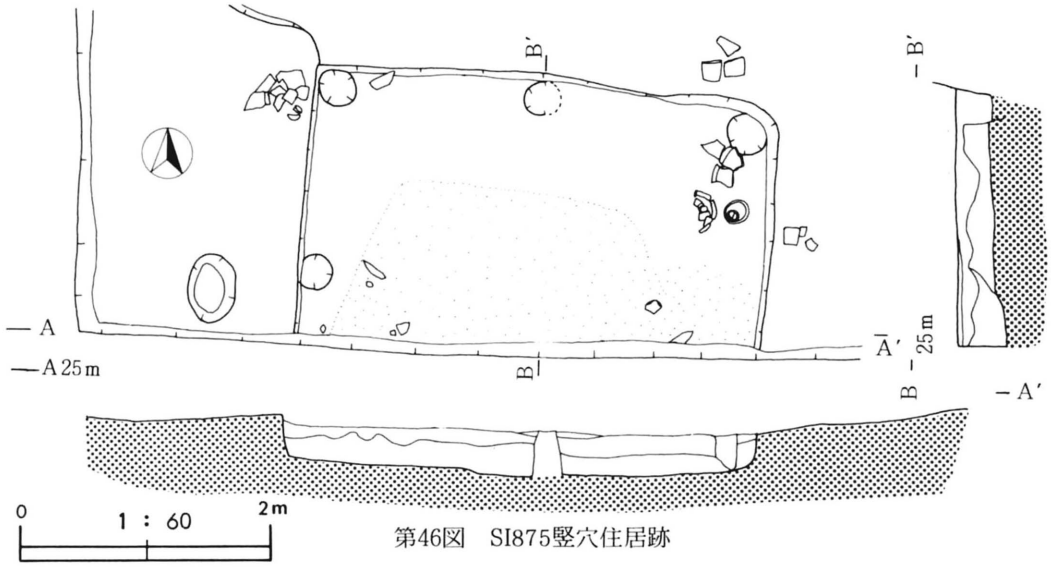
第45図　SI874A竪穴住居跡出土遺物

SI875竪穴住居跡出土遺物（第47図，図版40）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	赤褐色土器	埋　土	糸切り		
2	赤褐色土器	埋　土		体下端回転ケズリ	

SI876竪穴住居跡出土遺物（第49図，図版40）

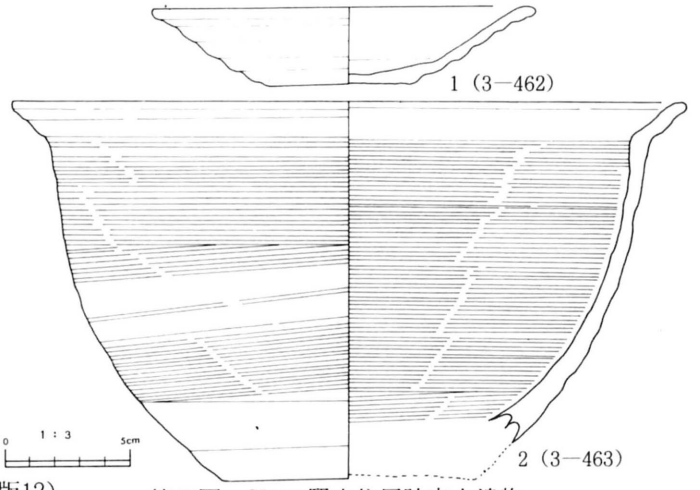
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	埋　土	ヘラ切り	撫で	墨書「物」
2	須恵器	埋　土	ヘラ切り		墨書「山」
3	須恵器	床面下			
4	砥　石	埋　土			



第46図　SI875竪穴住居跡

SI876竪穴住居跡　（第48図，図版12）

東半部は近世以降の削平，南半部はSI877によって壊されており全体は不明である。深さは10cm弱と浅く，壁の遺存状況も悪い。床面は焼土，炭化物が堅く踏み固められた状態であり，須恵器小形壺などがまとまって出土した。



第47図　SI875竪穴住居跡出土遺物

SI877竪穴住居跡　（第48図，図版12）

SI876を壊しており，これより新しいものであるが，北壁のみが遺存するだけで全体は不明である。床面は，炭化物が堅く締まった状態であり，北壁での深さは15cm程である。

SI877竪穴住居跡出土遺物（第50図，図版40）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	砥　石	床　面			

SK887土壙出土遺物（第51図，図版42）

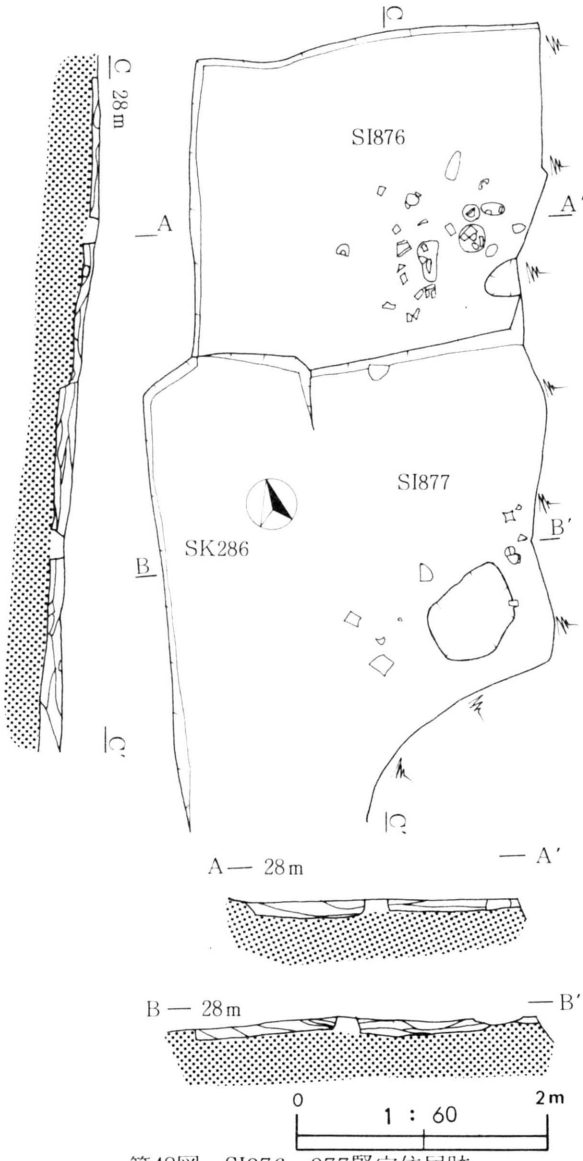
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	埋　土	ヘラ切り		油煙
2	須恵器	埋　土	ヘラ切り		
3	須恵器	埋　土	ヘラ切り		
4	須恵器	埋　土	ヘラ切り		
5	土師器	埋　土	糸切り	体下端、底部ケズリ	内黒
6	赤褐色土器	埋　土	糸切り	体下端回転ケズリ	

SK887土壙（第２図）

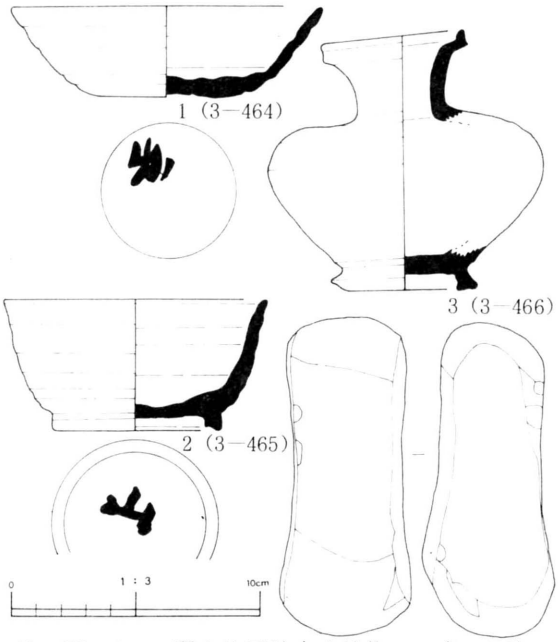
第８層焼土下層で検出した直径１ｍ，深さ40㎝の黒色土を埋土とする土壙で須恵器，土師器がまとまって出土している。

SK888土壙（第２図）

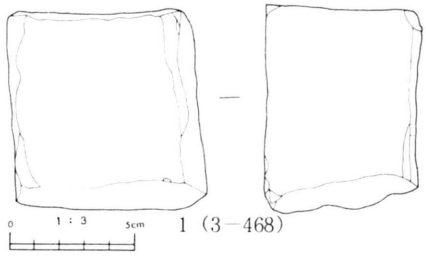
SI866と重複し，これより新しい東西1.8ｍ，南北1.2ｍの方形の土壙で，深さ約20㎝と浅いものである。



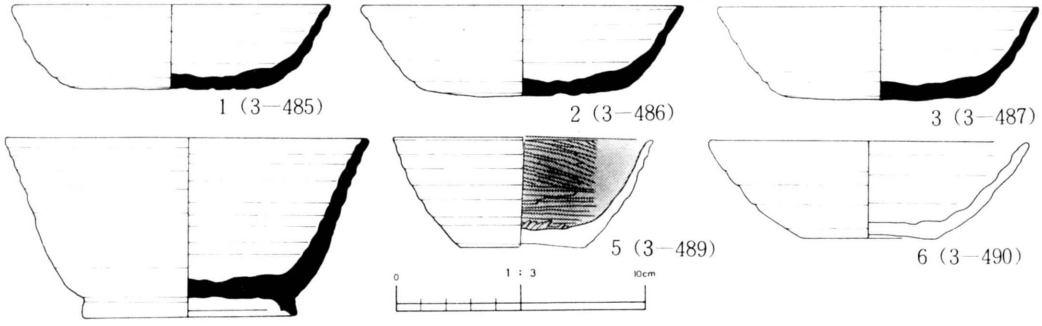
第48図　SI876・877竪穴住居跡



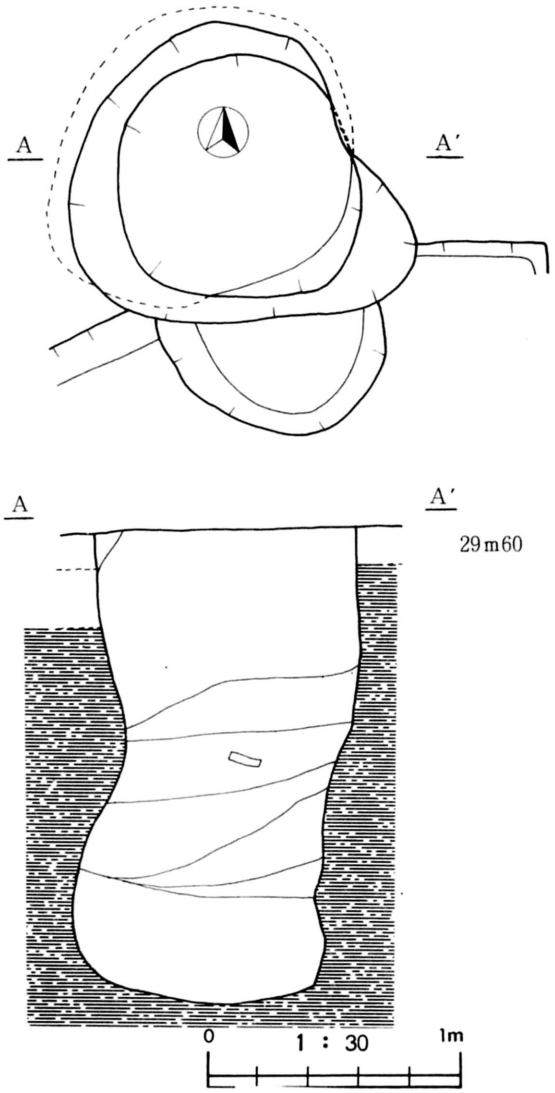
第49図　SI876竪穴住居跡出土遺物



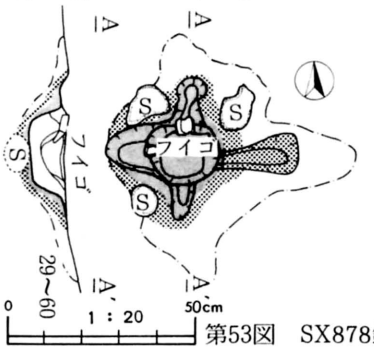
第50図　SI877竪穴住居跡出土遺物



第51図　SK887土壙出土遺物



第52図　SE886井戸跡



第53図　SX878鍛冶炉跡

SE886井戸跡　（第52図，図版７）

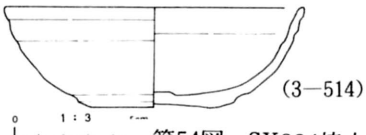
SI866と重複し，これより新しいものである。直径1.2ｍの円形で南東部が崩落している。深さは1.9ｍ，下半部で外に膨らむ掘り方である。井側，井筒等の痕跡が認められないため，素掘りの井戸とも考えられるが，井側等が抜き取られた可能性もある。

SX878鍛冶炉跡　（第53図，図版９）

鍛冶の炉跡と推定される焼土遺構である。中央に直径20cm，深さ10cmの円筒状の落ち込みがあり，落ち込みの上端には，４方向に溝状の浅い落ち込みが付く。溝と溝の間には，南東部を除き３個の河原石が配置され，全体を白色粘土で構築している。円筒部分，溝部分は堅くガリガリに焼き締まっており，その周縁は灰青色の還元状態になっている。さらにその外は，白色粘土との境まで酸化状態になっており，かなりな高熱を受けたものと推定された。北側の溝から円筒上端にかかる状態でフイゴの羽口が出土した。後日，遺構切り取り保存の作業中，円筒の炉床下にも河原石が配されていることが判明した。

SX879～883焼土遺構　（第２図，図版８）

鍛冶の炉跡と考えられるスサ入り焼土の充塡する遺構である。直径10cmの円形のものから，長径２ｍの楕円形のものまであるが，いずれも原形を推定することができないほど崩れている。SX879からは鍛造の際の鉄片が出土，SX880では炉床と推定される円形の焼土塊を検出している。



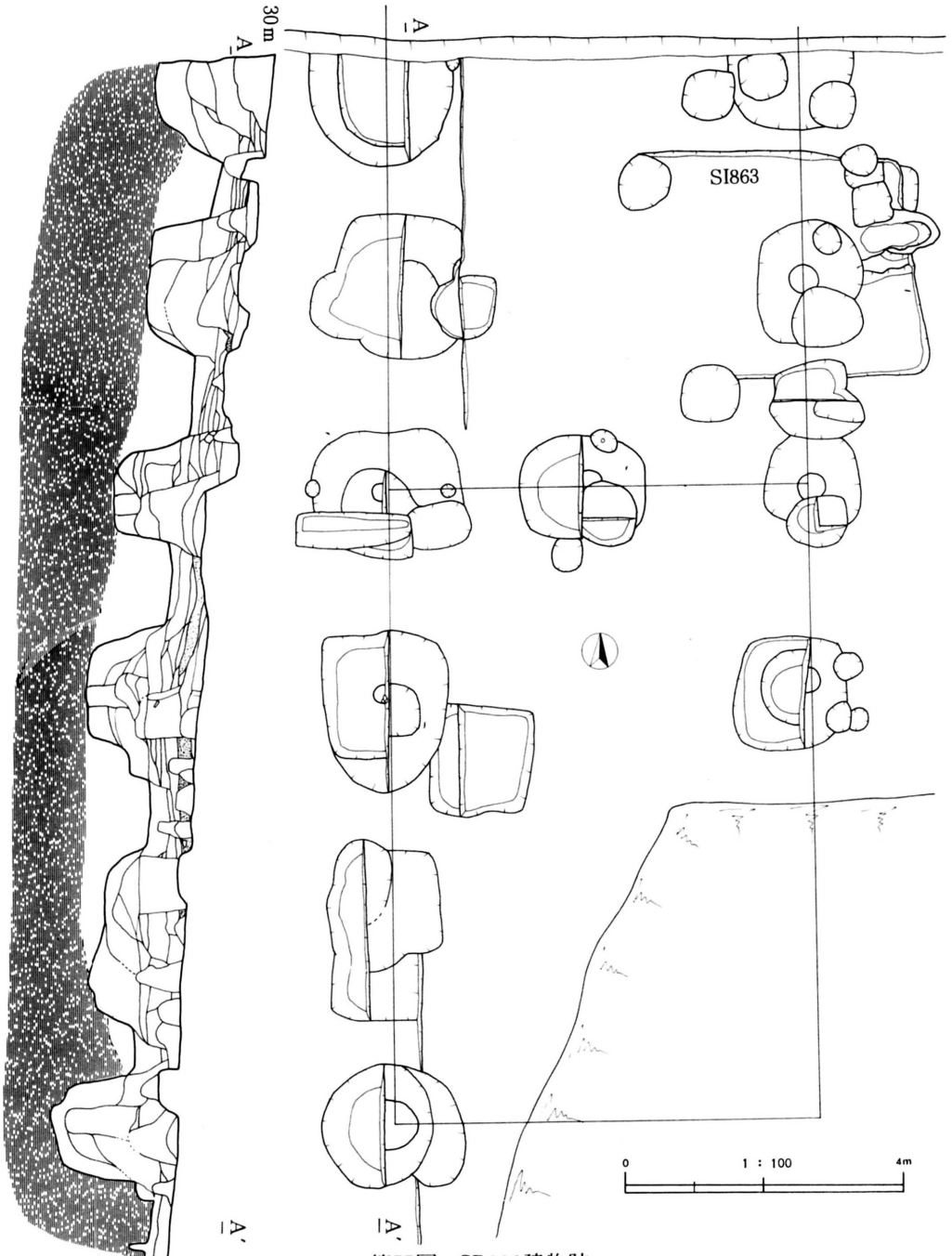
第54図　SX884焼土遺構出土遺物

SX884焼土遺構出土遺物（第54図，図版44）

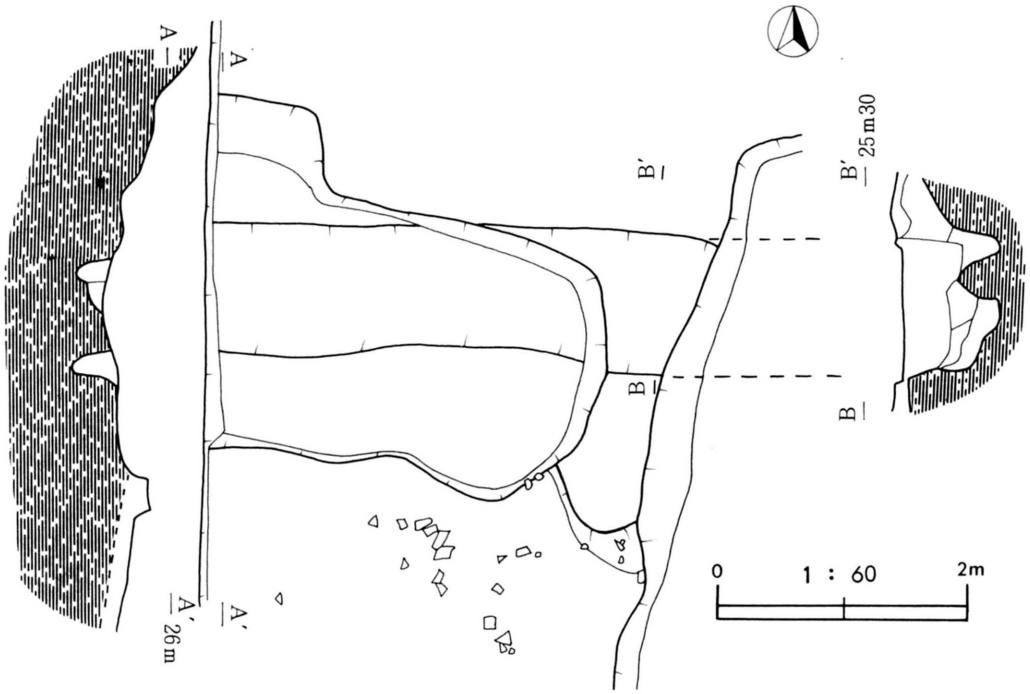
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	赤褐色土器	床　面	糸切り	体下端回転ケズリ	内外赤色顔料

SX884，885焼土遺構　（第２図）

前述の焼土遺構と異なり，焼土にスサが認められず，骨片が混入するものである。長楕円形（SX855），円形（SX884）に焼土，炭化物が広がり，その中央部には焼面が残存している。



第55図　SB889建物跡

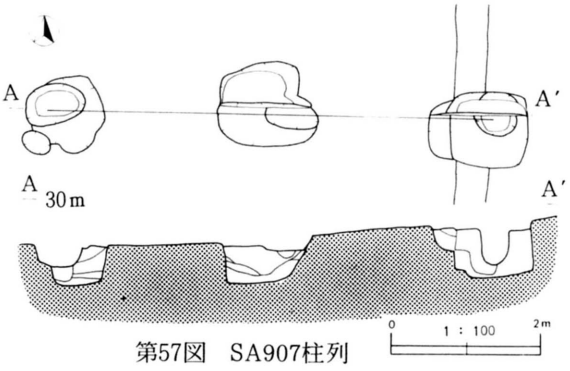


第56図　SA898布掘り溝

○下層遺構面　（第２図，図版４）

SB889建物跡　（第55図，図版５・８）

東西２間（３ｍ＋３ｍ），南北５間（３ｍ＋３ｍ＋３ｍ＋３ｍ＋…）以上の南北棟の建物で，南から３間目に間仕切りが入る。建物方位は，調査基準線にほぼ一致するが，北で西に約３度振れている。掘り方は1.2ｍ～２ｍの円形，楕円形で深さ1.2ｍ～1.5ｍと規模の大きいもので，新旧の重複があり，同位置地点での建て替えが行われている。東桁行の３本と間仕切には明瞭な直径36cmの円形の柱痕跡が認められ，埋土には焼土が多量に混入している。また，柱掘り方に重複し直径60cm～70cm，深さ50cm～60cmの不整円形の掘り込みを検出している。いずれも埋土には焼土が混入しており，焼土が堆積した後にそれを掘り込んで，掘り方規模の小さい建物を建て替えている。



第57図　SA907柱列

SA898布掘り溝　（柱列）（第56図）

築地崩壊土と考えられる粘土層を掘り込んでおり，これまで外郭線の調査で検出されている築地崩壊後の外郭施設である柱列の布掘り溝と判断した。遺存状況が悪く，底面付近がわずかに残存している。幅１ｍ，深さは西で20cm～30cm，東で70cmで少なくとも２時期の重複が認められる。さらに東側に延びているものと考えられるが，畑地造成のため削平されている。

SA907柱列　（第57図，図版５）

SB889建物の間仕切り付近で柱掘り方と重複し，それより新しい東西２間，３本の柱列である。上層遺構面のSI846の柱掘り方とも重複し，これによって壊されている。柱位置は不明であるが，掘り方の中央で2.7ｍの等間である。柱列方向はほぼ東西基準線に一致する。

SA913柱列　（第58図，図版６）

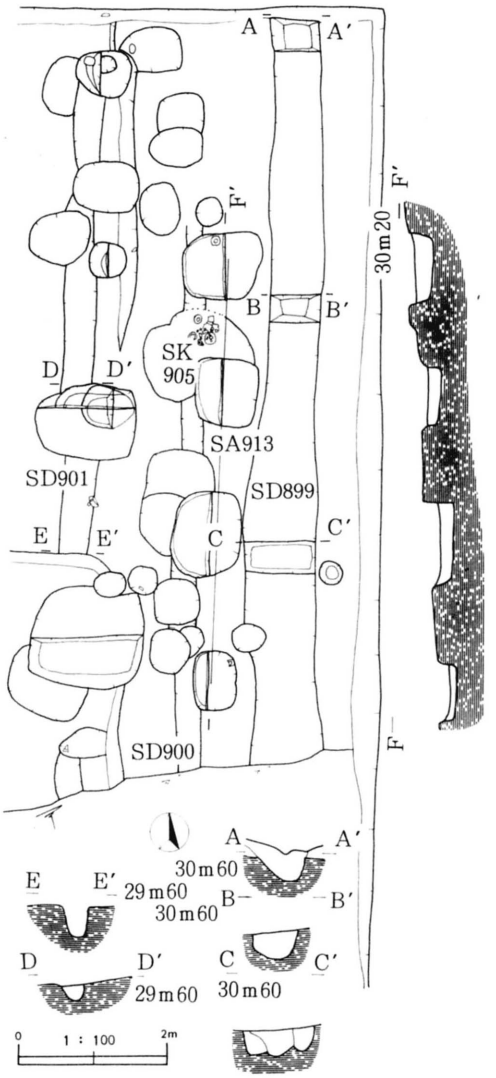
SD899溝と並行する南北３間，４本の柱列で，さらに南に延びる可能性もあるが，削平のため不明である。SD900と重複し，これより新しい。柱位置は掘り方が浅く，わずかに底面しか遺存しておらず不明であるが，掘り方中心を取ると1.8ｍ等間となる。柱列方向は調査南北基準線とほぼ一致する。

SD897溝　（第２図）

幅30cm～40cm，深さ40cm，南北約４ｍの溝である。溝の方向は，調査南北基準線とほぼ一致する。

SD899～901溝　（第58図，図版６・８）

調査区北東部で検出した３本の南北溝である、北はさらに調査区外に延び，南は削平されている。各々の溝は中心で1.5ｍ間隔で，溝の方向はほぼ調査南北基準線に一致する。同時に存在したものか，時期の異なるものか不明であるが，西のSD901と東の



第58図　SA913柱列，SD899－901溝

SI209竪穴住居跡出土遺物（17次）（第60図，図版32）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	埋土	ヘラ切り	底部撫で	
2	須恵器	床面	ヘラ切り		内面硯転用
3	赤褐色土器	埋土	糸切り	体下端回転ケズリ	
4	赤褐色土器	埋土	糸切り	体下端回転ケズリ	墨書「政」
5	赤褐色土器	埋土	糸切り	体下端回転ケズリ	
6	赤褐色土器	埋土	糸切り	体下端回転ケズリ	
7	須恵器	埋土		肩部回転ケズリ	

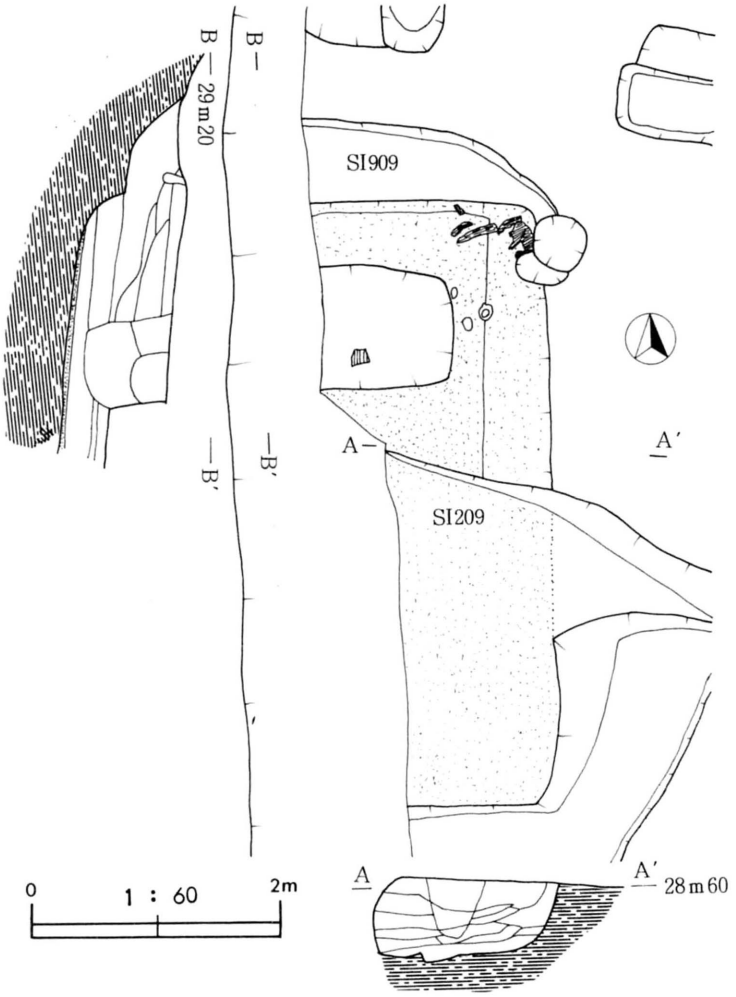
SI237竪穴遺構出土遺物（17次）（第61図，図版33）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	土師器	埋土		内黒	墨書「濱継 一舘」
2	砥石	床面			

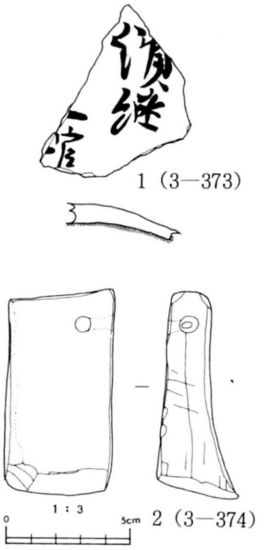
SD899の埋土が異なることから，少なくともこの両者に関しては，時期の相違があるものと考えられる。重複関係については，SD901がSA907より古く，SD900はSA913より古いもので，SD899は他の遺構との重複がなく不明である。

SI209竪穴住居跡　（第59図）

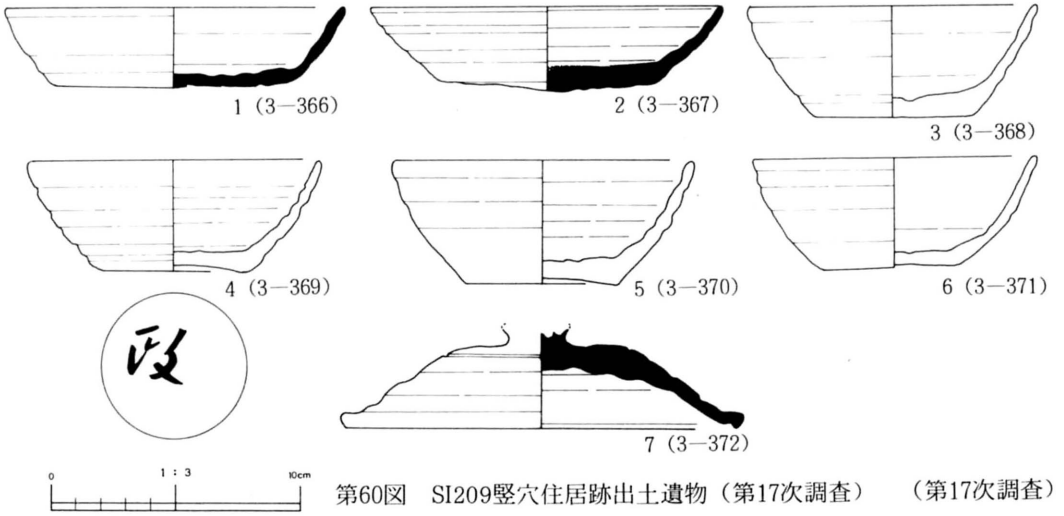
第17次調査で既に検出済みで



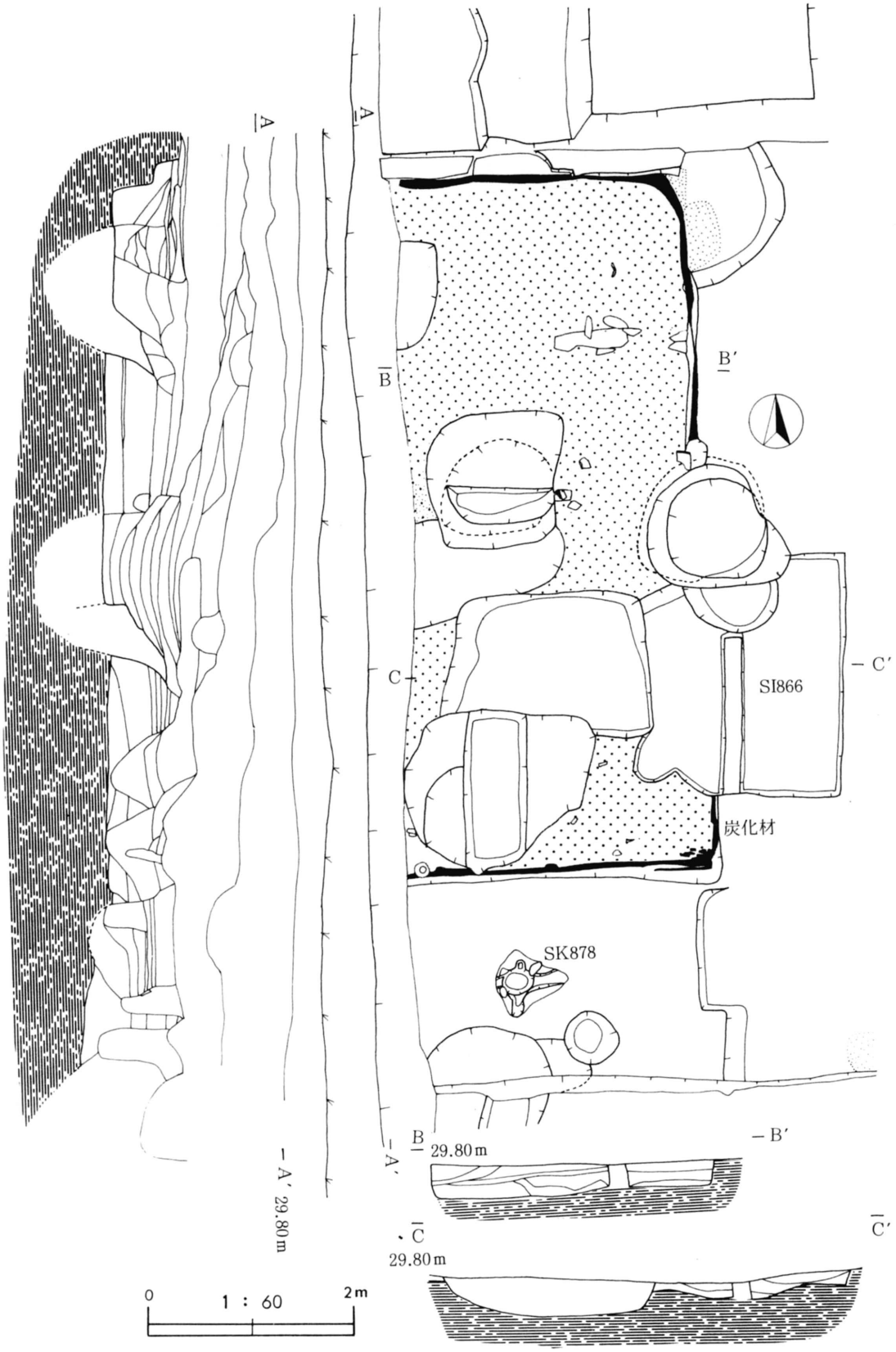
第59図　SI209・SI909竪穴住居跡



第61図　SI237竪穴遺構出土遺物（第17次調査）



第60図　SI209竪穴住居跡出土遺物（第17次調査）　（第17次調査）



第62図　SI890竪穴住居跡

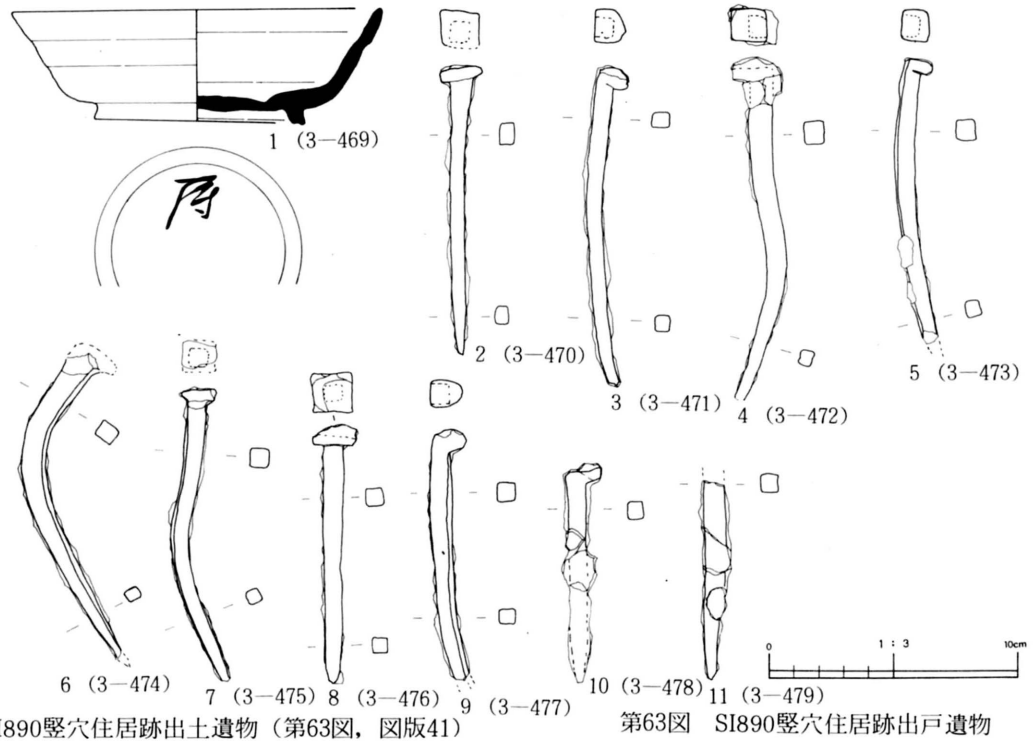
あり，本次調査ではその北東部を検出し，全体の規模が明確となった。東西5.8m，南北5mの方形で，深さ30cm～40cm，床面及び壁面には，炭化材や禾本科植物の炭化物が遺存する焼失家屋である。

SI236竪穴住居跡　（第64図）

第17次調査で一部検出済みであり，本次調査ではその東半部を検出，東西3.1m，南北3.5mの規模が明確となった。カマドは東壁ほぼ中央に位置し，袖部に平瓦を使用した粘土組である。袖部の瓦は，完形の一枚瓦である。

SI237竪穴遺構　（第64図）

第17次調査で西半部を検出済みである。東西1.7m，南北2m以上であるが，北壁不明のため全



SI890竪穴住居跡出土遺物（第63図，図版41）　　第63図　SI890竪穴住居跡出戸遺物

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	床面	ヘラ切り		墨書「厨」
2	鉄釘	床面			
3	鉄釘	床面			
4	鉄釘	床面			
5	鉄釘	床面			
6	鉄釘	床面			
7	鉄釘	床面			
8	鉄釘	床面			
9	鉄釘	床面			
10	鉄釘	床面			
11	鉄釘	床面			

体は明確でない。カマド，炉などの付設はない。

SI890竪穴住居跡

（第62図，図版16）

東西は西側が調査区外にあり不明，南北は6.8ｍの焼失家屋である、壁には板材が炭化した状態で遺存しており，細い杭状の材がそれを押さえている。床面には，禾本科植物の炭化物が東西方向に敷き詰められた状態で検出した。また，床面からは鉄釘が10点出土した。SB845，SI866，SK888と重複し，それより古いものである。

SI891竪穴住居跡　（第64，65図，図版14）

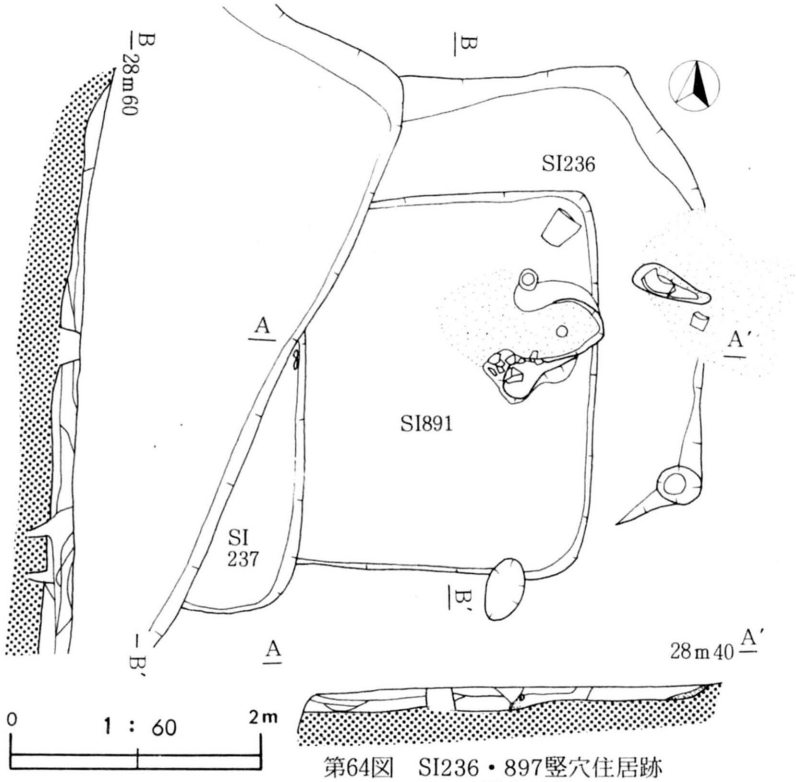
東西不明，南北３ｍの方形である、東壁中央やや北寄りの位置にカマドが付設されている。カマドは粘土組で，南袖部に河原石を使用し，燃焼部には土師器甕の底部を伏せて支脚としている。

SI892竪穴住居跡　（第67図，図版17）

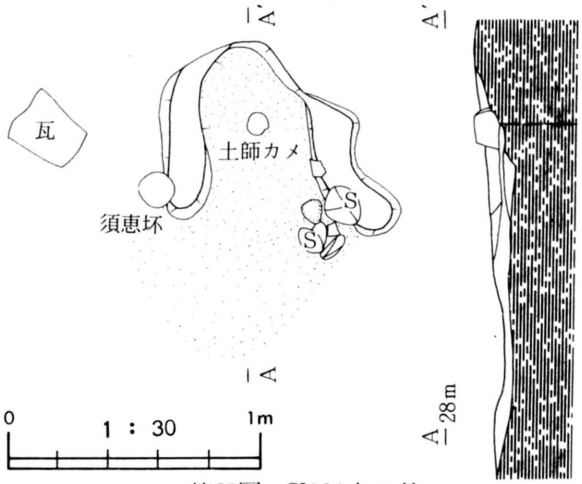
東西は削平のため不明，南北5.4ｍの方形である。炭化物の堆積する床面までの深さは，北壁で20cm，その下層でSI893を検出した。

SI893竪穴住居跡　（第67，68図，図版17，18）

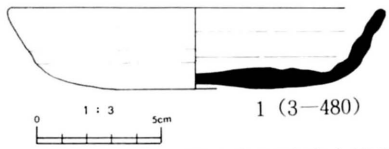
SI892の床面下で検出した。東西3.4ｍ，南



第64図　SI236・897竪穴住居跡
SI237竪穴遺構



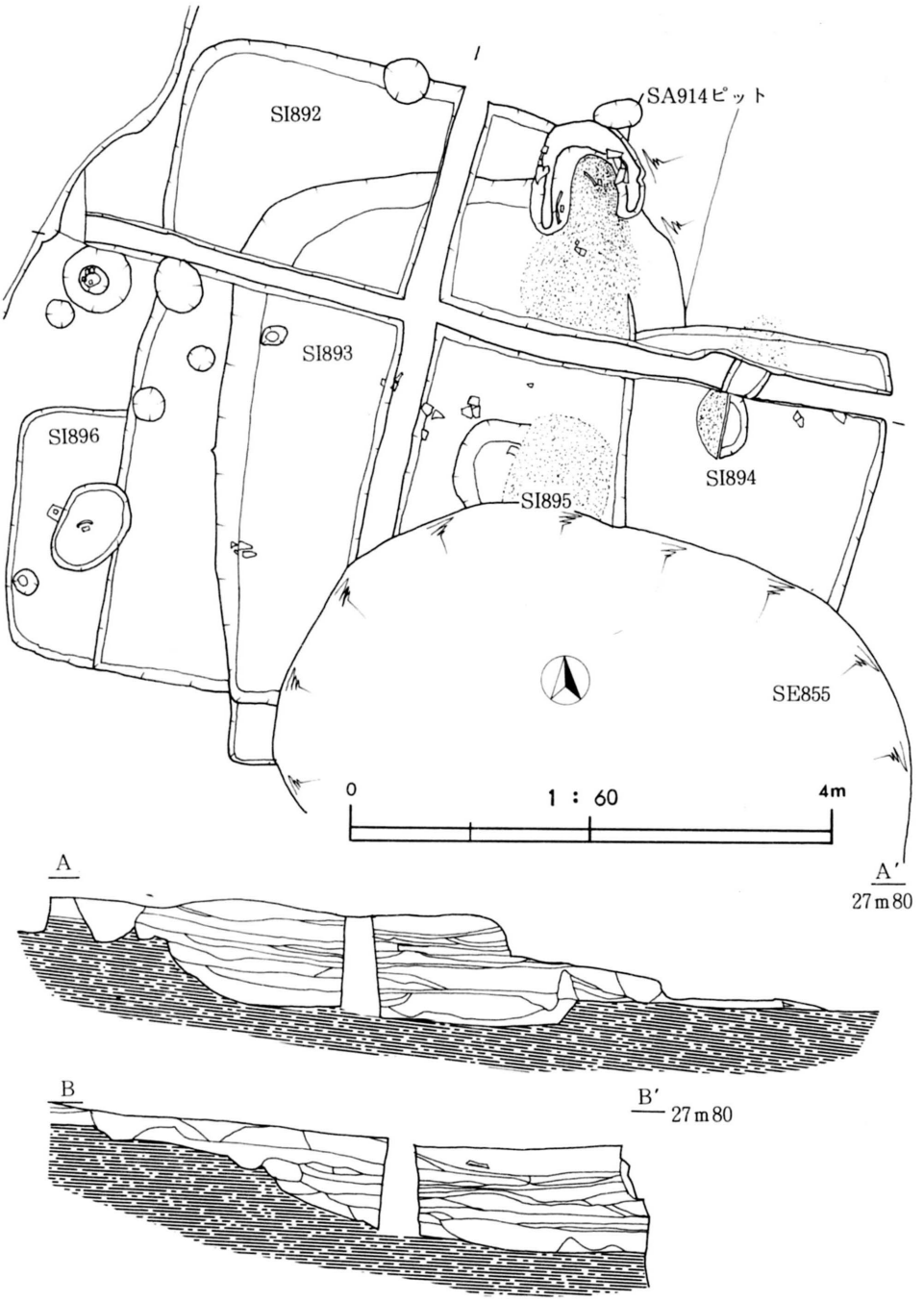
第65図　SI891カマド



第66図　SI891竪穴住居跡出土遺物

SI891竪穴住居跡出土遺物（第66図，図版41）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	須　恵　器	床　　面	ヘラ切り		



第67図　SI892～896竪穴住居跡

SI892竪穴住居跡出土遺物（第69図，図版41）

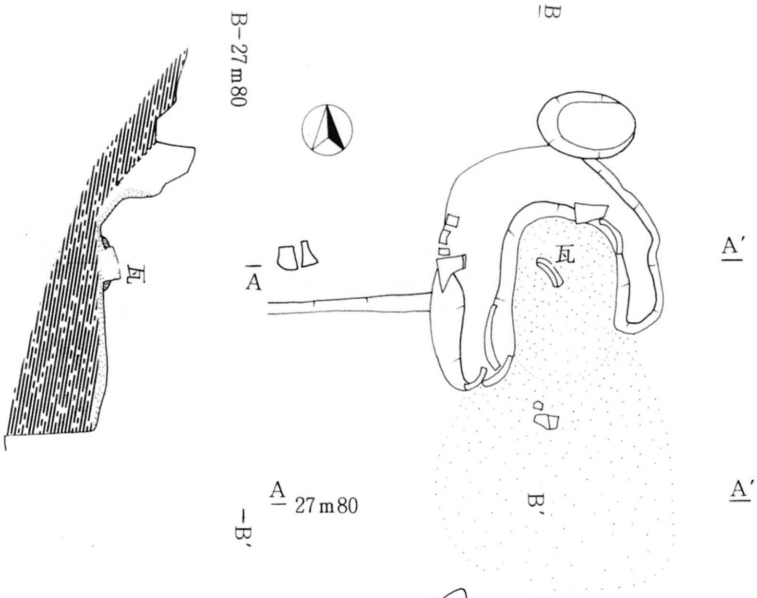
No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	土　師　器	埋　　土		非ロクロ、内外面磨き	非黒色

北4.3mの方形で，北壁東隅にカマドが付設されている。カマドは粘土組であるが，袖部の芯材，燃焼部の壁面に瓦を使用している。埋土中，床面から浮いた位置にさらに炭化物の床面，カマドの痕跡と考えられる粘土，焼土塊を検出している。

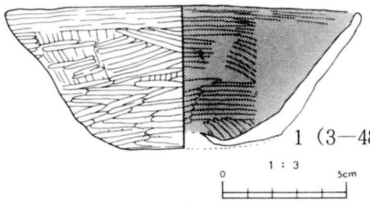
SI894 竪穴住居跡

（第67図，図版17）

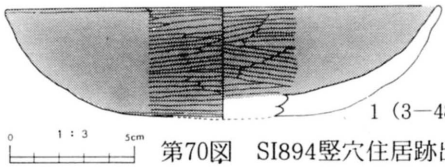
SI893と重複し，それより古いものである。北壁でカマドの痕跡と考えられる



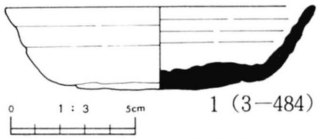
第68図　SI893カマド



第69図　SI892竪穴住居跡出遺物



第70図　SI894竪穴住居跡出土遺物



第71図　SI909竪穴住居跡出土遺物

SI894竪穴住居跡出土遺物（第70図，図版41）

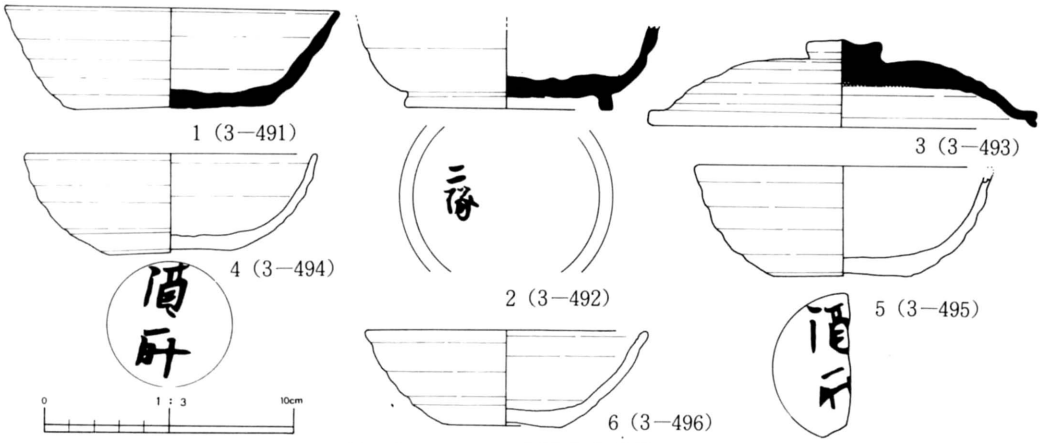
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	土師器	床面		非ロクロ、内外面磨き	内外黒色

SI909竪穴住居跡出土遺物（第71図，図版41）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	床面	ヘラ切り	撫で	

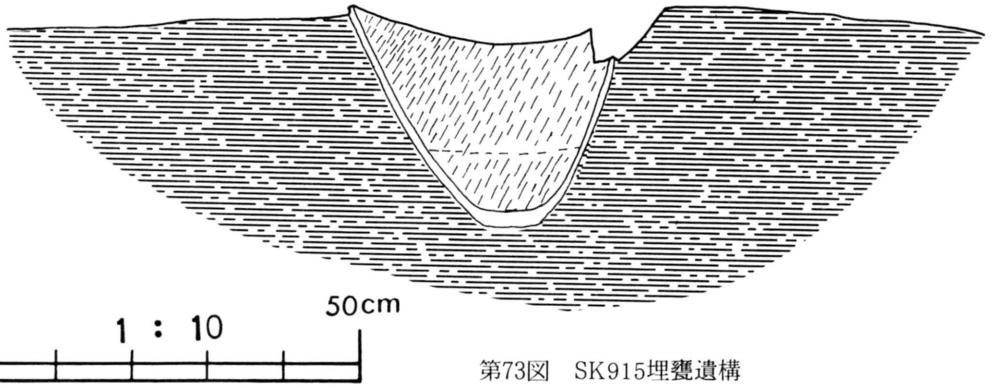
SK905土壙出土遺物（第72図，図版42）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	掘り方	ヘラ切り		赤褐色
2	須恵器	掘り方	ヘラ切り	体下端回転ケズリ	墨書「二隊」
3	須恵器	掘り方	ヘラ切り	肩部回転ケズリ	転用硯
4	赤褐色土器	掘り方	糸切り	体下端、底部ケズリ	墨書「酒所」
5	赤褐色土器	掘り方	糸切り	体下端回転ケズリ	墨書「酒所」
6	赤褐色土器	掘り方	糸切り	体下端、底部周縁回転ケズリ	



第72図　SK905土壙出土遺物

26m80



第73図　SK915埋甕遺構

表土～第２層出土遺物（第74・75・76図，図版44～47）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	須　恵　器	表　　土	ヘラ切り		
2	須　恵　器	表　　採	ヘラ切り		
3	須　恵　器	耕　作　土	糸切り		墨書「口田」
4	須　恵　器	表　　採	糸切り	底部全面ケズリ	墨書「所」
5	須　恵　器	表　　土	ヘラ切り		墨書「厨」
6	須　恵　器	表　　土	ヘラ切り		墨書
7	須　恵　器	表　　土	ヘラ切り		墨書
8	須　恵　器	表　　土	ヘラ切り		墨書
9	須　恵　器	表　　土	糸切り		墨書「厨」
10	須　恵　器	表　　土	ヘラ切り		墨書「厨」
11	須　恵　器	表　　土	ヘラ切り		墨書「厨」
12	須　恵　器	表　　土	ヘラ切り	体下端回転ケズリ	墨書
13	須　恵　器	pit　２１３			墨書「山」
14	須　恵　器	表　　土			墨書「尻口」
15	須　恵　器	表　　土	ヘラ切り	外面回転ケズリ	
16	須　恵　器	表　　土			円面硯
17	赤褐色土器	表　　土	糸切り	体下端回転ケズリ	墨書「官」
18	赤褐色土器	表　　土		体下端回転ケズリ	
19	赤褐色土器	表　　土			

焼土を検出した。床面は焼土，炭化物が踏み固められた状態である。

SI895竪穴住居跡　（第67図，図版17）

前述のSI893の埋土内で検出した床面，カマドの痕跡と考えられる焼土塊を本住居跡とした。したがって，全体については不明である。床面である炭化物層は，SI894埋土上層まで延びていることから，本住居跡はSI893，894より新しいものである。

SI909竪穴住居跡　（第59図）

SI209と重複し，それより新しいものである。SI209の埋土上層で炭化物と床面，カマドの痕跡と考えられる焼土塊を検出した。

SK905土壙　（第58図，図版６）

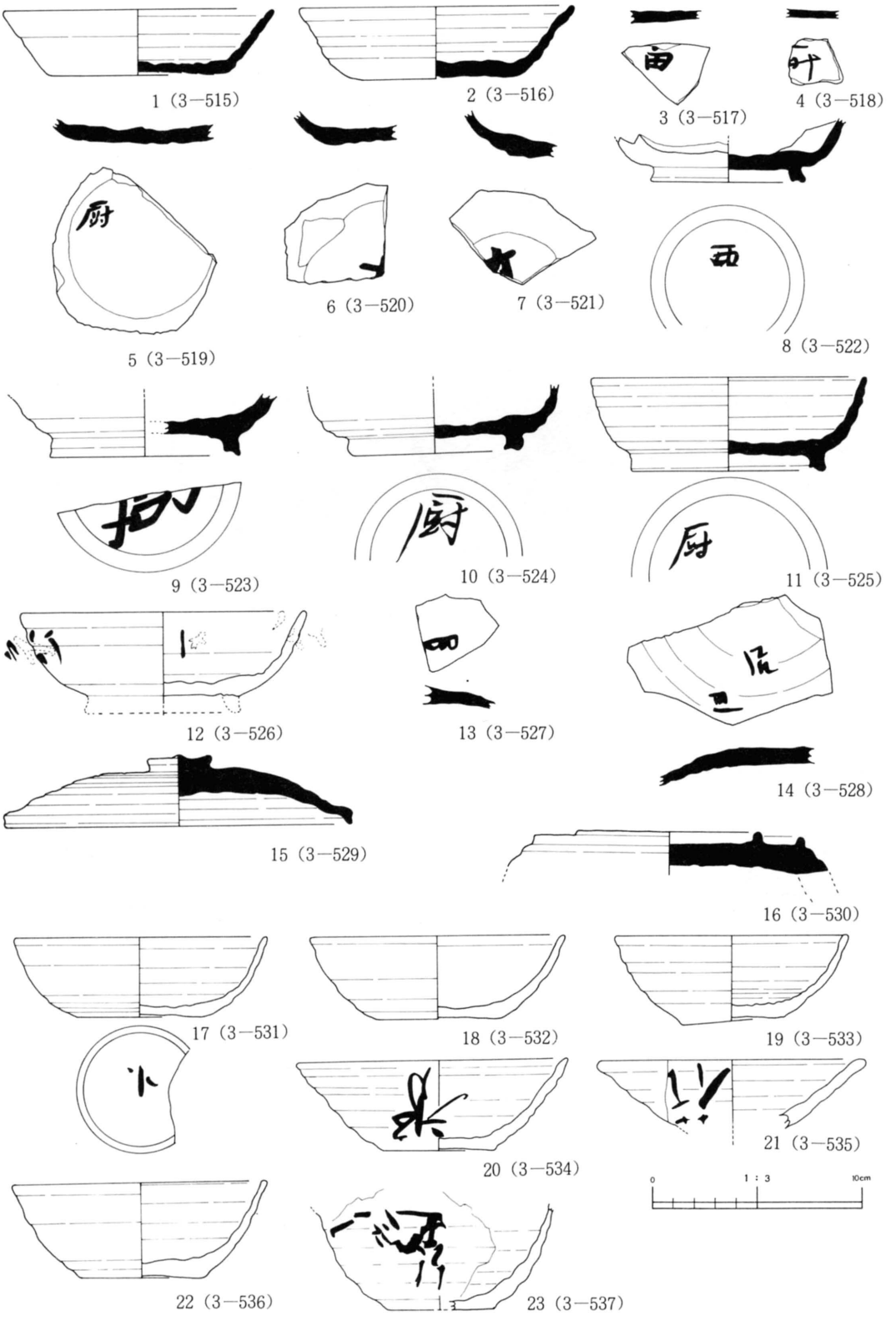
SD900，SA913柱列と重複し，前者より新しく，後者より古いものである。直径1.5ｍの円形，深さ30cmの鍋底状の掘り込みで，埋土内から須恵器，赤褐色土器がまとまって出土した。

表土～第２層出土遺物（第74・75・76図，図版44～47）

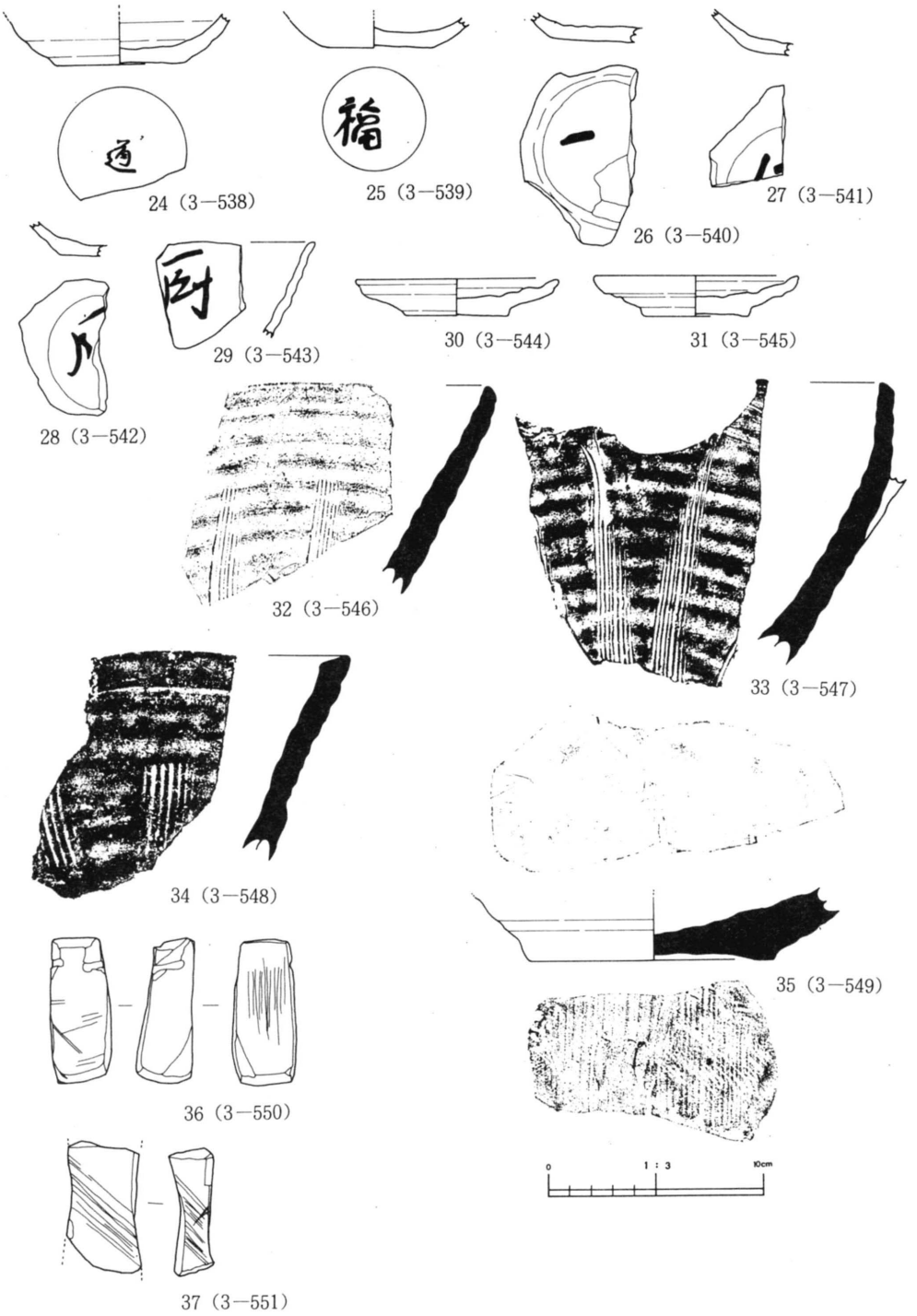
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
20	赤褐色土器	表　土	糸切り		墨書
21	赤褐色土器	耕作土			墨書「行」
22	赤褐色土器	表　採	糸切り		
23	赤褐色土器	耕作土	糸切り		墨書絵か
24	赤褐色土器	表　土	糸切り		墨書「道」
25	赤褐色土器	表　土	糸切り		墨書「福」
26	赤褐色土器	表　土	糸切り	体下端回転ケズリ	墨書「一」
27	赤褐色土器	表　土	糸切り		墨書
28	赤褐色土器	表　土	糸切り		墨書「厨」
29	赤褐色土器	表　土	糸切り		墨書「厨」
30	赤褐色土器	第４層	糸切り		
31	赤褐色土器	第　層	糸切り		
32	中世陶器	表　採			
33	中世陶器	表　土			
34	中世陶器	表　土			
35	中世陶器	表　土	静止糸きり		
36	砥　石	表　土			
37	砥　石	表　土			
38	中世陶器	表　土			

第３層出土遺物（第77図，図版47）

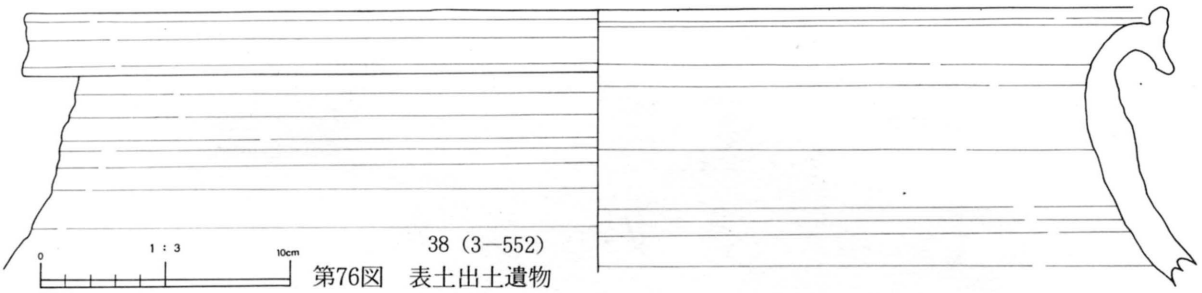
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	赤褐色土器	第３層	糸切り		
2	赤褐色土器	第３層	糸切り		
3	赤褐色土器	第３層	糸切り		墨書「清」
4	赤褐色土器	第３層	糸切り		墨書「厨」
5	赤褐色土器	第３層	糸切り		墨書「○」
6	須恵器	第３層			円面硯
7	砥　石	第３層			



第74図　表土～第２層出土遺物

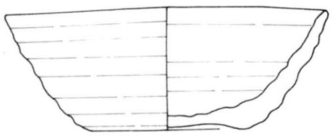


第75図　表土～第２層出土遺物

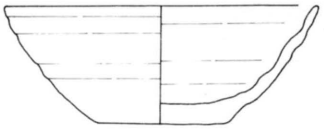


38（3—552）

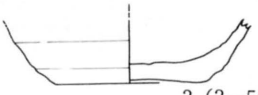
第76図　表土出土遺物



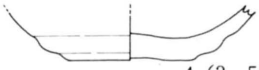
1（3—553）



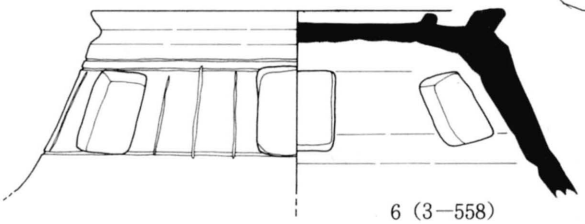
2（3—554）



3（3—555）



4（3—556）



6（3—558）

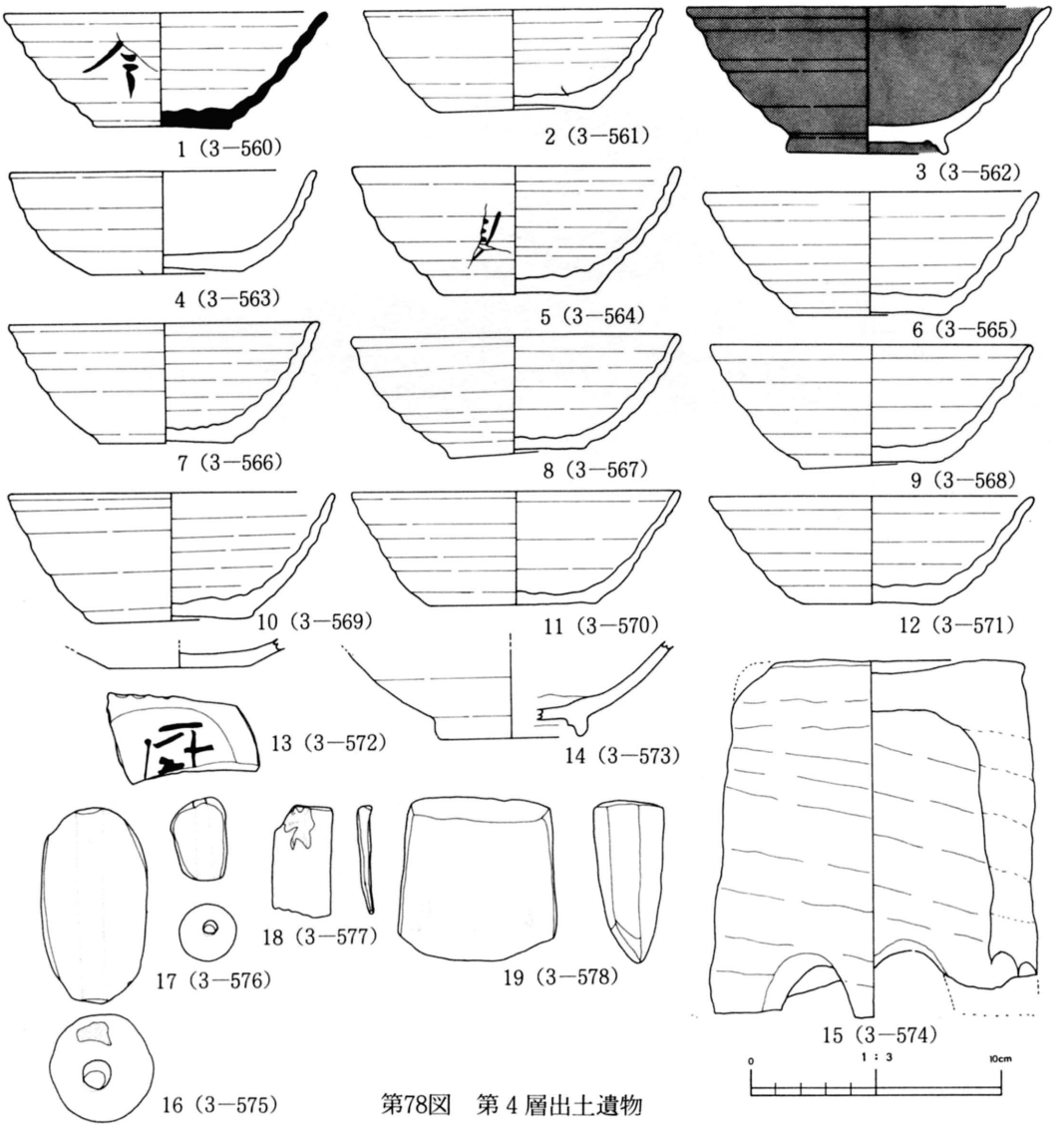
5（3—557）

第77図　第３層出土遺物

7（3—559）

第４層出土遺物（第78図，図版47・48）

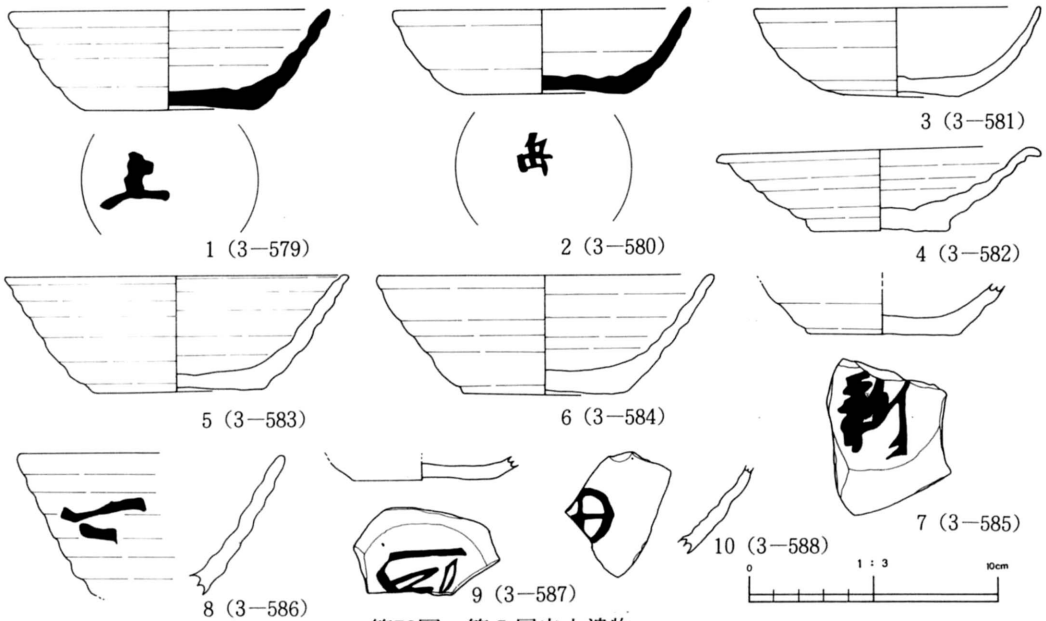
No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		墨書「今」
2	赤褐色土器	第　4　層	糸切り	体下端回転ケズリ	
3	土　師　器	第　4　層	糸切り	内外面磨き	内黒
4	赤褐色土器	第　4　層	糸切り	体下端回転ケズリ	
5	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		墨書
6	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		
7	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		
8	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		
9	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		
10	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		
11	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		
12	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		
13	赤褐色土器	第　4　層	糸切り		墨書「厨」
14	灰釉陶器	第　4　層		体下端回転ケズリ	
15	土　師　器	第　4　層			土製支脚
16	土　　錘	第　4　層			
17	土　　錘	第　4　層			
18	砥　　石	第　4　層			
19	磨製石斧	第　4　層			



第78図　第４層出土遺物

第５層出土遺物（第79図，図版48・49）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	須　恵　器	第　5　層	糸切り		墨書「上」
2	須　恵　器	第　5　層	糸切り		墨書「岳」
3	赤褐色土器	第　5　層	糸切り	体下端，底部周縁回転ケズリ	
4	赤褐色土器	第　5　層	糸切り		
5	赤褐色土器	第　5　層	糸切り		
6	赤褐色土器	第　5　層	糸切り		
7	赤褐色土器	第　5　層	糸切り		墨書「新」
8	赤褐色土器	第　5　層	糸切り		墨書「二」
9	赤褐色土器	第　5　層	糸切り		墨書「厨」
10	赤褐色土器	第　5　層	糸切り		墨書「⊕」



第79図　第５層出土遺物

第６層出土遺物（第80図，図版49・50）

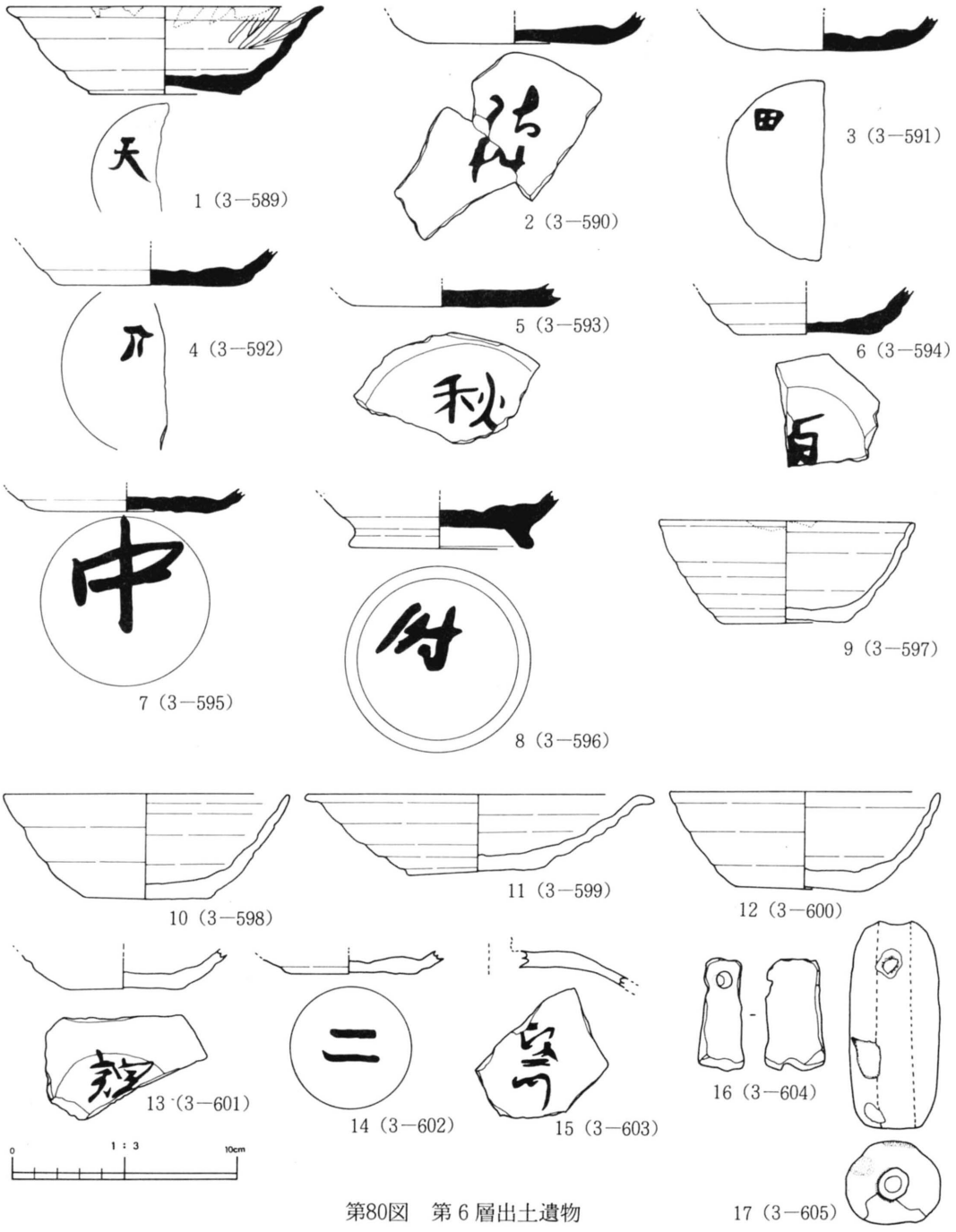
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	第６層	糸切り		墨書「天」・油煙
2	須恵器	第６層	ヘラ切り		墨書「仕料」
3	須恵器	第６層	ヘラ切り		墨書「田」
4	須恵器	第６層	ヘラ切り		墨書「介」
5	須恵器	第６層	ヘラ切り		墨書「秋」
6	須恵器	第６層	糸切り		墨書「酒」
7	須恵器	第６層	ヘラ切り		墨書「中」
8	須恵器	第６層	ヘラ切り		墨書「厨」
9	赤褐色土器	第６層	糸切り	体下端回転ケズリ	油煙
10	赤褐色土器	第６層	糸切り		
11	赤褐色土器	第６層	糸切り		
12	赤褐色土器	第６層	糸切り		
13	赤褐色土器	第６層	糸切り		墨書
14	赤褐色土器	第６層	糸切り		墨書「二」
15	赤褐色土器	第６層			墨書「口所」
16	砥石	第６層			
17	土錘	第６層			
18	砥石	第６層			
19	磨製石斧	第６層			

第８層出土遺物（第81図，図版50）

No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	第８層	ヘラ切り		墨書「官厨」
2	須恵器	第８層	ヘラ切り		墨書「守」
3	土師器	第８層	糸切り	体下端回転ケズリ、磨き	内黒、油煙
4	赤褐色土器	第８層	糸切り		
5	赤褐色土器	第８層	糸切り		

SK906掘り方　（第２図，図版16）

SI890と重複し，これより新しい柱掘り方であるが，現在これに組み合う掘り方は検出されておらず，発掘区外西に延びる可能性がある。掘り方に重複があり，新しい掘り方埋土は，粘土を主体とするものである。

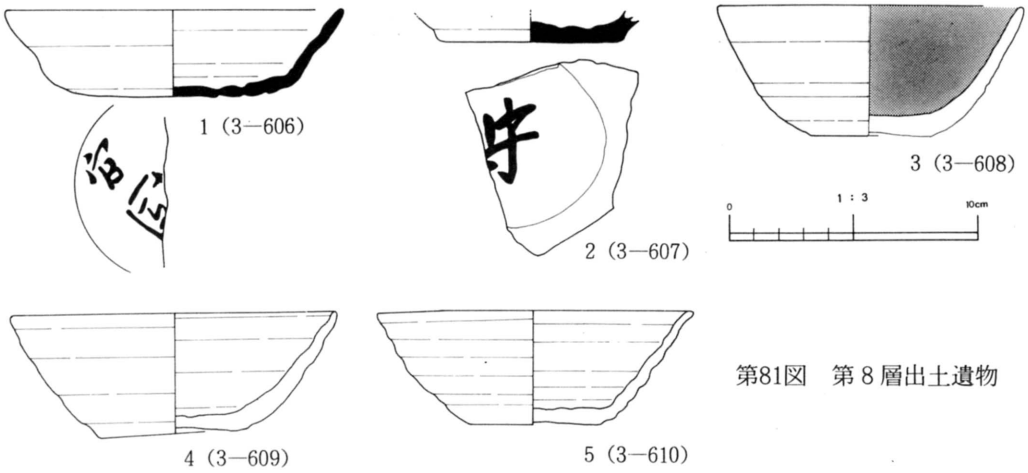


第80図　第６層出土遺物

SA914ピット　（第67図，図版18）

SI893カマドを一部壊している直径20cmのピットである。埋土内から槍鉋と考えられる鉄製品が出土した。

SK915埋甕遺構　（第73図，図版19）



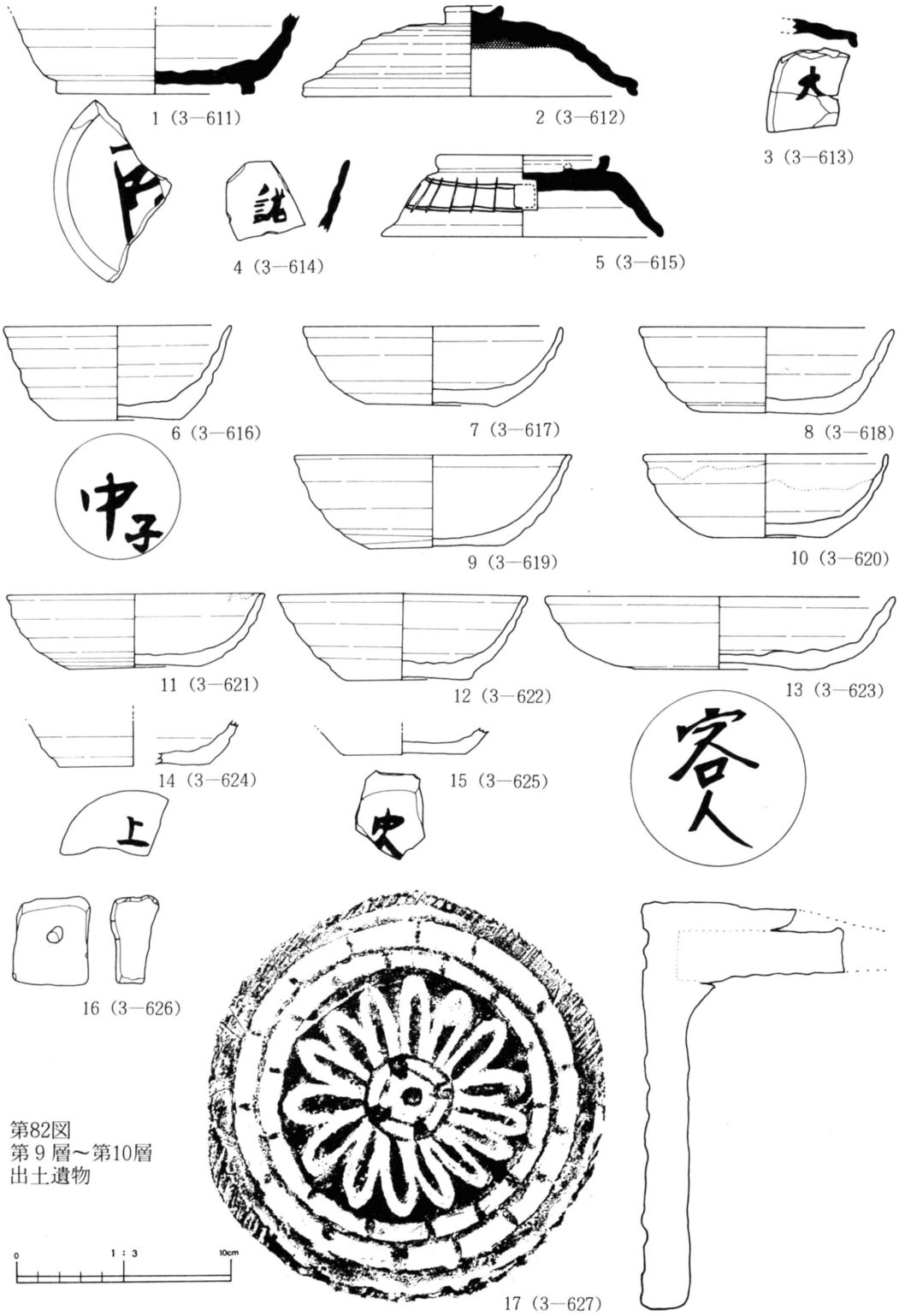
第81図　第８層出土遺物

第９・10層出土遺物（第82図，図版51，52）

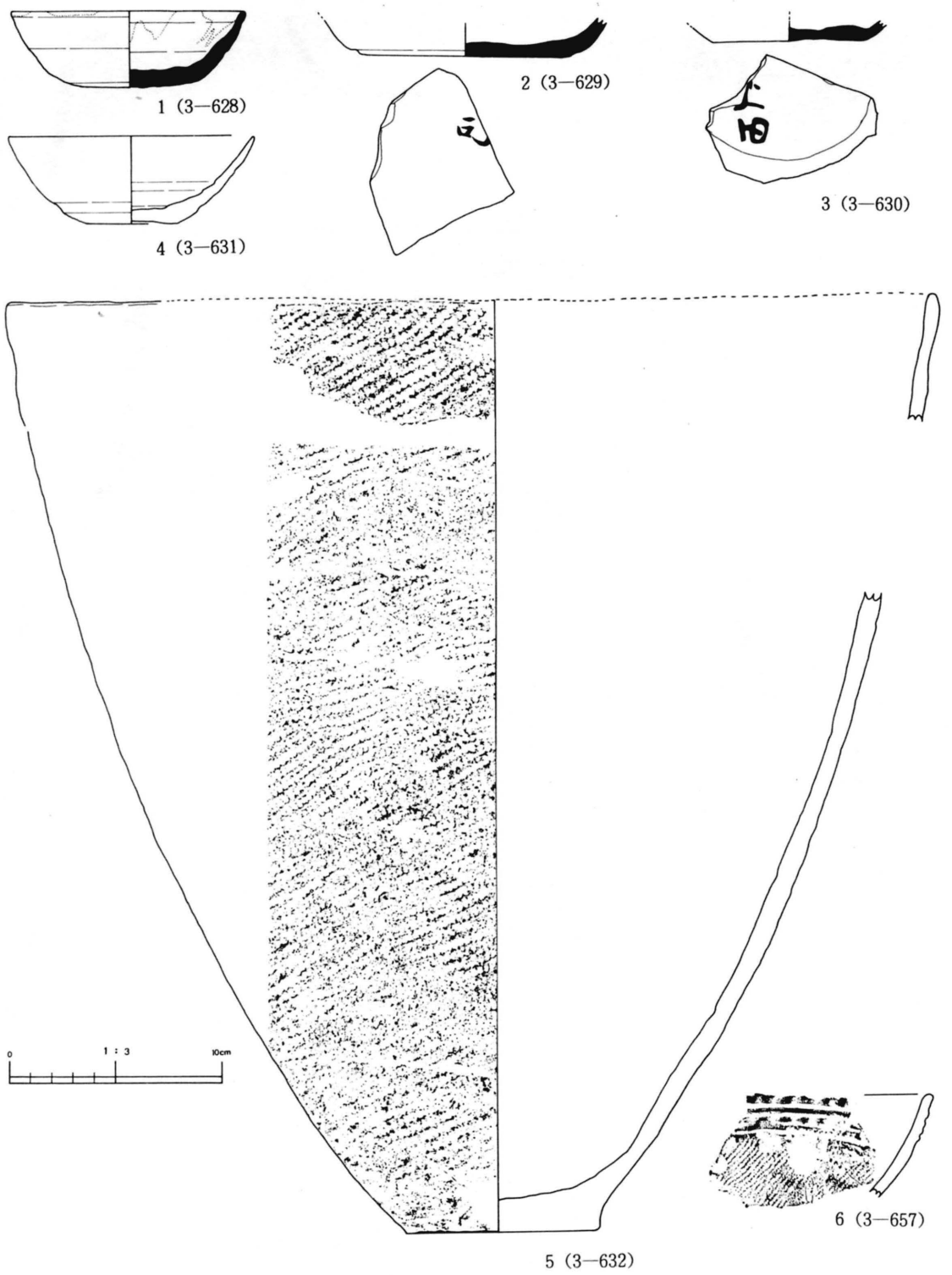
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	第10層	ヘラ切り		墨書「厨」
2	須恵器	第10層	ヘラ切り		
3	須恵器	第10層	ヘラ切り		墨書「大」
4	須恵器	第10層	ヘラ切り		墨書「諸」
5	須恵器	第10層	ヘラ切り		円面硯
6	赤褐色土器	第10層	糸切り	体下端回転ケズリ	墨書「中子」
7	赤褐色土器	第10層	糸切り	体下端、底部周縁回転ケズリ	
8	赤褐色土器	第10層	糸切り	体下端回転ケズリ	
9	赤褐色土器	第10層	糸切り	体下端回転ケズリ	
10	赤褐色土器	第10層	糸切り	体下端回転ケズリ	油煙
11	赤褐色土器	第10層	糸切り	体下端回転ケズリ	油煙
12	赤褐色土器	第10層	糸切り		
13	赤褐色土器	第10層	糸切り		墨書「客人」
14	赤褐色土器	第９層	糸切り		墨書「上」
15	赤褐色土器	第９層	糸切り		墨書「中食」
16	砥石	第10層			
17	軒丸瓦	第10層			

第11～地山層出土遺物（第83図，図版52）

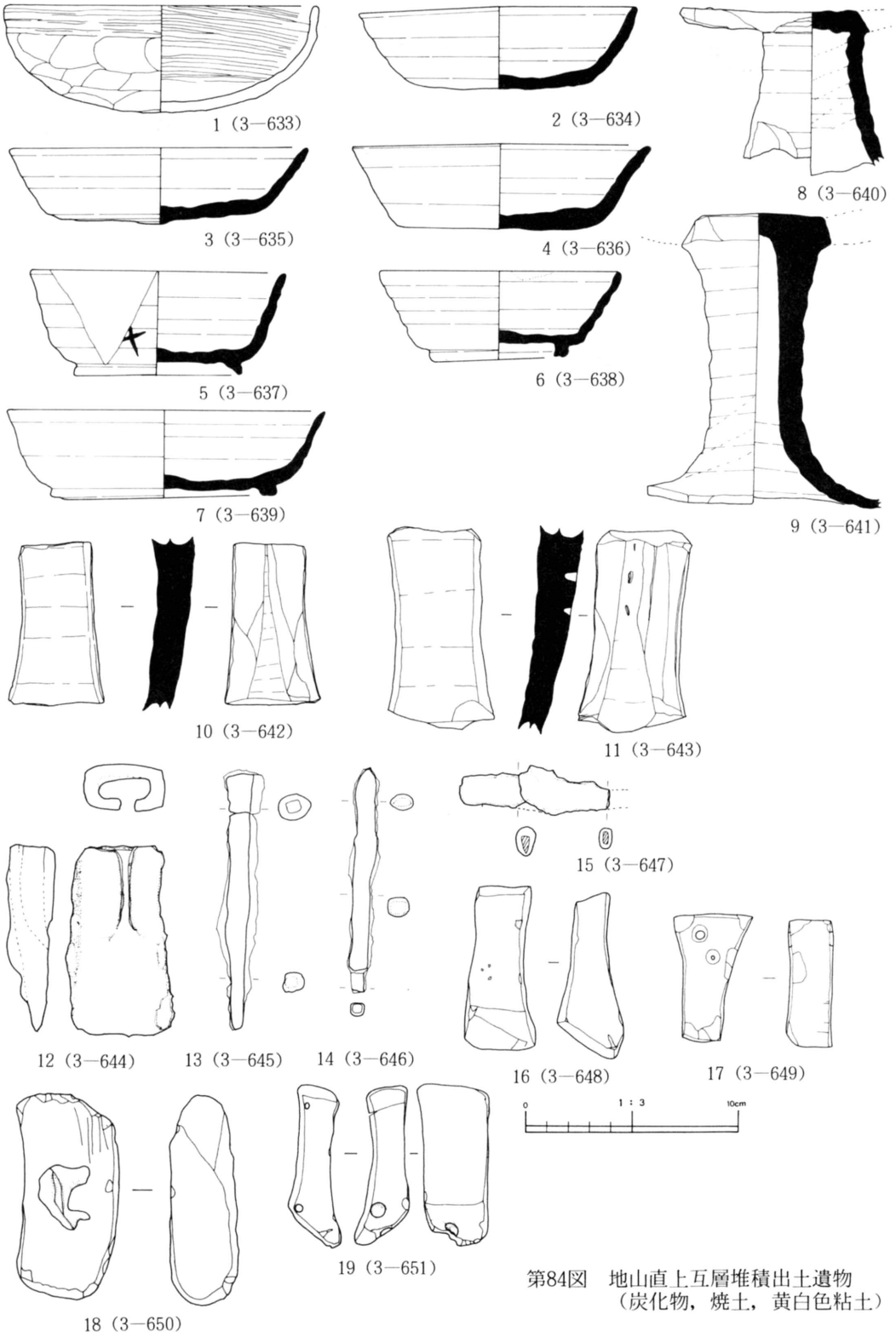
No.	種　類	出土層位	切り離し	調　整	備　考
1	須恵器	最下層	ヘラ切り		油煙
2	須恵器	地山直上	ヘラ切り		墨書「司」
3	須恵器	第11層	ヘラ切り		墨書「秋田」
4	赤褐色土器	第11層	糸切り	体下端回転ケズリ	
5	縄文土器	地山砂			SK915埋甕
6	縄文土器	地山砂			



第82図
第９層～第10層
出土遺物



第83図　第11層～地山層出土遺物



第84図　地山直上互層堆積出土遺物
（炭化物，焼土，黄白色粘土）

地山直上互層堆積出土遺物（第84図，図版53）

No.	種　　類	出土層位	切り離し	調　　整	備　　考
1	土　師　器	互層堆積		外面手持ちケズリ、内面撫で	非内黒・ロクロ
2	須　恵　器	互層堆積	ヘラ切り		
3	須　恵　器	互層堆積	ヘラ切り		
4	須　恵　器	互層堆積		底部手持ちケズリ	
5	須　恵　器	互層堆積	糸切り		ヘラ記号
6	須　恵　器	互層堆積	ヘラ切り	体下端回転ケズリ	油煙
7	須　恵　器	互層堆積	ヘラ切り	体下端撫で	
8	須　恵　器	互層堆積			高坏
9	須　恵　器	互層堆積			高坏
10	須　恵　器	互層堆積			高坏
11	須　恵　器	互層堆積			高坏
12	鉄　　斧	互層堆積			
13	鉄　　鏃	互層堆積			
14	鉄　　鏃	互層堆積			
15	刀　　子	互層堆積			
16	砥　　石	互層堆積			
17	砥　　石	互層堆積			
18	砥　　石	互層堆積			
19	砥　　石	互層堆積			

地山飛砂層で検出された縄文時代の埋甕遺構である。単節斜縄文の深鉢形土器が直立した状態で出土した。埋設の際の掘り込みは，土器ぎりぎりに行ったためか明確にすることができなかった。

3）各層位出土遺物

第44次調査地での基本的層序は，第１層～第３層までが耕作土，第４層が赤褐色土器片を含む黒色砂質土，第５層が灰褐色砂，褐色砂，第６層が粘土，第７層が褐色砂，第８層が焼土，第９層～10層が褐色砂，赤褐色砂，第11～地山層までが黄褐色砂（炭化物混入）である、また調査区南半，S201付近に，傾斜面を流れた土砂が何らかの原因で堰き止められたと考えられる互層堆積層が地山飛砂層上に認められる。互層堆積層の南では，築地崩壊土と考えられる粘土層を検出しているが，層序的に第４層の下層であるという以外は北側の他の層と直接には結びつかない。

Ⅲ　第45次発掘調査

1）調査経過

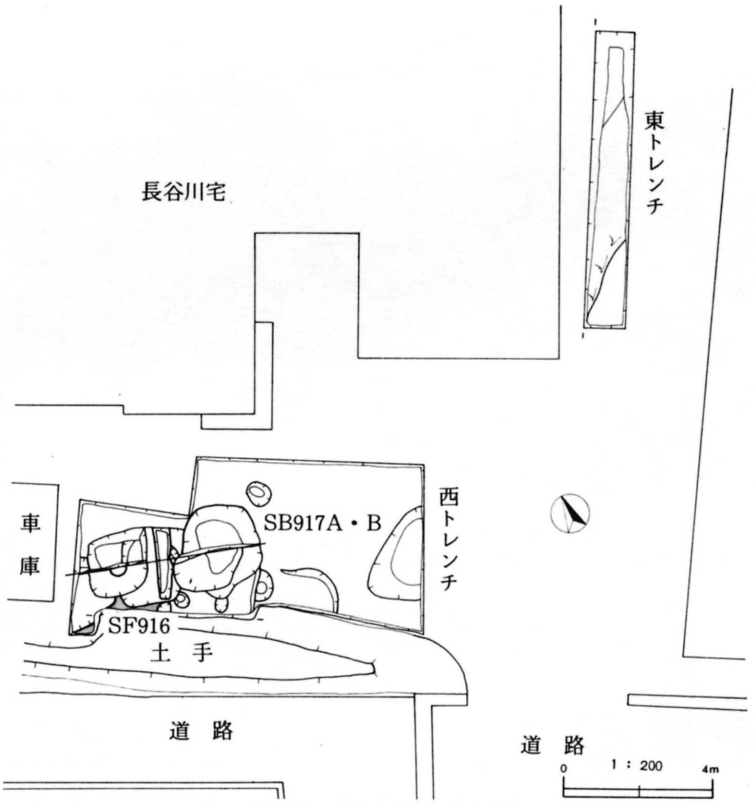
第45次調査は，住宅改築に伴う緊急発掘調査で，委保第４の335号の通知に基づいて実施した。調査地は，秋田市寺内字大小路192番地，長谷川謙治宅地内である。

発掘調査は，東・西２本のトレンチを設定し５月６日から同17日まで，第44次調査と並行して実施した。調査面積は，約18㎡である。

調査地は，第10次，13次，24次，29次調査で検出した秋田城外郭線の延長線上に位置し，これに関連する遺構の存在が予想されていた。

住宅前庭部に設定した西トレンチ表面は，一面にアスファルト舗装されており，その際に敷き均された砕石を除去すると遺構検出面の飛砂層である。住宅東側に設定した東トレンチは，地表面直下に飛砂層とその下の寺内層（粘土層）が検出されたことから，包含層及び飛砂層の一部が削平されたものと考えられた。

調査の結果，西トレンチ内から築地，櫓状掘立柱建物跡が検出された。

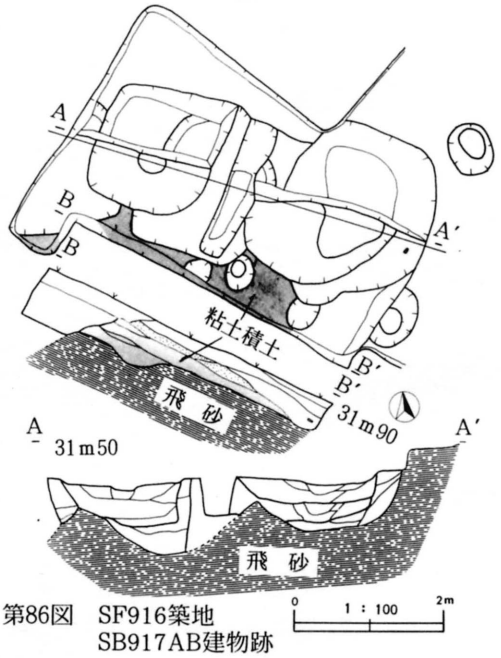


第85図　第45次調査検出遺構図

2）検出遺構と出土遺物

SF916築地　（第85，86図，図版20，21）

長谷川氏宅地南西部の道路境界に東西約15m，幅約2m，高さ約1mの土手状の高まりがあった。その裾部分の一部を削り土層の堆積状態を観察したところ，厚さ20cm～40cmの黄白色粘土が認められた。粘土層は，飛砂層上に直接積み上げられたもので，部分的に版築状の互層をなしており，焼土，炭化物の混入する土層を境に上層には瓦片が含まれるものの，下層は無遺物層であった。このことから，第29次調査検出築地の延長線であることもあり，下層粘土積み土を築地の積み土，上層をその崩壊土と判断した。しかし，その幅，方向等については，土手に欅が植え並べられており，明確にすることができなかった。

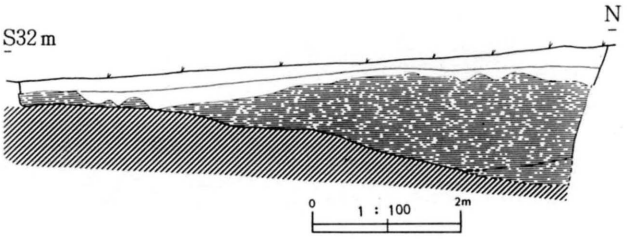


第86図　SF916築地
SB917AB建物跡

SB917A.B建物跡　（第86図，図版20，21）

粘土遺構を切る状態で，新・旧2時期の掘立柱建物跡が検出された。いずれも北側の柱列で，新

期SB917Aの掘り方は2個，旧期SB917Bの掘り方は3個である。新期の柱痕跡の間隔は，抜き穴の状況から約2.4mと考えられ，旧期掘り方とほぼ同位置で建て替えているものの，わずかに西に位置をずらし，掘り方の深さも浅くなっている。



第87図　東トレンチ断面図

この建物は東西2間以上であり，築地を壊していることから，築地崩壊後の外郭施設（布掘りを伴う柱列）に取り付く2間×1間の櫓状建物の可能性がある。掘り方の規模，外郭線との位置関係など，これまで検出された第10次，13次の建物と類似するものである。

遺物は，新・旧掘り方内から赤褐色土器，須恵器坏，内黒土師器，瓦の小片が出土した。

Ⅳ　第46次発掘調査

1）調査経過

第46次調査は，鵜ノ木地区南西部を対象に10月6日から11月18日まで実施した。調査面積は約504㎡である。

挿図6　第46次調査周辺地形図

調査地は，昨年度実施した第43次調査の西隣接地にあたり，大部分原野のため9日まで草刈を実施した。また第43次調査で検出したSB021掘立柱建物跡は，調査期間の制約から未精査のまま終了したため，30日までその再精査も並行して実施した。

さきにSB021について記すことにする。これまで新SB021A，旧SB021Bの2時期が認められ，前者の柱痕跡には，焼土，炭化物が混入することが判明していた。まず昨年度の状態で全景写真を撮り，庇と中央，東柱列掘り方の断ち割りを行った。その結果，庇3個の柱痕跡には焼土，炭化物の混入が認められ，身舎の新時期の柱痕跡と共通することが判明した。また掘り方の重複が認められないことから，SB021Bには庇が伴わなかったものと考えられる。身舎の掘り方は，すべて2時期の重複が認められ，SB021Aは平面形が円形，深さはSB021Bより浅い鍋底状断面を呈する（14日）。身舎西柱列は，遺構保存のため断面断ち割りを行わなかった。断面の写真，図面作成及び平面図作成（30日）。この間，天候，作業工程の関係で度々中断があった。

一方第46次調査は，草刈後グリッド設定（13日），表土剥ぎを実施した（28日）。第2層褐色砂質土（耕作土）を除去したところ，昨年SB795とした掘立柱建物跡の西方掘り方が検出され，東西3間以上であることが確認できた。また，SB795のほぼ真中で西半部が削平された竪穴住居跡が確認

された（11月１日）。SB795の北，西側では，土取り穴が検出されたが大部分は近世以降の撹乱であることが判明し，古代～中世と断定できる土取り穴は，SI918の北側に位置するSK919と西側のSK920である。

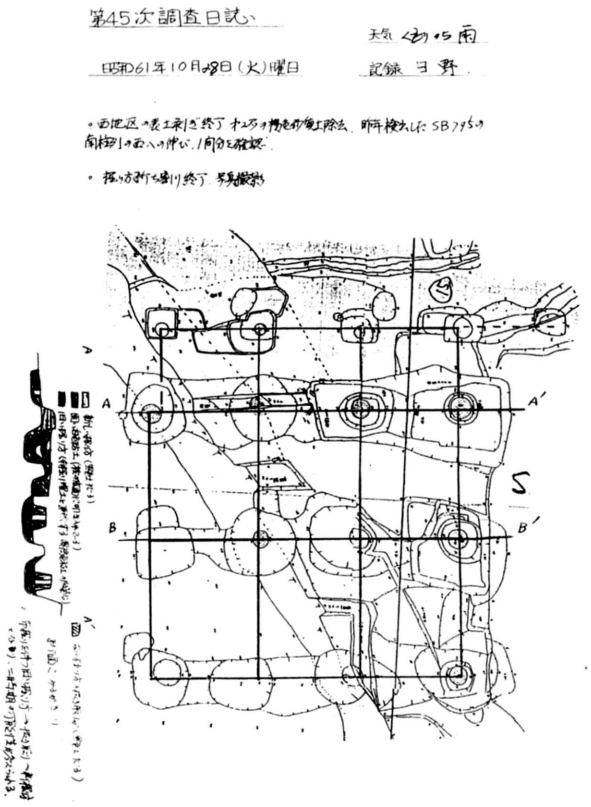
調査区の西半分は，SI918，SB795の位置する面より低く約２ｍの段差がある。表土を除去した段階で，不整形の落ち込みが検出されたが，これらはすべて近世以降の撹乱であることが判明した（14日）。東西KTライン，南南10ラインベルト除去（８日）。

調査区中央部に設定した基準杭を除去するに先立って櫓り方を設定したが，地形の高低差が大きいため水糸を２段にした。標高は，上段が39.70ｍ，下段は38.20ｍである（10日）。

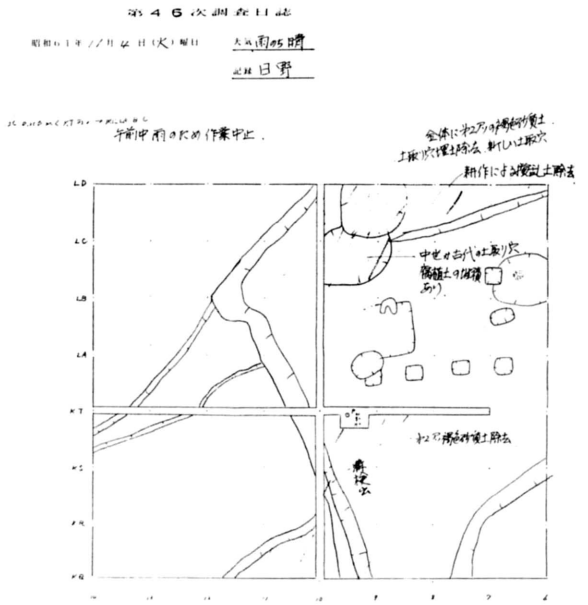
平面実測は，検出遺構が少なかったため発掘作業と並行して実施した。。

SI918精査。埋め土を除去し，カマド，周溝を掘り下げる。住居跡内の十字の土層ベルトは，写真，図面終了後除去した（17日）。

11月18日，全景写真を撮り，調査を完了した。



挿図７

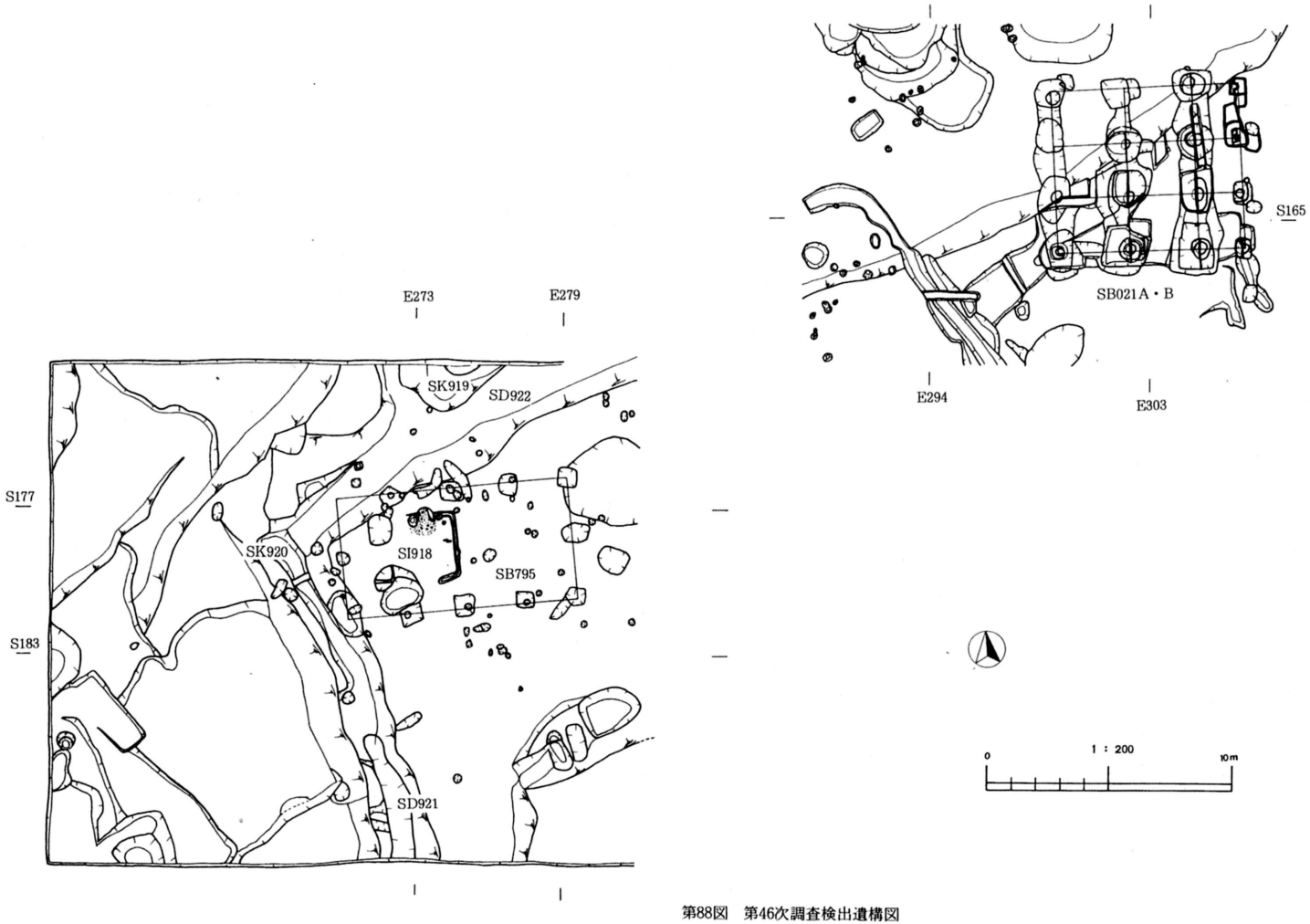


挿図８

２）検出遺構と出土遺物

SB021A･B建物跡　（第89図，図版26，27）

本建物跡は昭和34～37年の国営調査で，庇を除く東南部が既に調査済みであったものを，昨年度第43次調査として周辺を



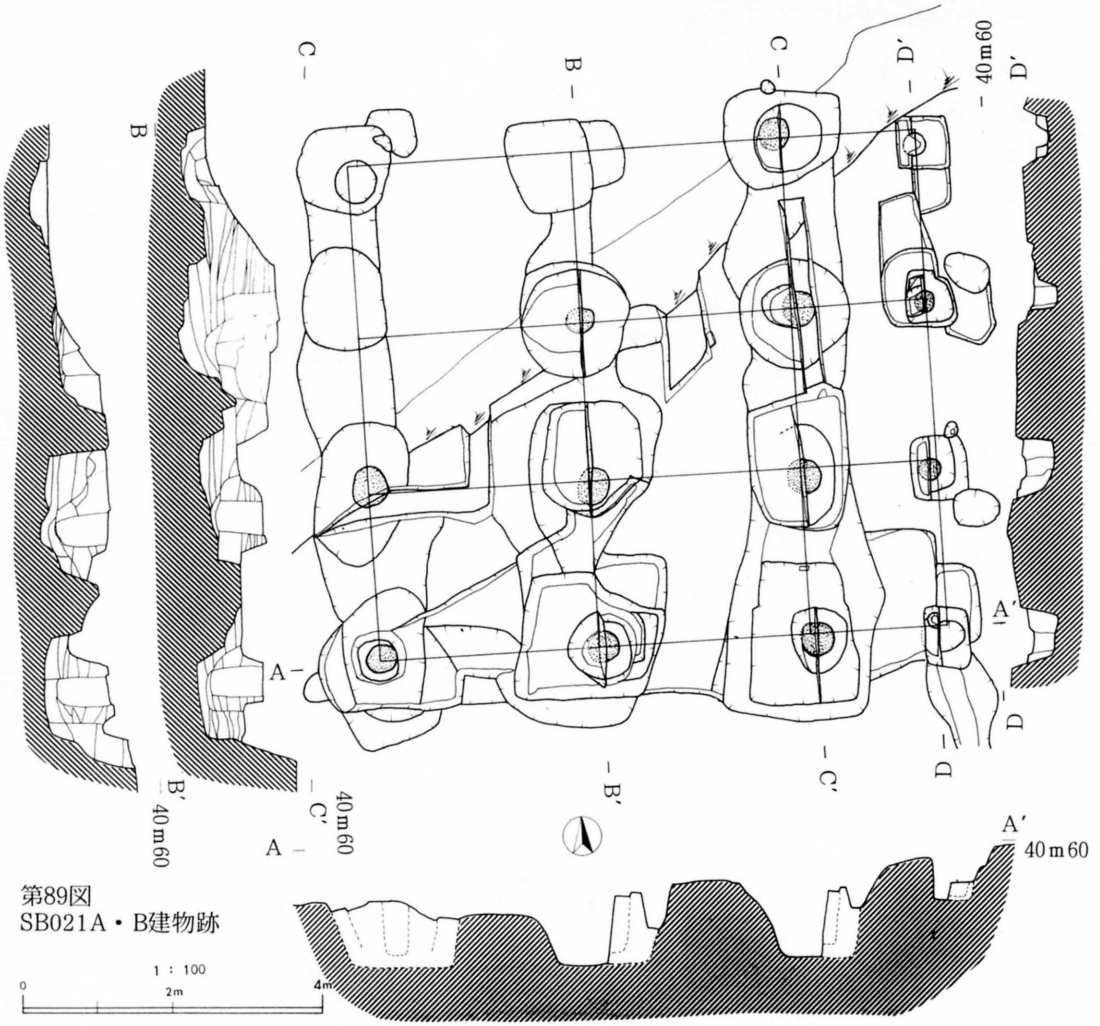
第88図　第46次調査検出遺構図

含め再調査を実施した。しかし，調査期間の制約で精査できなかたため，今次第46次調査として実施したものである。

本建物跡は，一部に整地地業が認められる。最も遺存状況の良好な中央部土手上で検出されたもので，赤褐色土を厚さ約20㎝～30㎝で地山ローム層上に積み上げている。積み土は，版築状ではないが比較的堅く締まり、瓦等が混入している。この積み土が基壇を構成するのか，またSB021Bの時期にも伴ったものか不明である。

SB021A

SB021Bより新しい。北西部の土手及び一段低い部分を調査したところ，掘り方の底面が遺存していることが確認できた。また東には、庇の取り付く事も判明した。このことから建物の規模は東西2 間×南北３間に東の片庇を伴う掘立柱建物跡と考えられる。柱間は，南妻の西から３ｍ＋2.9ｍ＋2.8ｍ，東桁の北から2.3ｍ＋2.3ｍ＋2.2ｍである。掘り方は，径約1.2ｍの円形，深さは深



第89図
SB021A・B建物跡

いもので約1.2m，断面は鍋底状を呈する。掘り方埋土は，赤褐色のボソボソしたものと，黄褐色土を堅く版築状に叩き締めた両者が認められる。柱痕跡は，径約40cmで掘り方底面の5cm～8cm手前まで達する。柱痕跡の埋土には，焼土，炭化物，スサ入り壁土等が多く混入している。

庇の掘り方は，長軸が60cm～80cmの長方形で南の3個は南北に長く，深さは約70cmである。柱痕跡は，径約25cmと小規模であるが，埋土の状況は身舎と同様であることから，SB021Aに伴うものと考えられる。

SB021A出土遺物

掘り方埋土、柱痕跡から瓦，赤褐色土器，須恵器坏等の小片が出土している。

SB021B

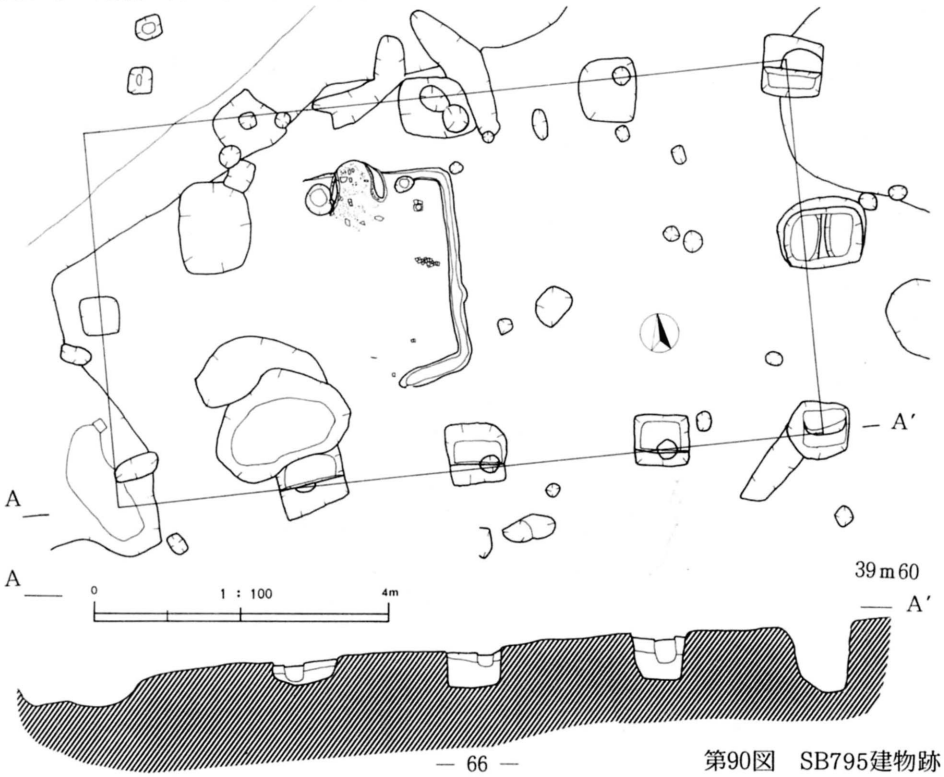
SB021Aより古くほぼ同位置，同規模で重複し，掘り方に特徴が認められる。すなわち，南北列の掘り方は，上面から深さ約50cm～70cm，幅約1.3m程の布掘り地業を施し，さらにその内部に深さ約50cm程の方形掘り方を掘る。ただ，南北中央柱列の2間目と3間目の部分は，布掘り地業が認められない。柱痕跡はSB021Aによってすべて破壊されている。

SB021B出土遺物

南北中央柱列南から2個目の掘り方底面に平瓦が一点出土した。

SB795建物跡　第90図，図版24）

西妻の柱列は，撹乱，土取り穴のため検出できなかったが，東西4間×南北2間の掘立柱建物跡と考えられる。柱間は，東西が西から？+2.5m+2.4m+2.1m，南北が北から掘り方心心で2.3m+2.5mである。掘り方は，ほぼ方形を呈するが，方向は必ずしも整然とした配列は取らない。掘り方内からの遺物は認められなかった。



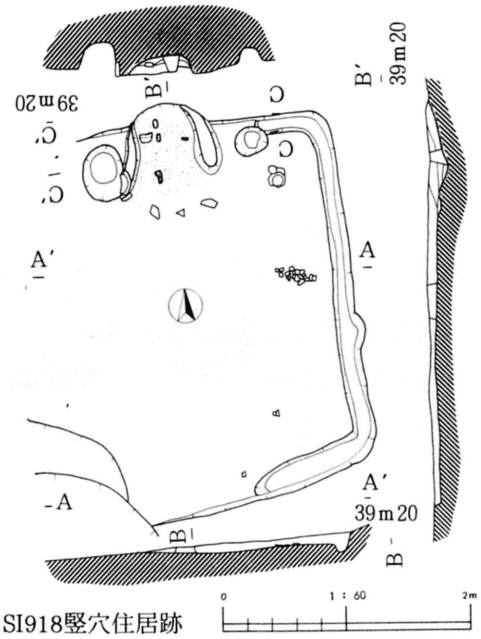
第90図　SB795建物跡

SI918竪穴住居跡　第91図，図版25）

東半部のみが残存する。東壁の状況から一辺が約2.7mと考えられる。カマドは、北壁に付設され，西袖先端に芯材として玉縁付き丸瓦が用いられている。カマド内には，支脚と考えられる拳大の河原石が3等分された形で検出された。壁際には幅15cm～20cm，深さ約5cmの周溝が巡る。床面は，掘り方の凹凸を均すように地山と同種の赤褐色粘質土で貼り床されている。

SI918出土遺物

カマド内から火を受けた土師器甕口縁部，床面からは須恵器坏，土師器甕底部が出土したがいずれも小片で図示できなかった。



第91図　SI918竪穴住居跡

SD920溝跡　（第88図，図版23）

耕作土を除去した段階で検出された。上面幅約2m，深さ約20cm～30cmの緩やかな鍋底状の断面を呈する。上部の大部分は耕作のため削平されたものと考えられる。

SD920出土遺物

埋土から赤褐色土器，丸，平瓦，珠洲系中世陶器が出土したが，いずれも小片で図示できなかった。

SD921溝跡　（第88図，図版23）

調査区の北東から南西方向に延び約14m程でSD920と交叉する。北東部は，近世以降の撹乱で破壊されている。昨年度第43次調査検出のSD801の延長と考えられる。

遺物は，埋土から瓦の小片が出土した。

SK919土取り穴　（第88図，図版23）

SD921と近世以降の撹乱によって破壊され，掘り方の南側が一部遺存するに過ぎない。底面には，黒色腐植土の堆積が認められることから，長期間放置された状態がうかがわれる。

遺物は，埋土から瓦，珠洲系中世陶器の小片が出土している。

SK920土取り穴　（第88図，図版23）

近世以降の撹乱により壁は破壊され，底面の黒色腐植土面がわずかに遺存している。

遺物は，黒色腐植土に突き刺さった状態で瓦，赤褐色土器の小片が出土している。

Ⅴ　ま　と　め

1）第44次調査

＜竪穴住居跡＞

検出層位によって３段階に大別した。

第１段階は，第５層～第８層焼土面で検出されたものである。この中で方形の掘り込みを持つが，カマドを有しないものについては竪穴遺構として扱った。遺構は９軒検出されたが，そのうち竪穴遺構が６軒を占める。

各々の新旧関係は，ＳＩ853→852→850→ＳＩ849→848と新しくなり，ＳＩ854はＳＩ848より古く，ＳＩ851はＳＩ850より古い。ＳＩ846，847は同時期と考えられる。

第２段階は，第９層遺構面で検出された。18軒検出されたうちの３軒は，小規模な竪穴遺構である。各々の新旧関係は，ＳＩ872→871・873，ＳＩ863→862，ＳＩ867→868，ＳＩ876→877と新しくなる。

第３段階は下層面で検出された。10軒のうち２軒は被火災住居跡（ＳＩ209・890）である。両住居跡は，南北に約８ｍの間をおいて東壁を揃えた状態で構築されていることから，同時期と考えられる。各々の新旧関係は，ＳＩ894→893→892→896，ＳＩ236→891→237，ＳＩ909→209と新しくなる。

以上、検出遺構面を基準に３段階に大別したが，ここで各時期の選地と大よその年代についてふれておきたい。

第１段階は，竪穴住居跡が調査地の北側に集中する傾向を示す。遺物は，同遺構面の上，下層の第５層～第８層から完形品を含む多量の赤褐色土器が出土するのに対し，須恵器は破片を含めても極めて小量である。すなわち，この状況は赤褐色土器の盛業を示すものであり，年代的には９世紀後半後葉から10世紀前半の時期を考えることができる。

第２段階は，住居跡数も増加し，調査地全域に広がる傾向を示す。遺物は，第９，10層にかけて須恵器・赤褐色土器がほぼ同量の割合で認められる。しかも赤褐色土器の大半は，体部下端から底部周縁にかけて回転，手持ちケズリを施すことから，９世紀前半から後半前葉と考えられる。

第３段階は，東西の選地が西側に集中する点で前者とは異なる。遺物は，第11層，地山直上互層堆積層から須恵器，非ロクロ丸底風土師器坏，体部下端ケズリ調整の赤褐色土器等が出土している。しかしこれら各層出土土器は，包含層という性質上ある程度の時期差を考慮しなければならない。一方竪穴住居跡は，最下層検出のＳＩ892，894床面から非ロクロ丸底風土師器坏が出土する。このことから第３段階の竪穴住居跡群は，概ね８世紀後半前葉から９世紀前葉に位置付けることができよう。

＜溝＞

調査区東側で検出された南北に延びる３本の溝は，位置，方向性や周囲の掘り方に先行する遺構として大きな意義が考えられる。

すなわち，ＳＤ899は政庁中軸線から約10ｍ，ＳＤ900は約11ｍ，ＳＤ901は約12.6ｍ西に検出されていることから，本溝跡は政庁南門から外郭南門に至る大路の西側溝の可能性が考えられる。このことは，竪穴住居跡を含む第３段階の遺構群がＳＤ899の西に営まれることも，その可能性を示唆するものである。

溝の新旧関係については，耕作による削平のため不明である。

秋田城跡調査事務所要項

Ⅰ　組　織　規　定

秋田市教育委員会事務局組織規則　抜粋（昭和37年５月８日　教育規則第３号
改　正　　昭和52年11月21日第11号）

第１条

4.　第３条第４項に掲げる事務を分掌させるため，文化振興課に所属する機関として，秋田城跡調査事務所を置く。

第３条

4.　秋田城跡調査事務所における事務分掌は，おおむね次のとおりにする。

一，史跡秋田城跡の発掘に関すること。

二，史跡秋田城跡の出土品の調査および研究に関すること。

Ⅱ　発掘調査体制

１）調　査　体　制

秋田市教育委員会

教　育　長　　高　泉　宏　作

文化振興課長　　奥　山　良　三

調　査　機　関

秋田城跡調査事務所

所　長（参事）　　佐々木　栄　孝

主　　査　　小　松　正　夫

社会教育主事　　日　野　　久

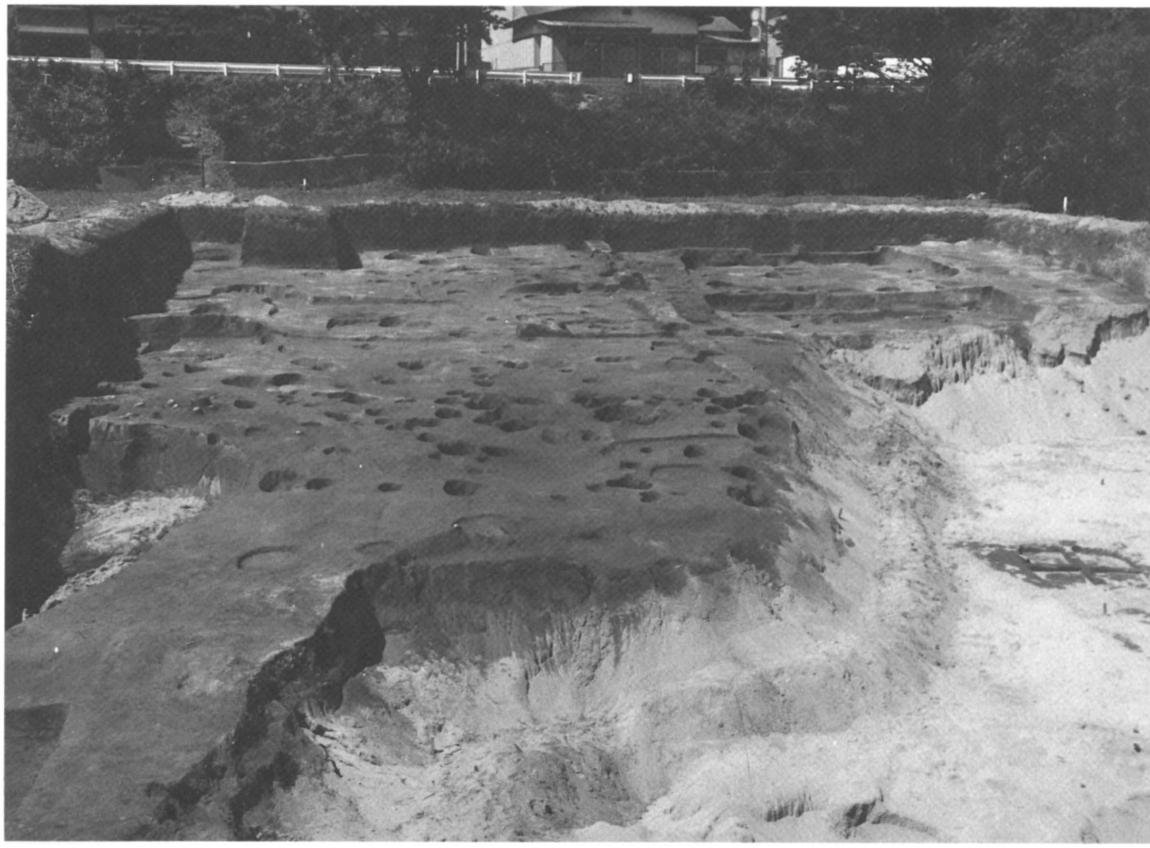
補　佐　員　　佐々木　さゆり

２）調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所

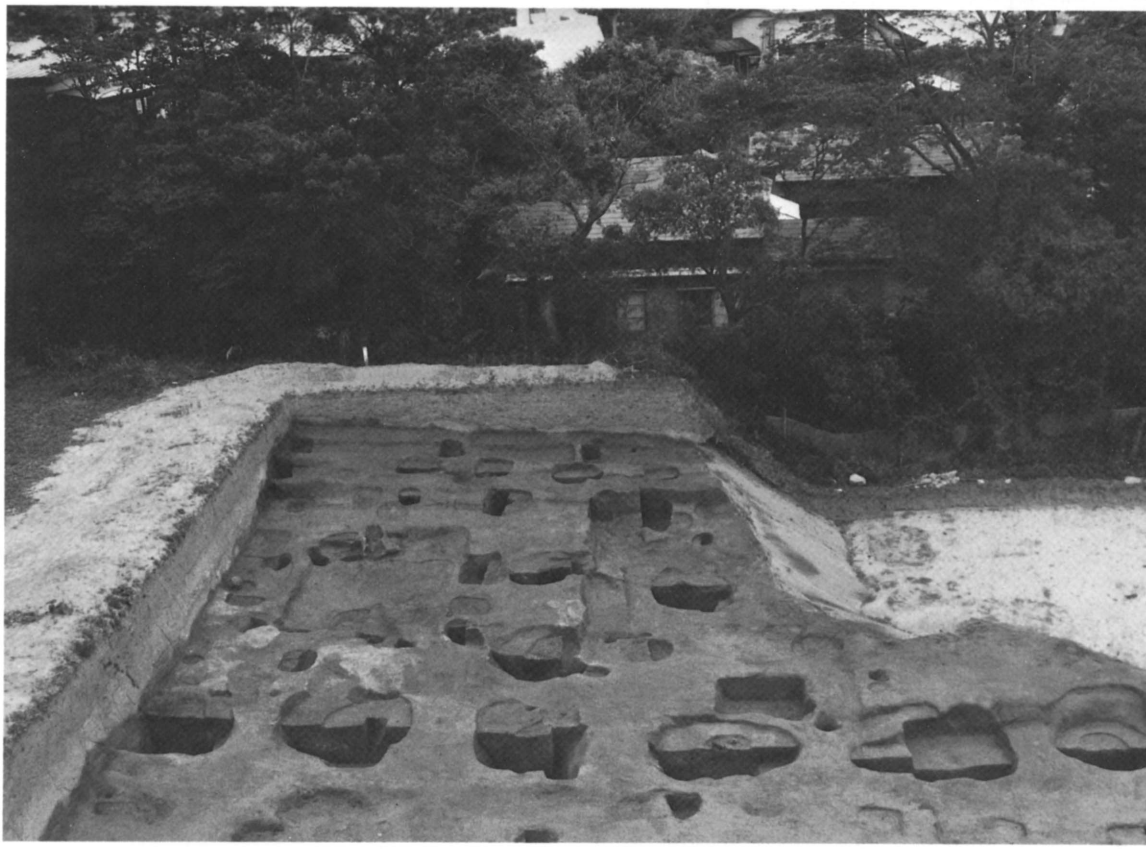
図版1　44次空撮写真

図版2　上：第44次調査発掘前（南→）
下：　〃　上層全景（北→）



図版 3　上：第44次調査第 9 層面遺構全景（北→）
下：　〃　　〃　　〃　（南→）

図版 4　上：第44次調査上層面遺構（西→）
下：　〃　下層遺構全景（北→）

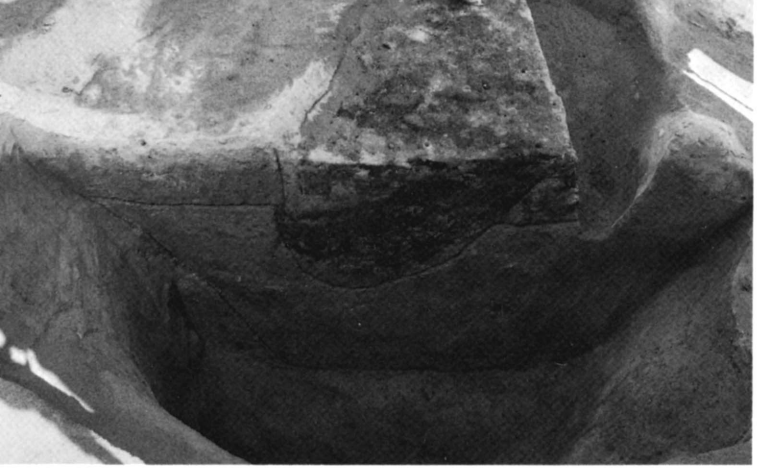


図版5　上：SB843建物跡（西→）
下：SB889建物跡（西→）
SA907柱列

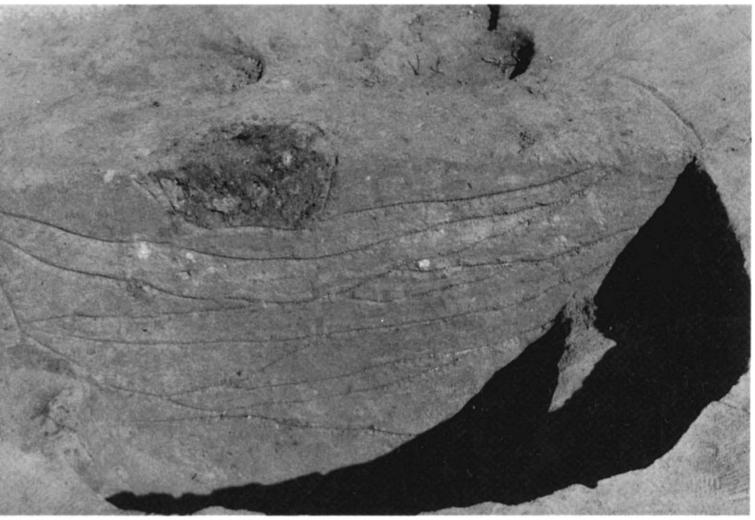
図版 6　SA913柱列
SD899・900・901溝跡、SK905
土壙（西→）

同　上（北→）

図版 7　上：SE855井戸跡（南→）
下：SE886井戸跡（南→）



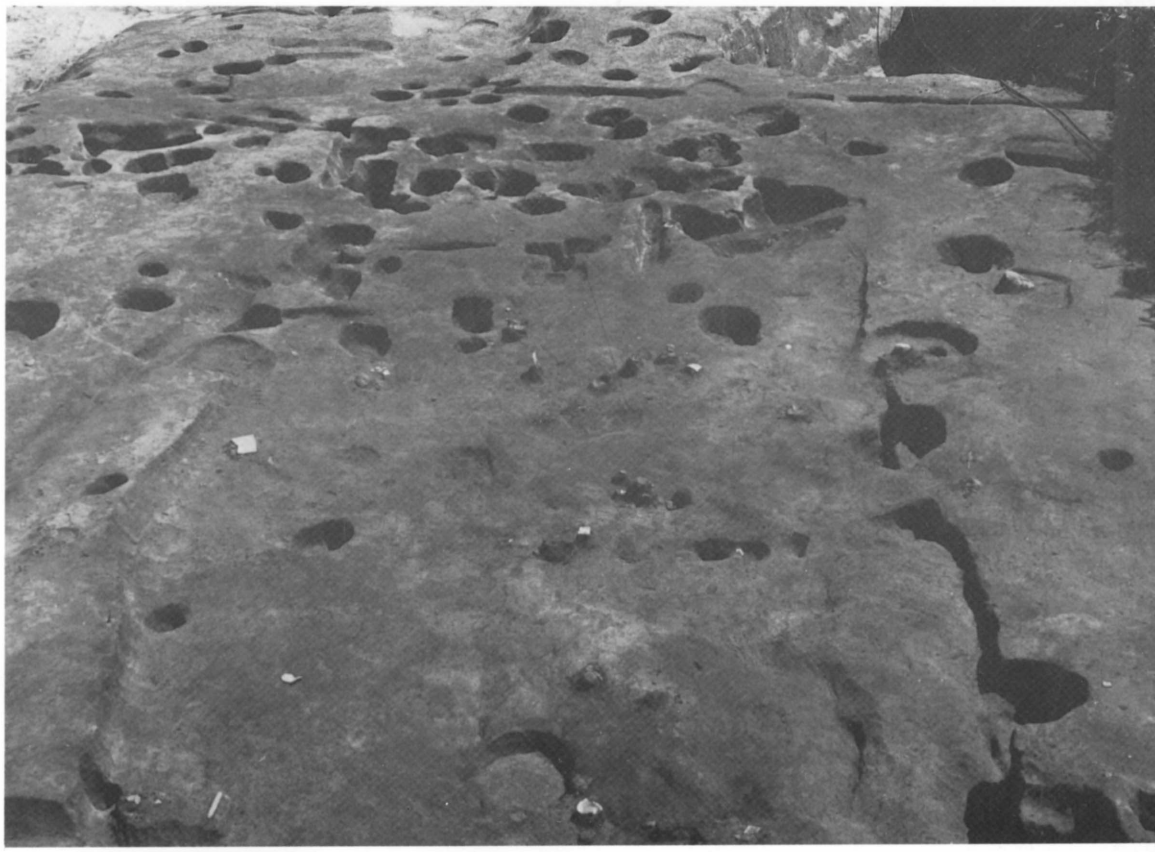
SD901溝断面



SB889建物跡掘り方

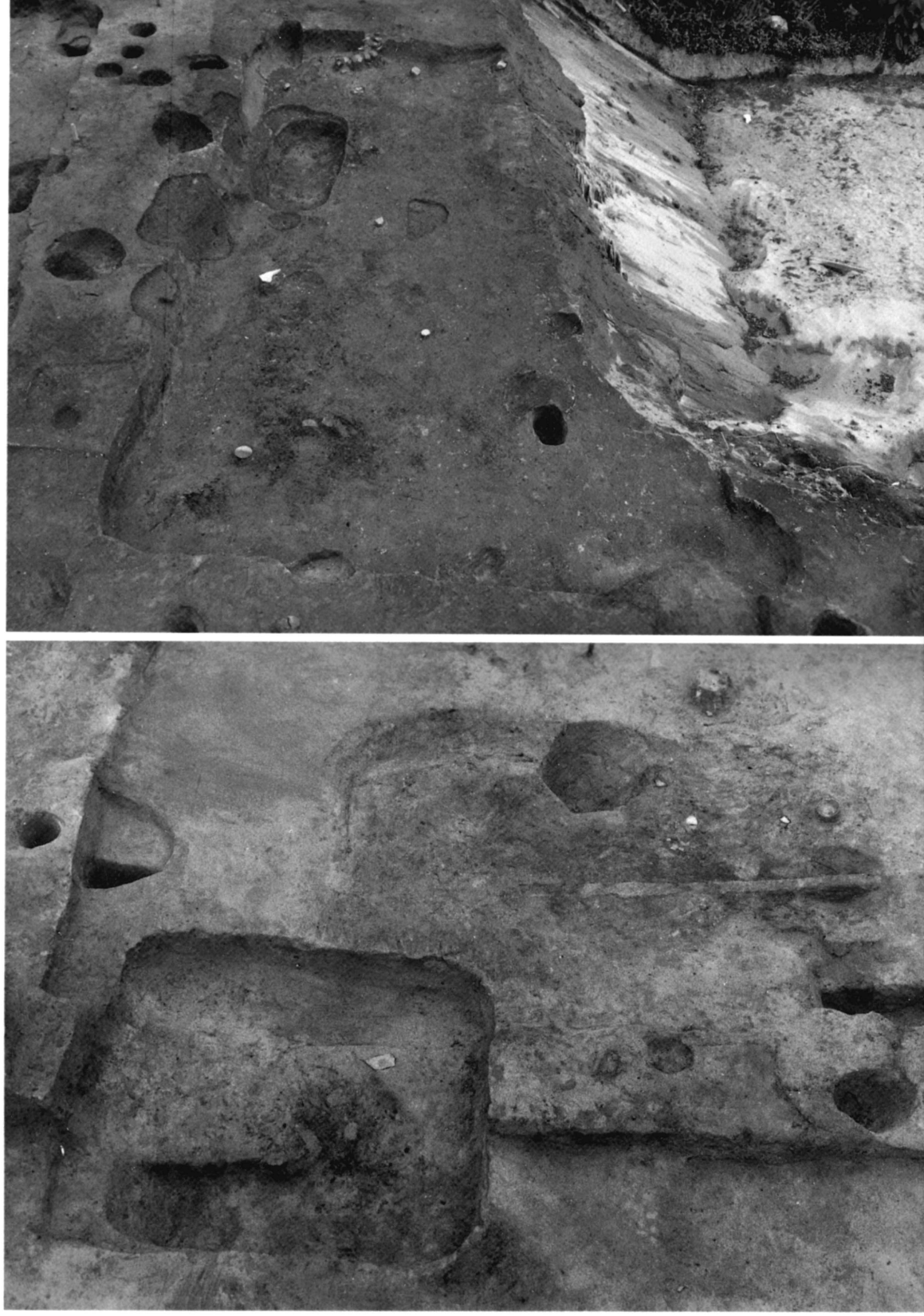
SX883・882・881焼土遺構

図版8



図版9　上：SX978鍛冶炉跡（西→）
下：SI848竪穴遺構（北→）

図版10　上：SI849竪穴住居跡（南→）
SD860溝
下：SI846竪穴遺構（西→）



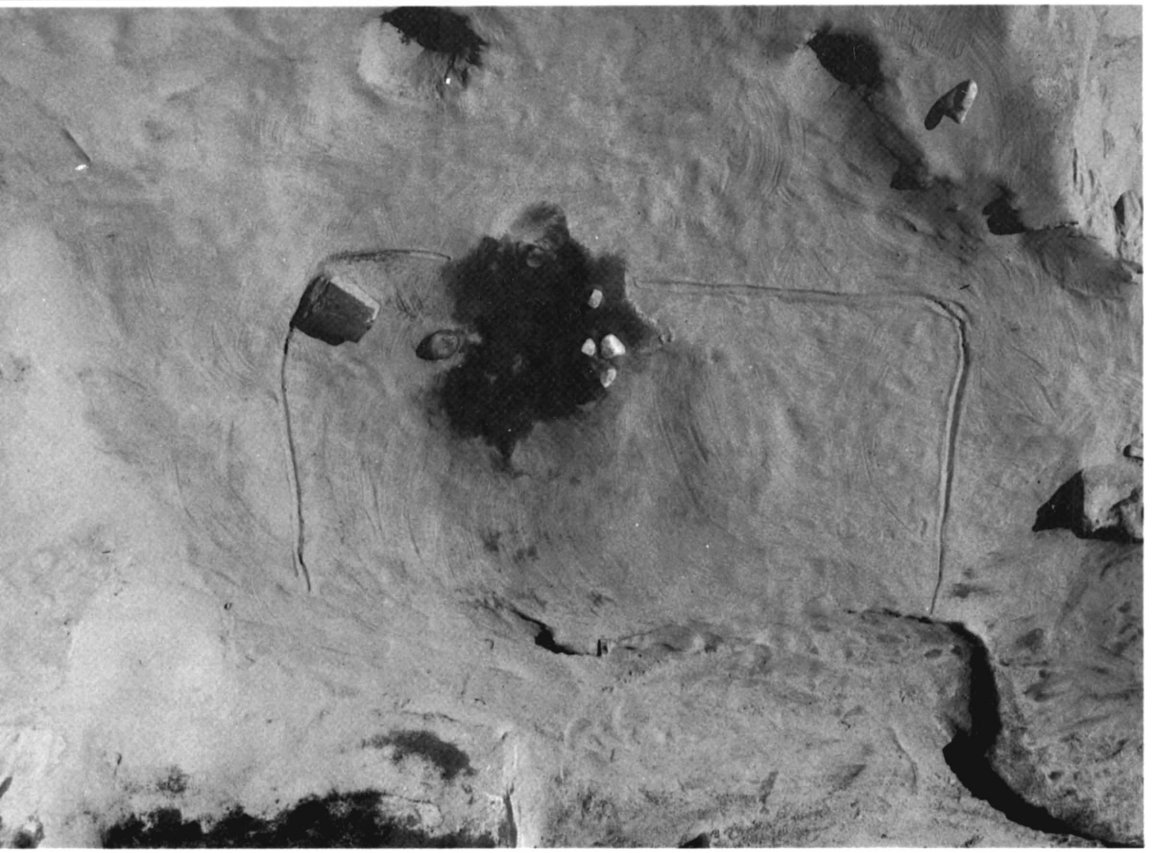
図版11　上：SI847竪穴遺構（西→）
下：SI867・868竪穴遺構（南→）

SI875竪穴住居跡（北→）

SI876・877竪穴住居跡（南→）

図版12

図版13　上：SI206竪穴住居跡（第17次調査）・SK904土壙（西→）
下：SI869竪穴住居跡（東→）

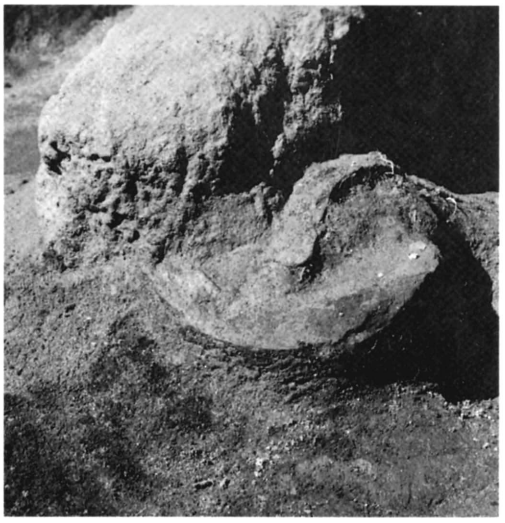


図版14　上：SI871・872・873竪穴住居跡（北→）
下：SI891竪穴住居跡

図版15　上：SI863竪穴住居跡（西→）
　　下：SI890　　〃　　（東→）

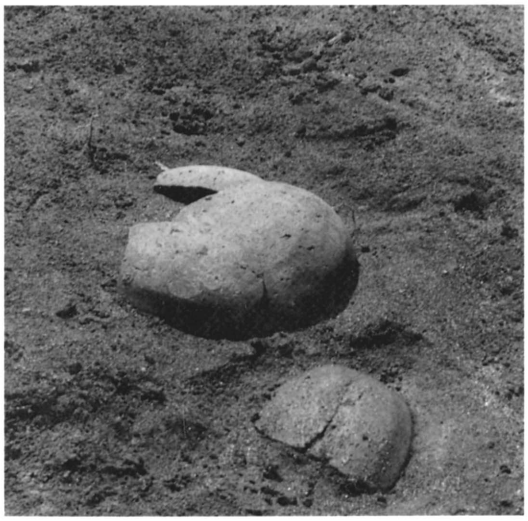
図版16　上：SI890竪穴住居跡（東→）
　　SI866竪穴遺構　SK906掘り方
　　下：　〃　　〃　　南東コーナー炭化材（北→）

図版17　上：SI892・893・894・895竪穴住居跡（南→）
下：　　〃　　〃　土層断面（南→）



図版18　SI206カマド
SI891カマド
SI893カマド

SI872カマド
SI863カマド
SI893カマド袖



図版19　上：第４～６層遺物出土状況
中：土壙遺物出土状況
下：互層堆積層遺物出土状況

上：SI876遺物出土状況
中：SI890遺物出土状況
下：地山出土縄文土器

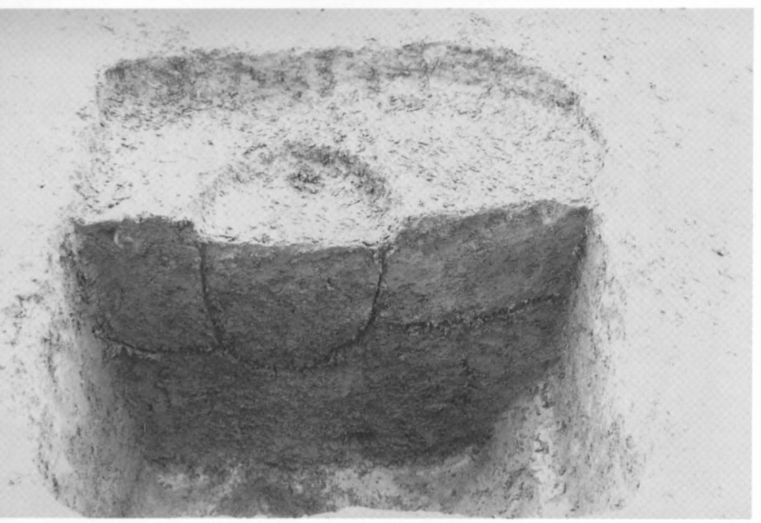
図版20　上：第45次調査発掘前（東→）
下：SB913A・B建物跡（東→）

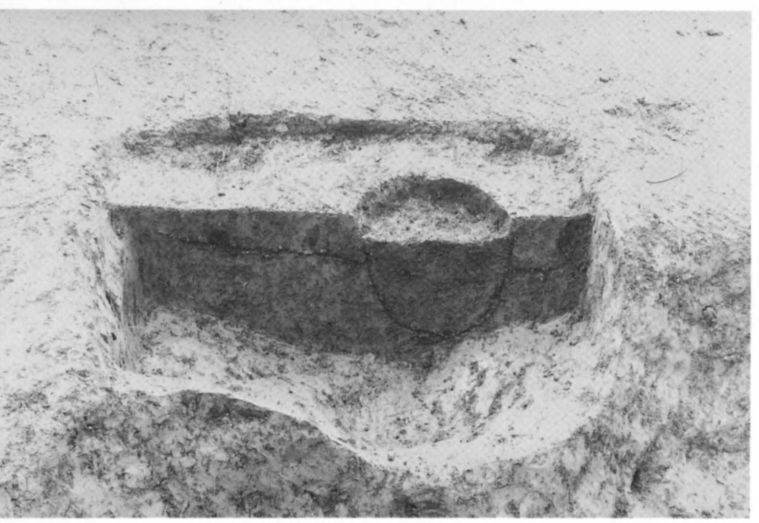
図版21　上：SB913A・B建物跡（東→）
下：第45次調査東トレンチ（南→）

図版22　46次空撮写真

図版23　上：第46次調査全景（東→）
下：　〃　　〃　（北→）

SB795建物跡（東→）

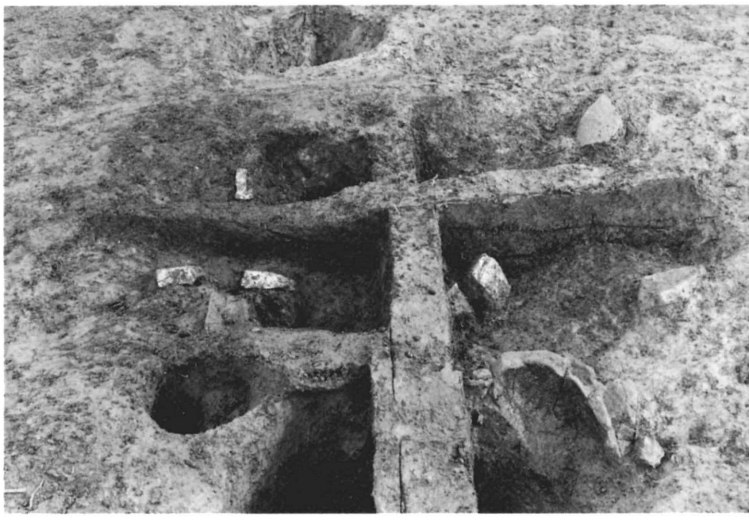




SB795建物跡掘り方

図版25　SI918竪穴住居跡（南→）

SI918カマド

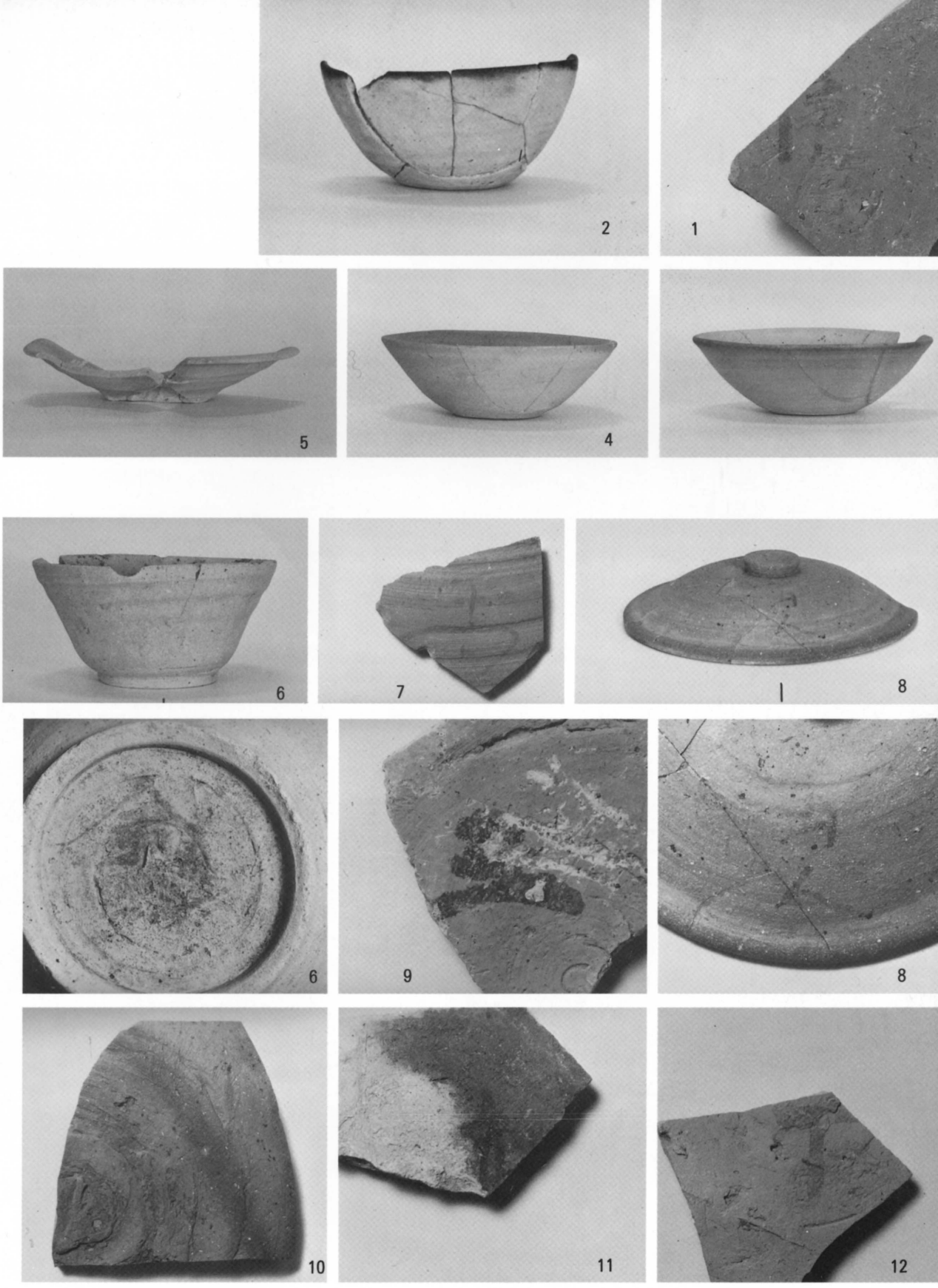


SI918カマド

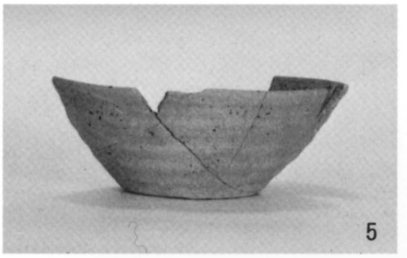
図版26　上：SB021A・B建物跡（東→）
下：　〃　　〃　掘り方

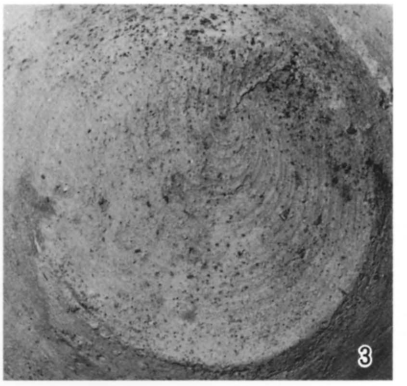
図版27　上・下：SB021A建物跡掘り方

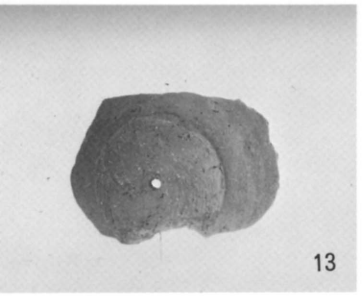
図版28　SX878鍛冶炉跡、遺構切り取り作業

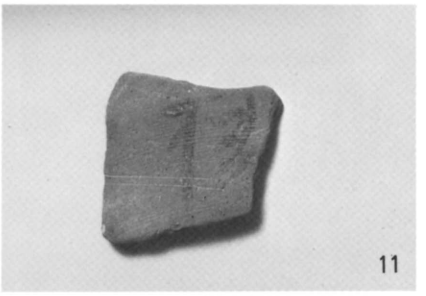


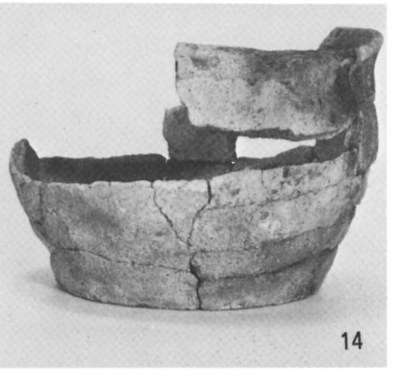
図版29　1～5　SB845建物跡出土遺物　6～12　第6層SA912ピット群出土遺物



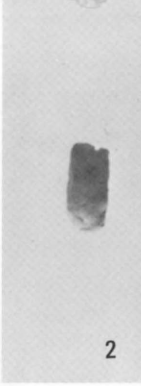


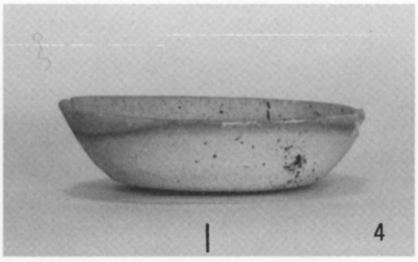


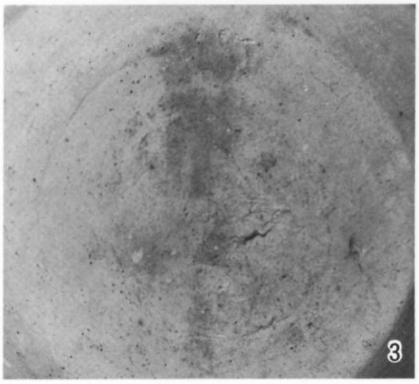


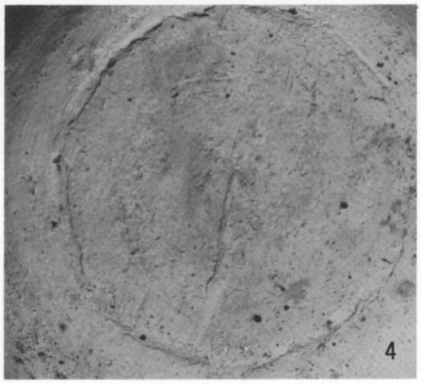


図版30　1～14　第6層SA912ピット群出土遺物

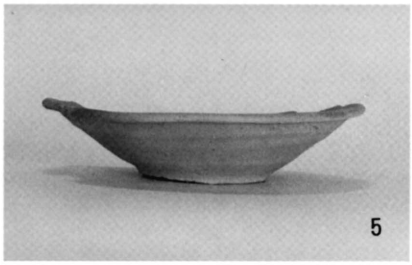


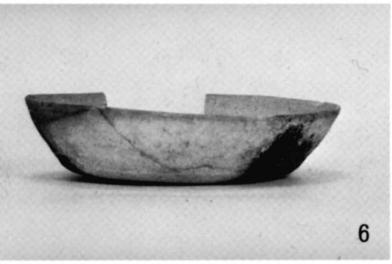


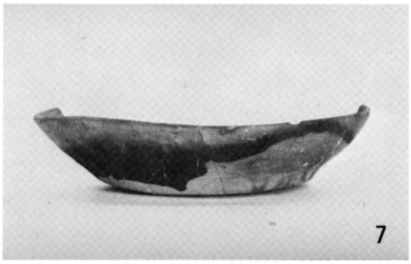


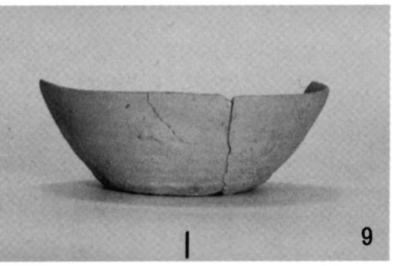


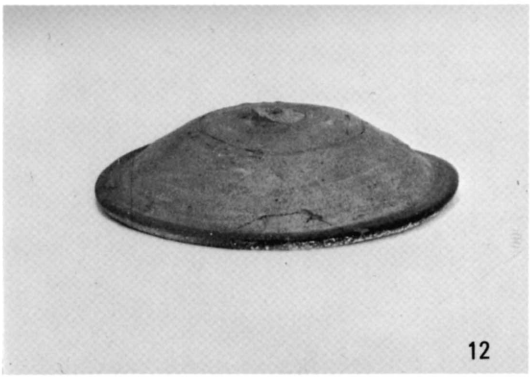
図版31　1・2　SD857溝出土遺物　3～12　SI206竪穴住居跡出土遺物（第17次調査）



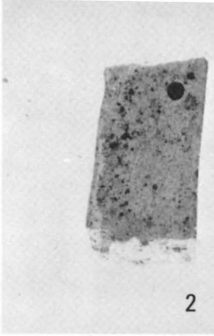


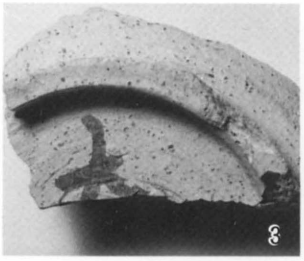


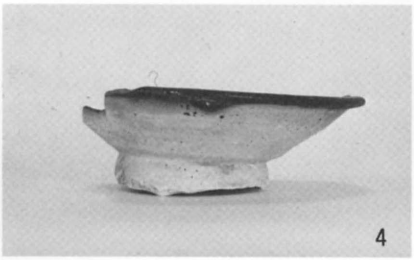


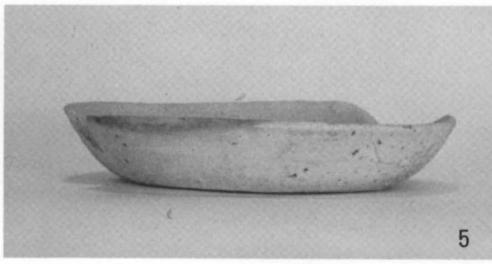


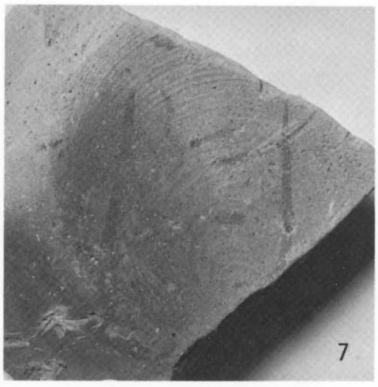
図版32　1～5　SI206竪穴住居跡出土遺物（第17次調査）
　　6～12　SI209竪穴住居跡出土遺物（第17次調査）

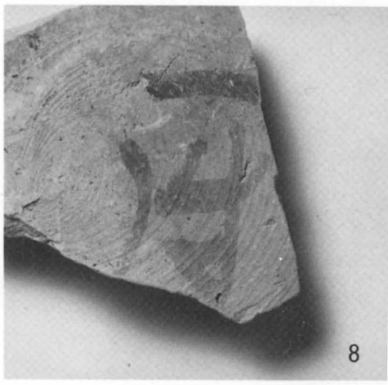


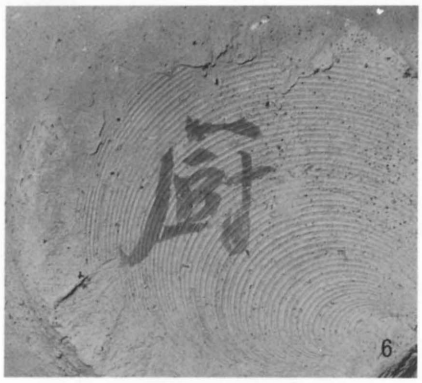


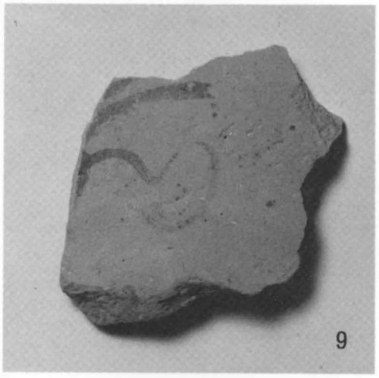


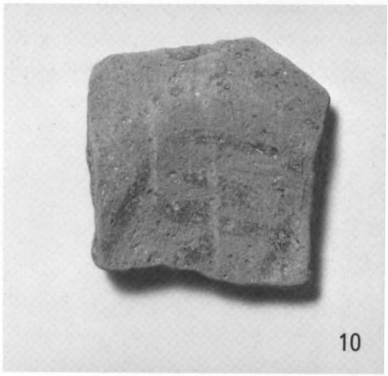


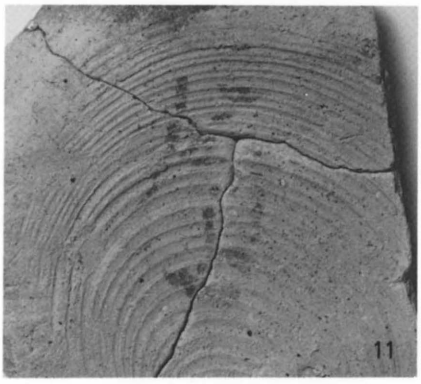


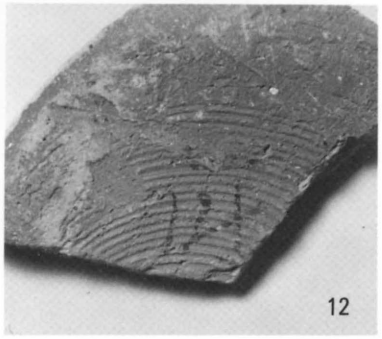


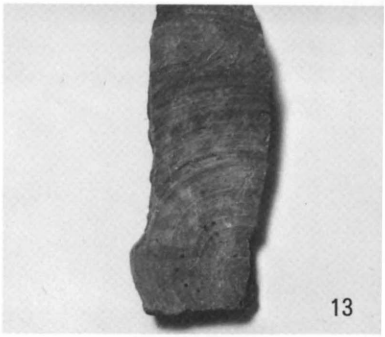




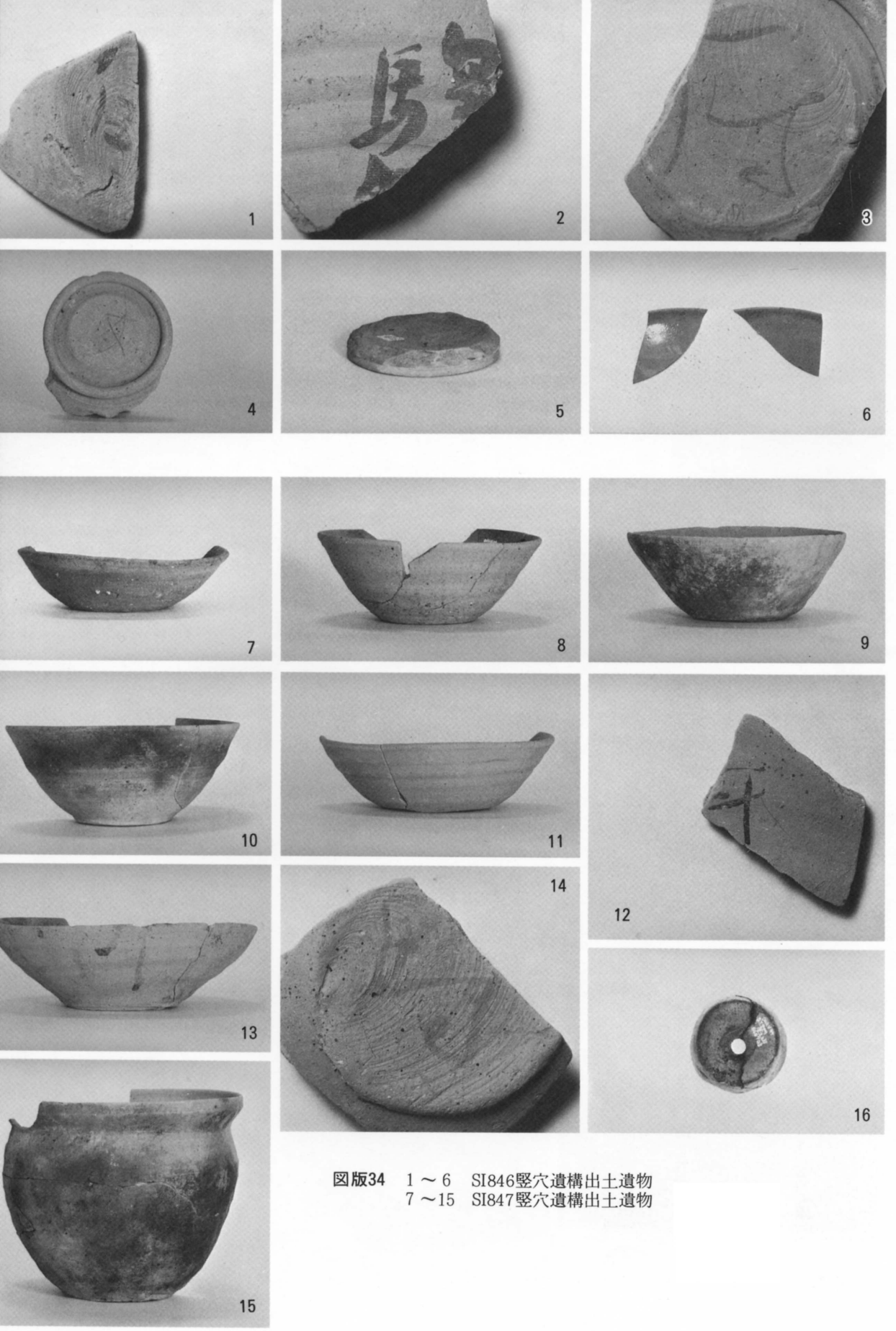




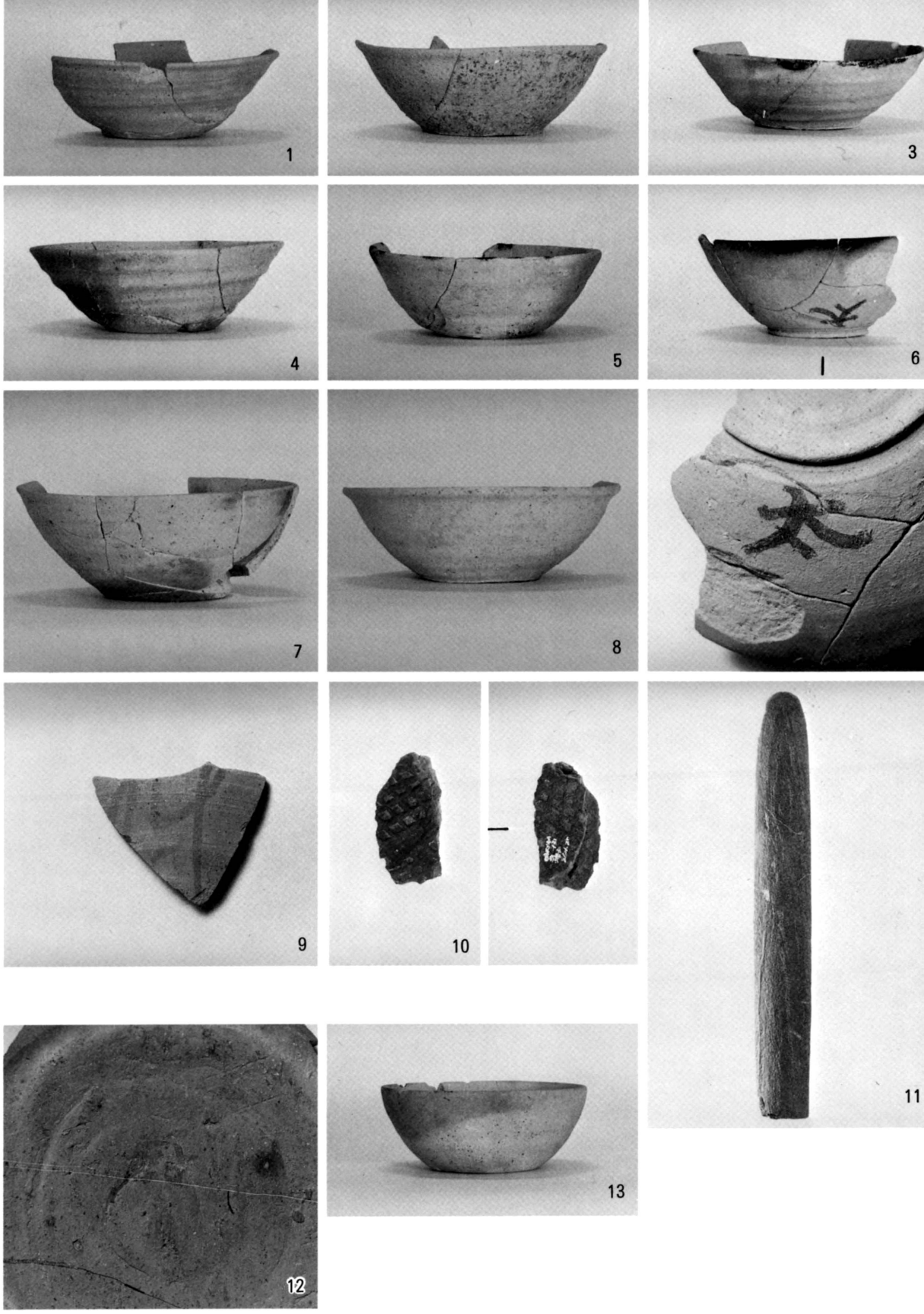




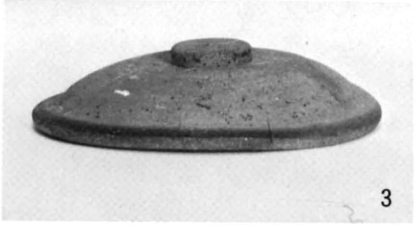
図版33　1・2　SI237竪穴遺構出土遺物（第17次調査）　3～13　SI846竪穴遺構出土遺物

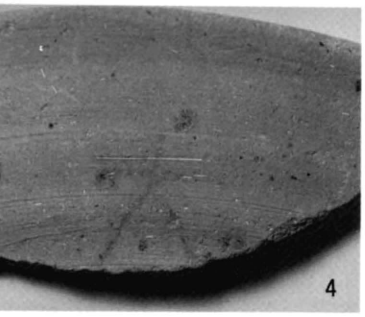


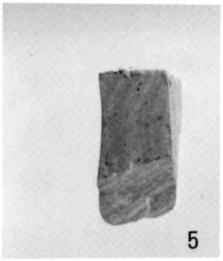
図版34　1～6　SI846竪穴遺構出土遺物
　　7～15　SI847竪穴遺構出土遺物

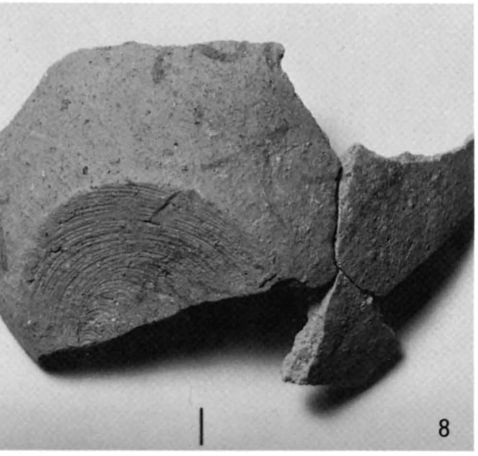


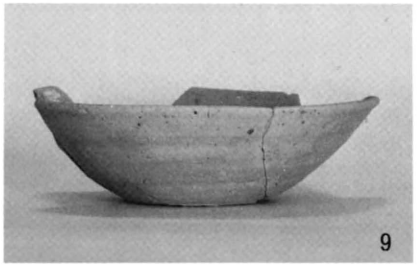
図版35　1～11　SI848竪穴遺構出土遺物　　12・13　SI849竪穴住居跡出土遺物



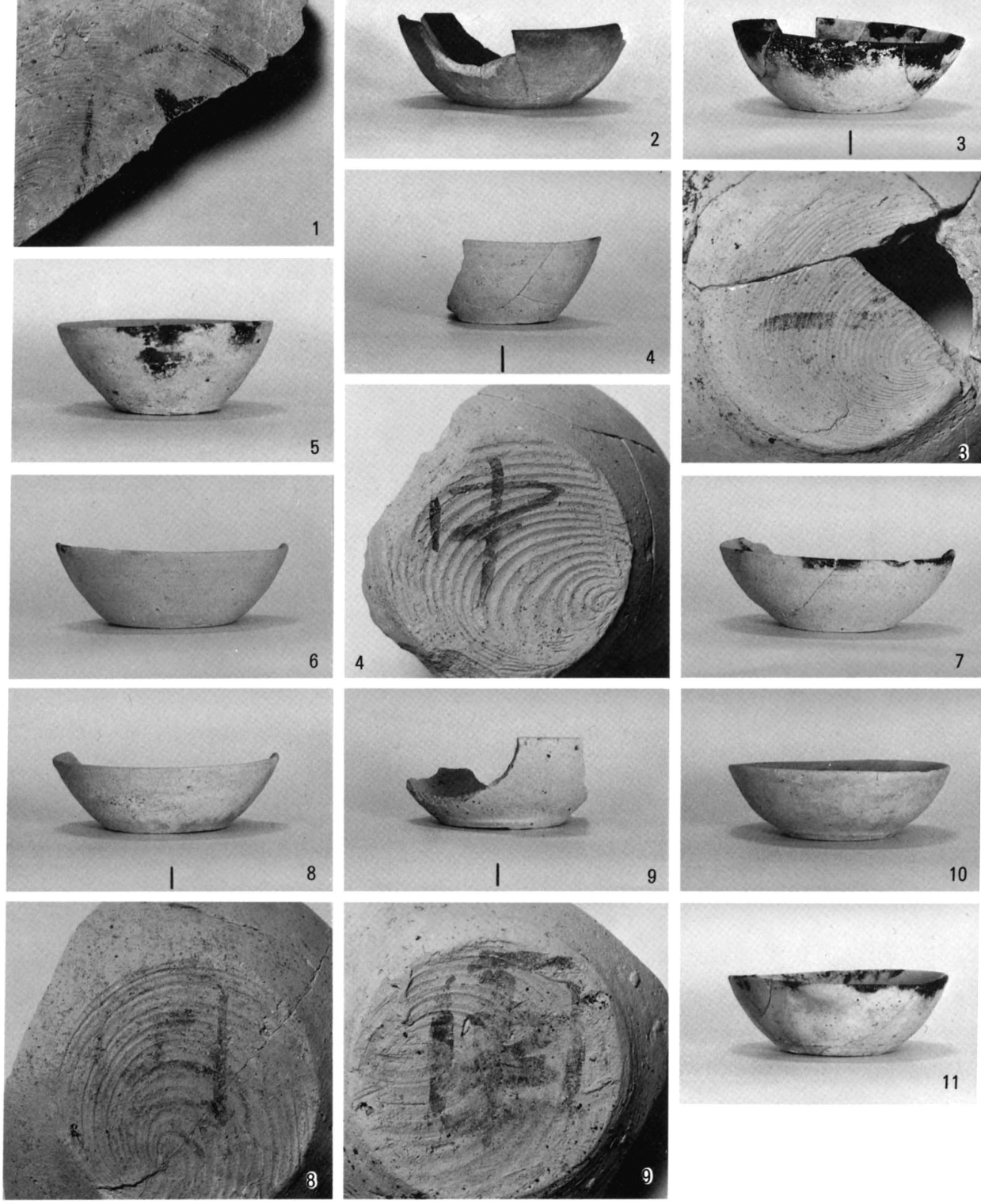




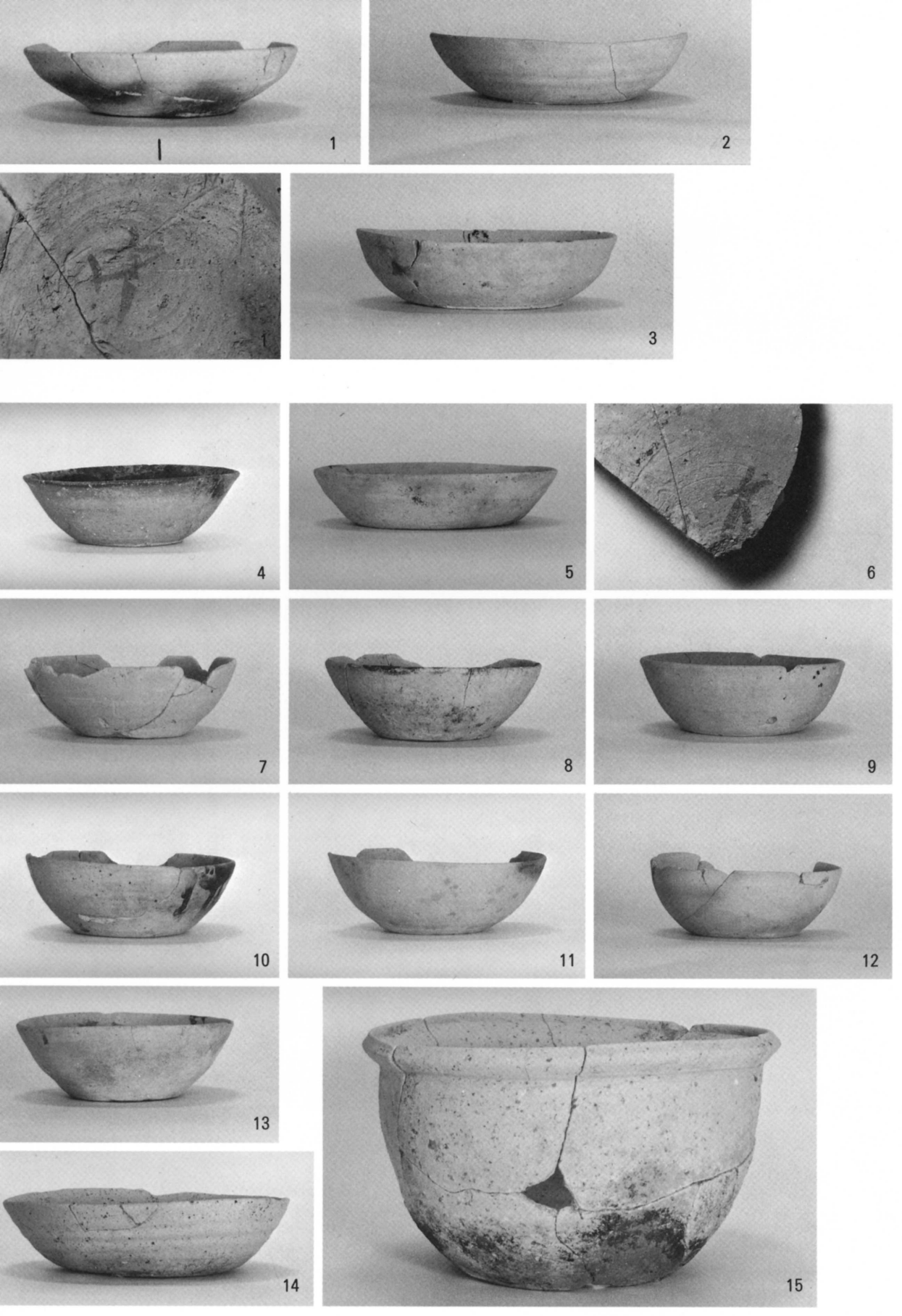




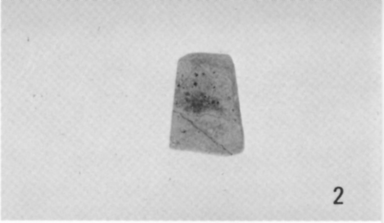
図版36　1～5　SI849竪穴住居跡出土遺物
6・7　SI850竪穴遺構出土遺物
8　SI853竪穴遺構出土遺物
9～11　SI864竪穴住居跡出土遺物
12　SI867竪穴住居跡出土遺物

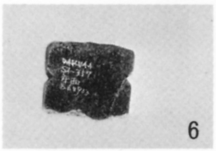


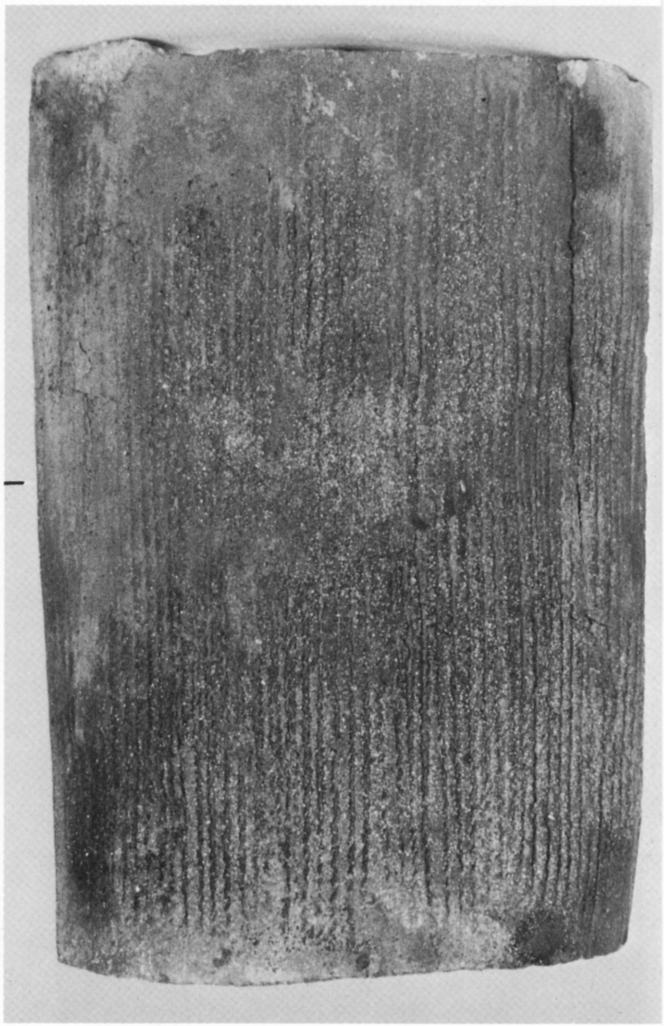
図版37　1～11　SI869竪穴住居跡出土遺物



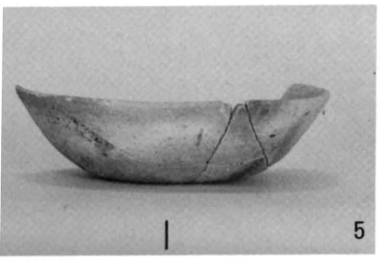
図版38　1～3　SI869竪穴住居跡出土遺物
　　4～15　SI870竪穴住居跡出土遺物

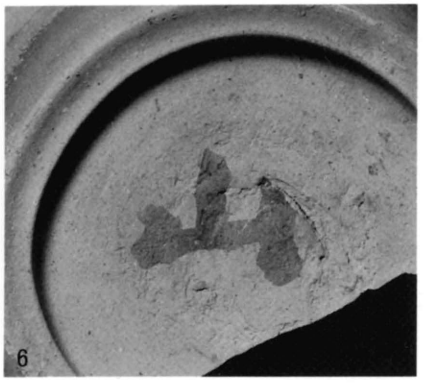


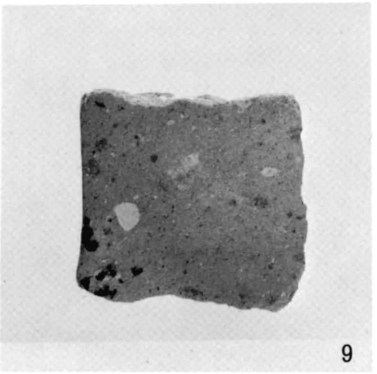




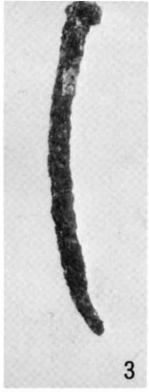
図版39　1・2　SI871竪穴住居跡出土遺物
　　3～6　SI872竪穴住居跡出土遺物
　　7　SI873竪穴住居跡出土遺物

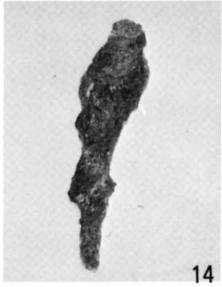


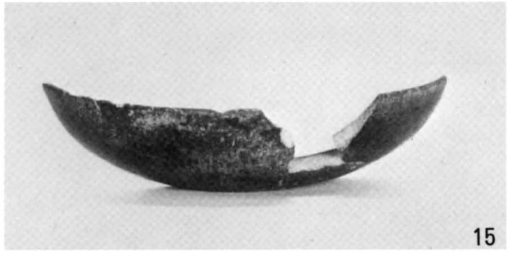




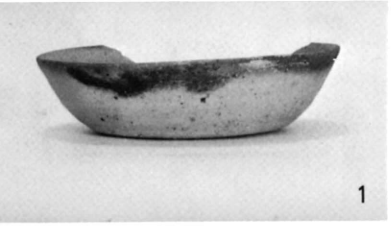
図版40　1・2　SI874竪穴住居跡出土遺物
3・4　SI875竪穴住居跡出土遺物
5～8　SI876竪穴住居跡出土遺物
9　SI877竪穴住居跡出土遺物

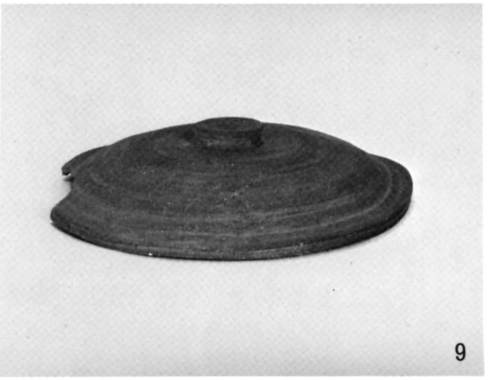


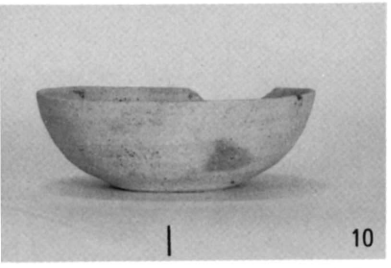


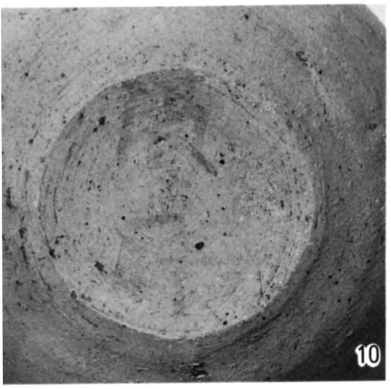


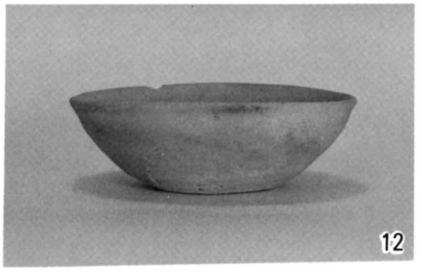
図版41　1～11　SI890竪穴住居跡出土遺物
12　SI891竪穴住居跡出土遺物
13　SI892竪穴住居跡出土遺物
14　SA914ピット
15　SI894竪穴住居跡出土遺物
16　SI909竪穴住居跡出土遺物



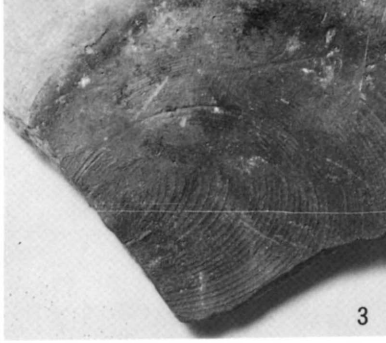


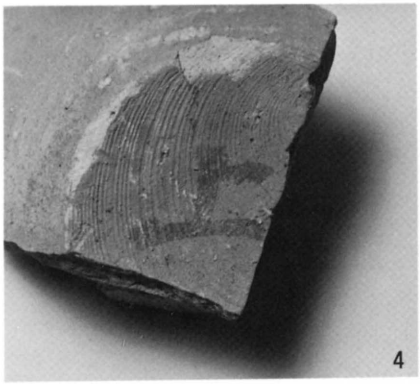


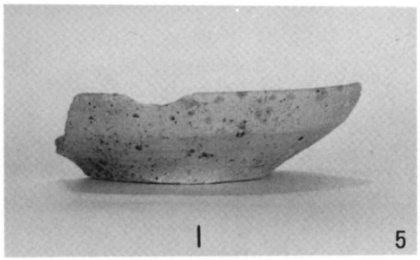


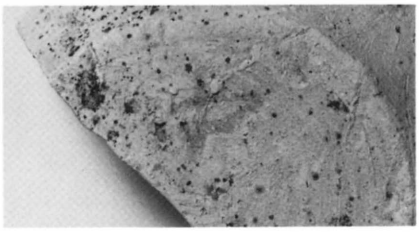


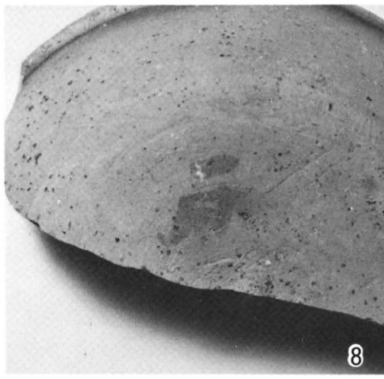
図版42　1～6　SK887土壙出土遺物
　　7～12　SK905土壙出土遺物

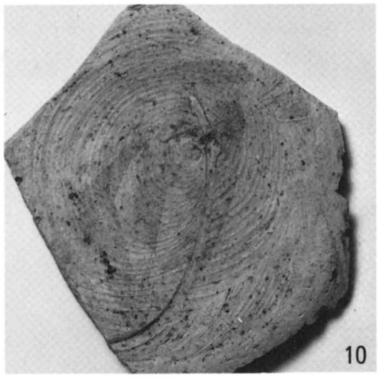


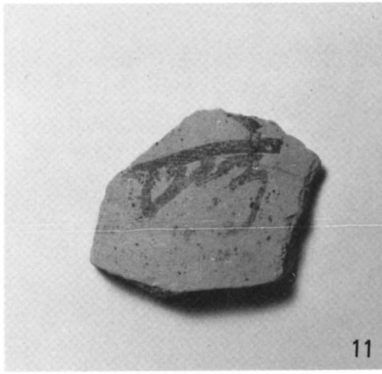




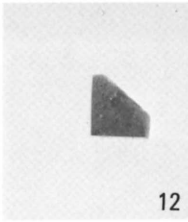


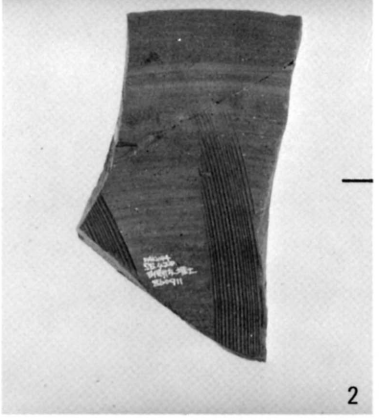


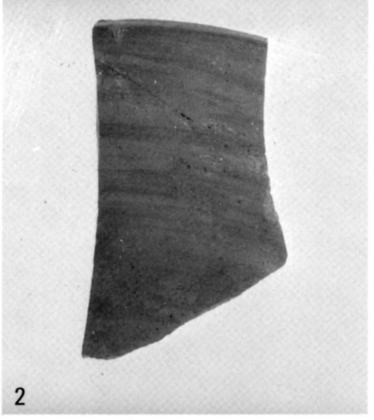


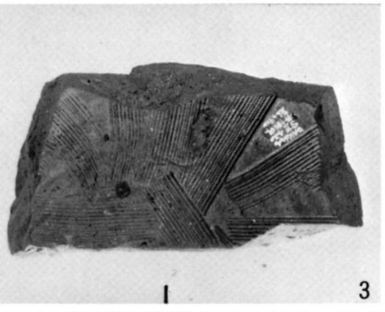


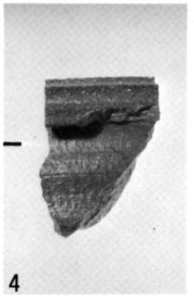
図版43　1～5　SK908土壙出土遺物
6　SK902土壙出土遺物
7　SK903土壙出土遺物
8　SK904土壙出土遺物
9　SK906土壙出土遺物
10　SK910土壙出土遺物
11　SK911土壙出土遺物
12　SA907掘り方出土遺物

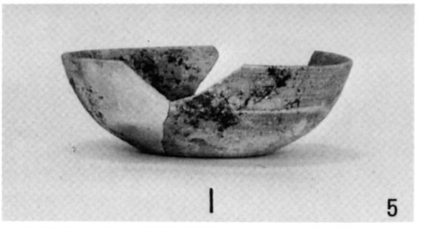


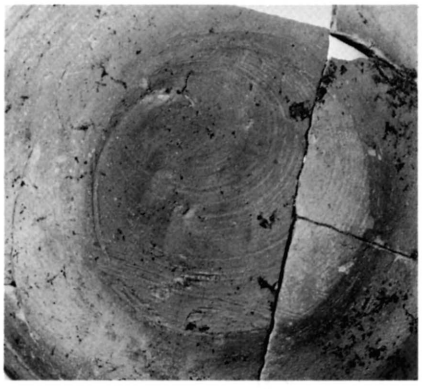


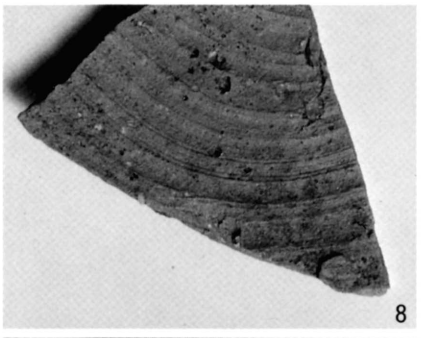


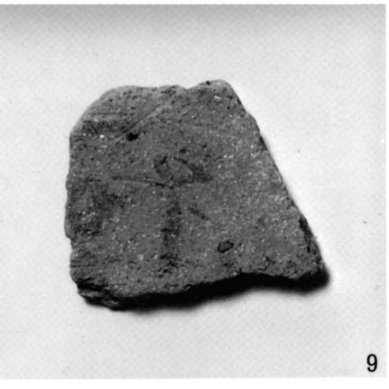


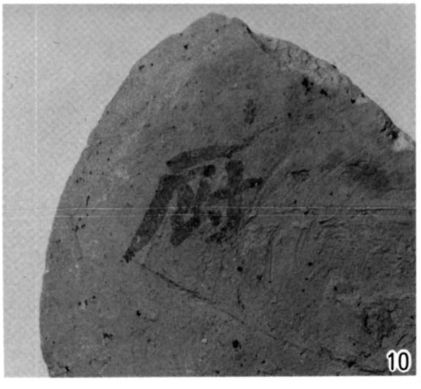


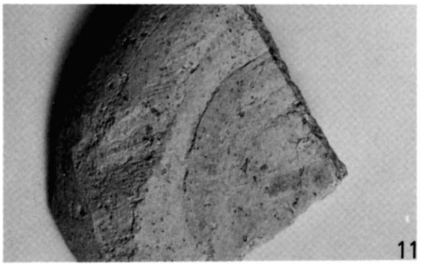




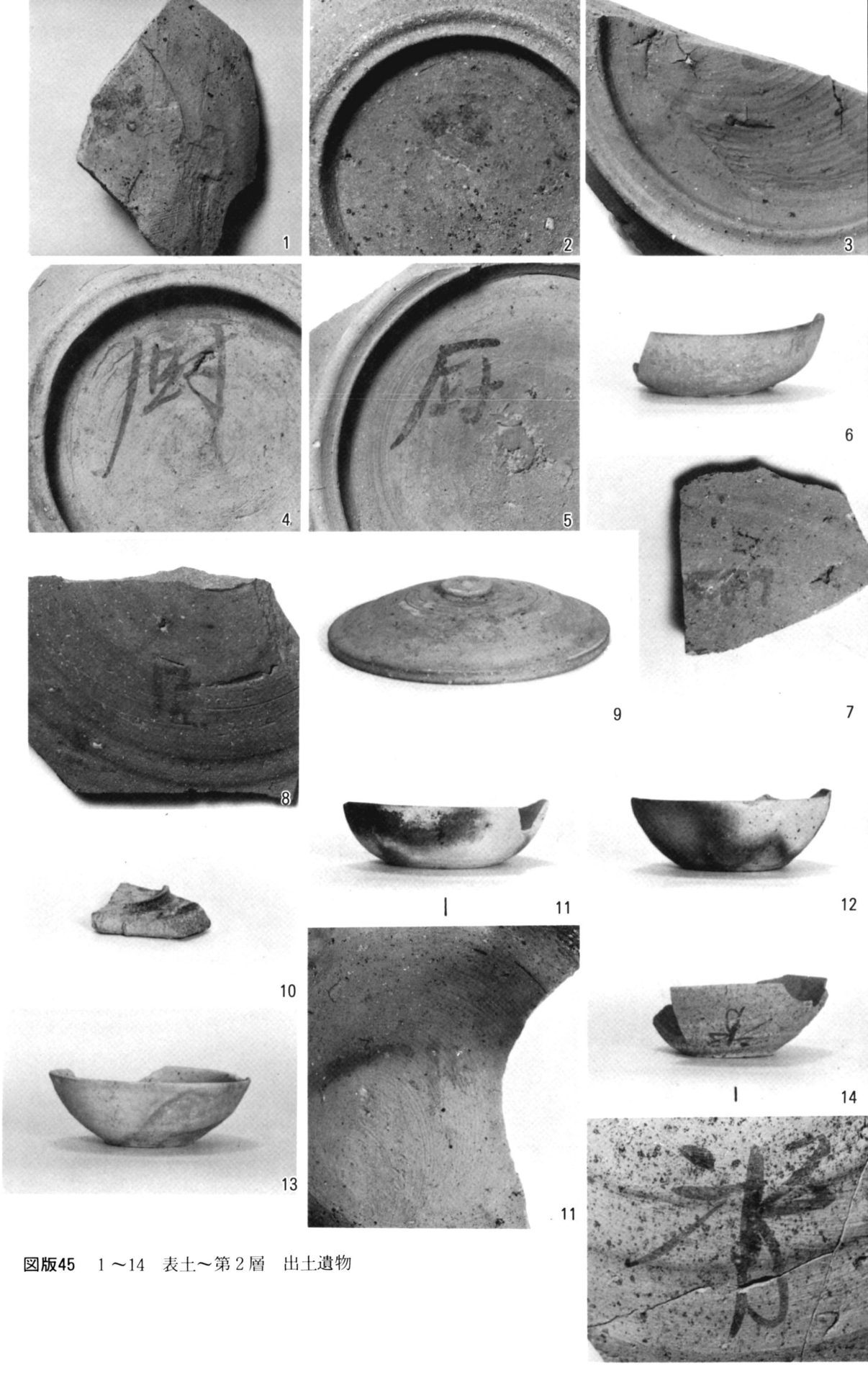




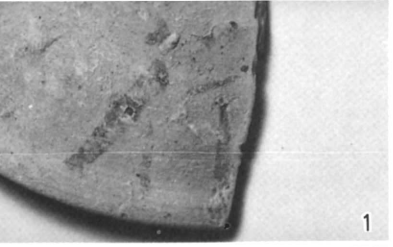


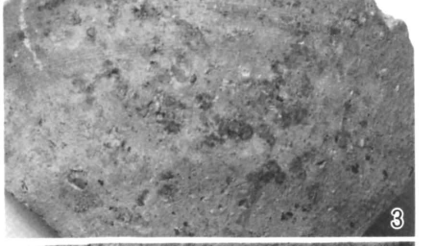


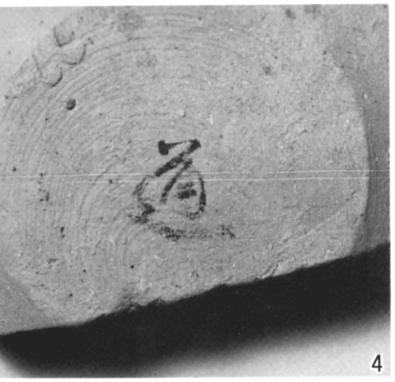
図版44　1～4　SE855井戸跡出土遺物
　　5　SX884焼土遺構出土遺物
　　6～11　表土～第2層　出土遺物

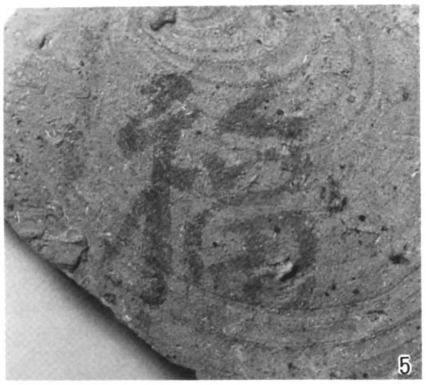


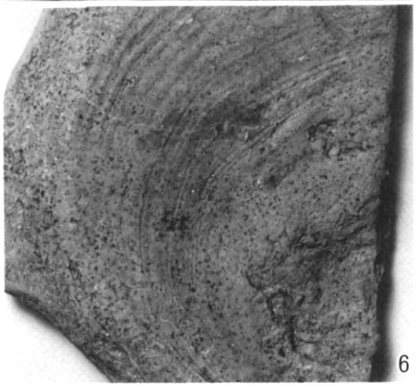
図版45　1～14　表土～第2層　出土遺物

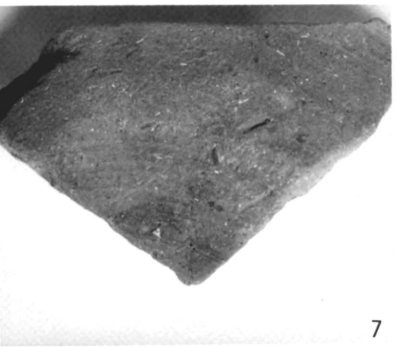


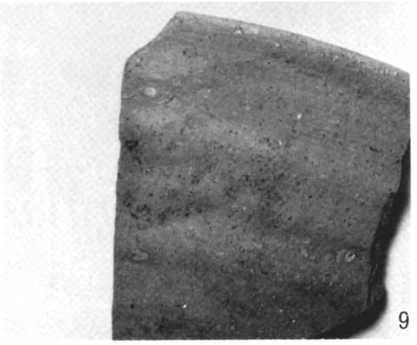


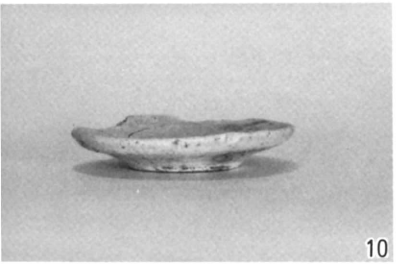


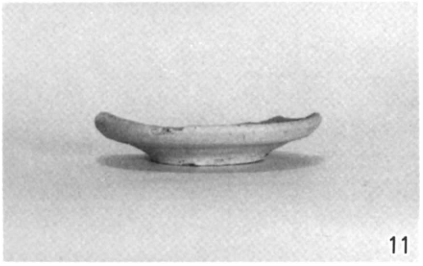


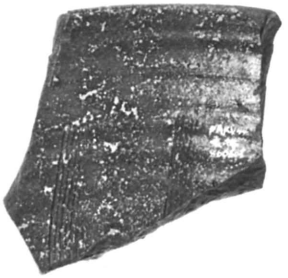




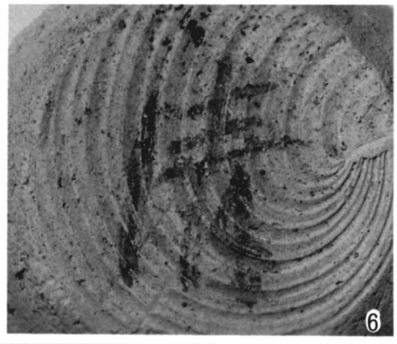


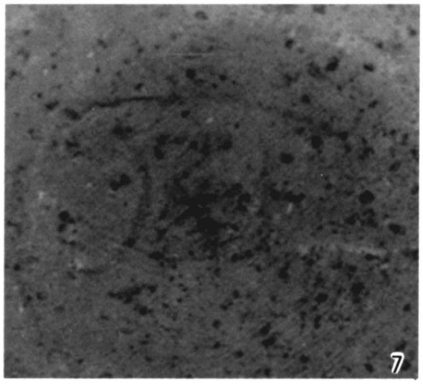


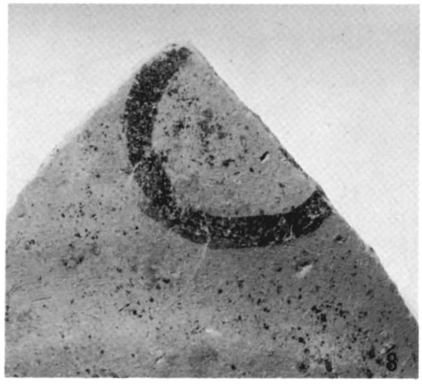


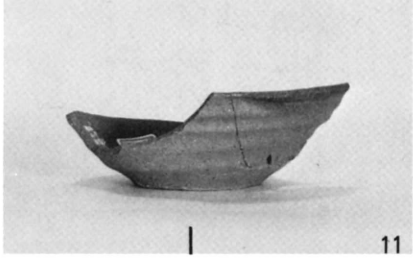


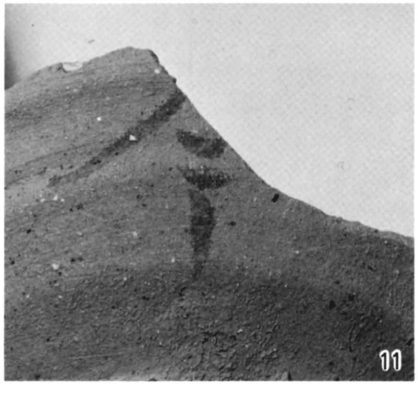
図版46　1～15　表土～第２層　出土遺物

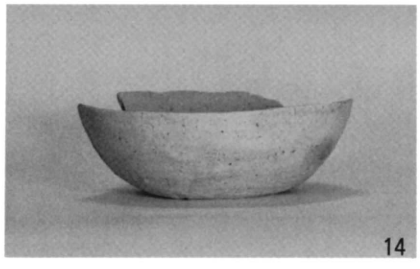


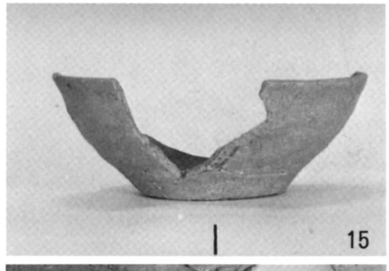


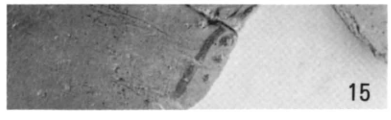




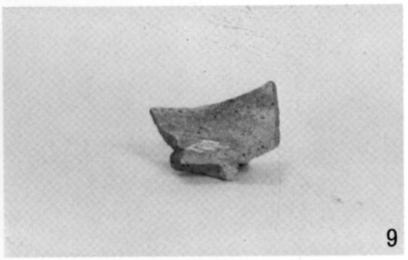


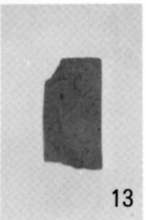


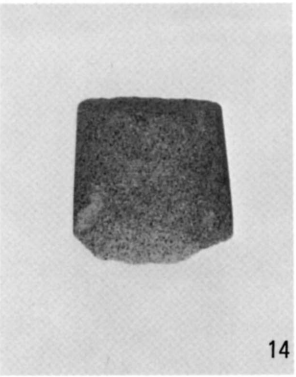


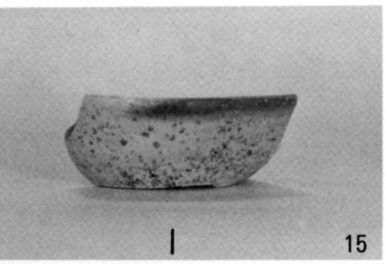


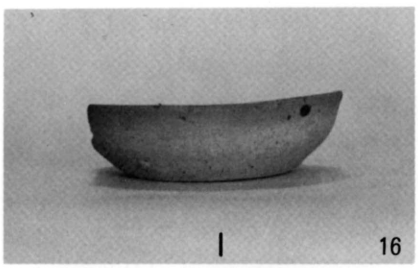
図版47　1～3　表土～第2層　出土遺物
4～10　第3層　出土遺物
11～15　第4層　出土遺物

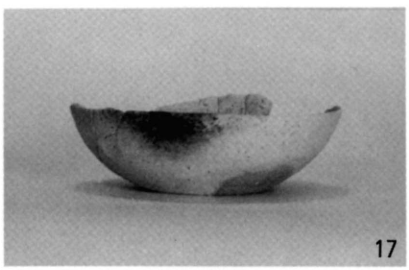


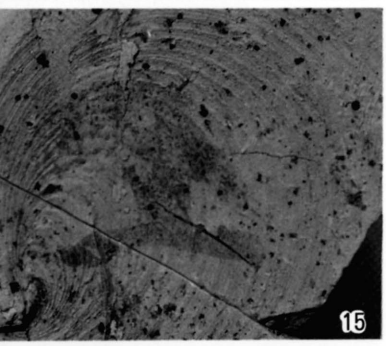




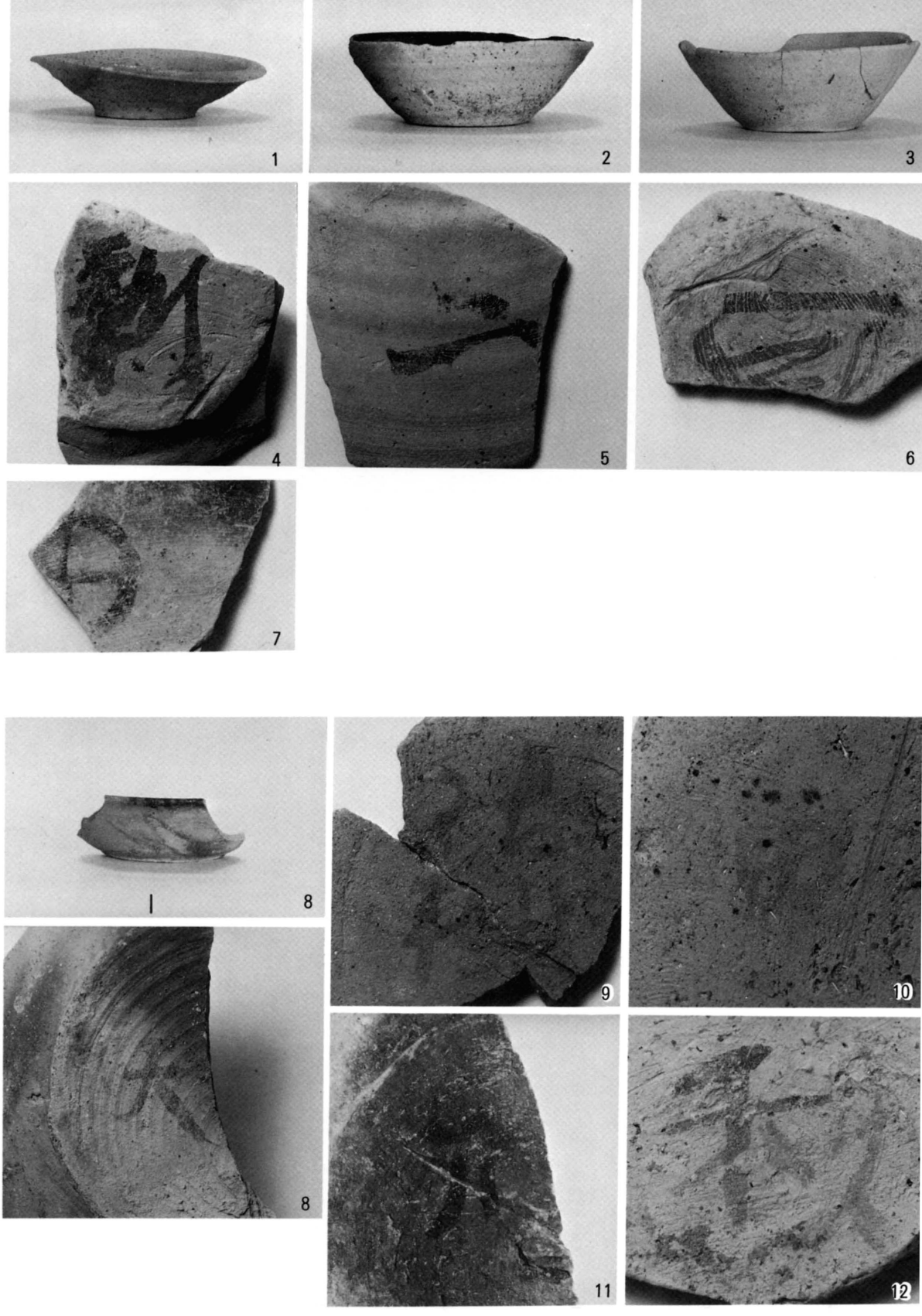




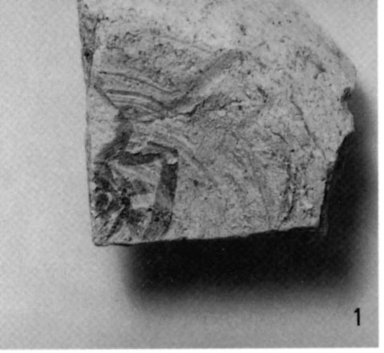


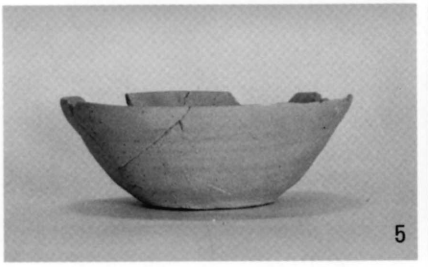


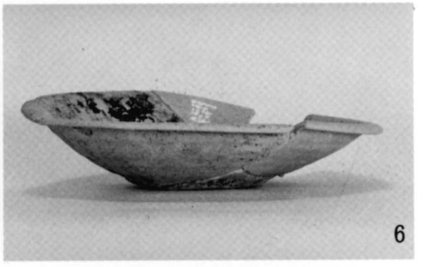
図版48　1～14　第4層　出土遺物
15～17　第5層　出土遺物

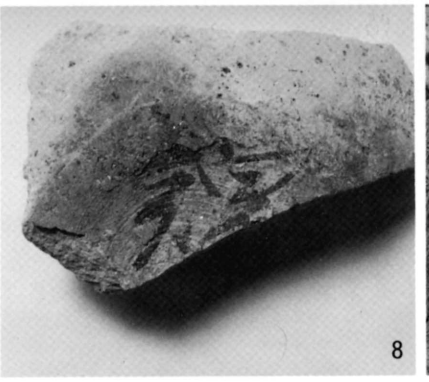


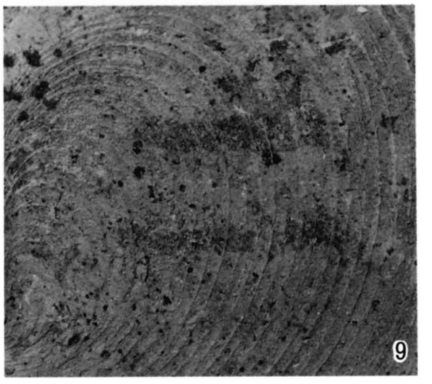
図版49　1～7　第5層　出土遺物
8～12　第6層　出土遺物

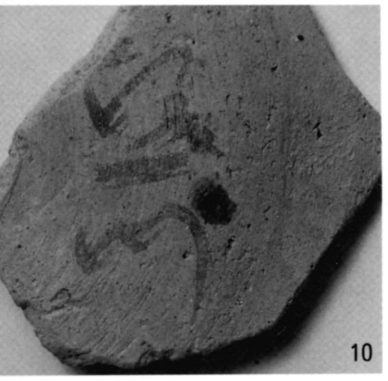


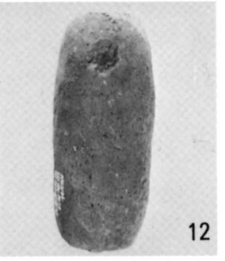


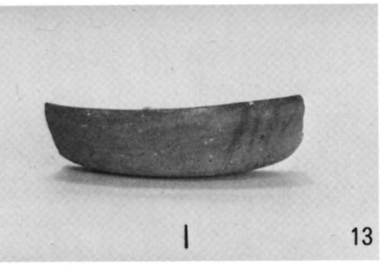


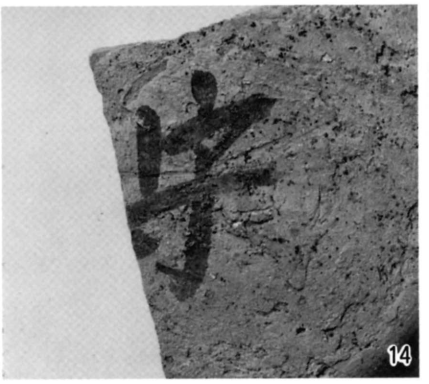


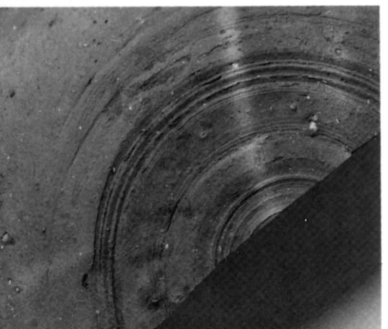




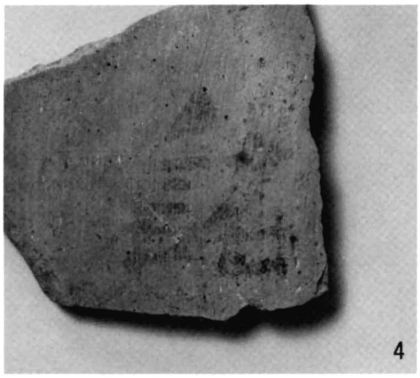


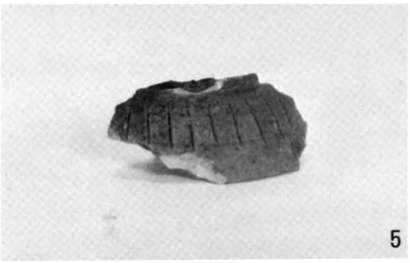


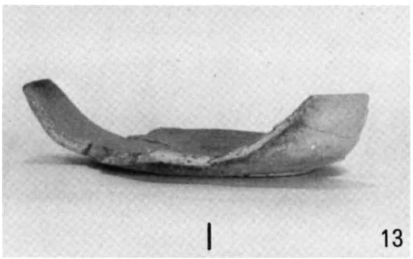


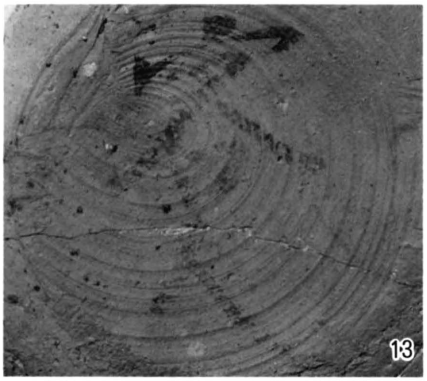


図版50　1～12　第6層　出土遺物
13～17　第8層　出土遺物

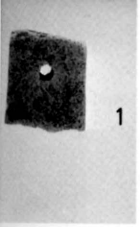


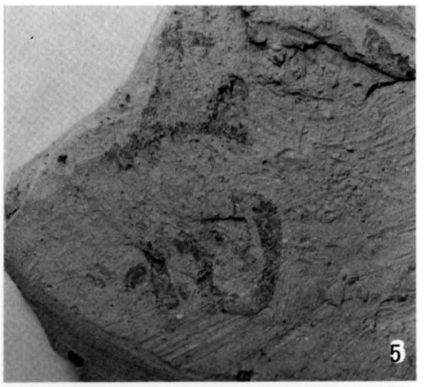


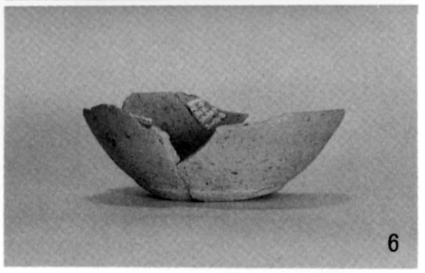




図版51　1～15　第９層～第10層　出土遺物







図版52　1・2　第9層
～第10層　出土遺物
3～8　第11層
～地山層　出土遺物

図版53　1～19　地山直上互層堆積（炭化物・焼土・黄白色粘土）

秋田市教育委員会

秋田城跡調査事務所

発行　昭和62年３月31日

秋田市教育委員会

株式会社 三戸印刷所